
魔法少女リリカルなのは 魔法少女は儚き幻想《ヒト》と共に歩む

Yehlemihis

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 魔法少女は儚き幻想ヒトと共に歩む

【Nコード】

N7497K

【作者名】

Yehlemihass

【あらすじ】

海鳴市に住んでいる「四人兄妹」の末っ子の少女高町なのはは「力」を欲していた。大切な人、「義兄」を守ることのできる「力」を。守ることは出来なくても、手助けは出来るであろう力、「義兄」の持つてる「力」「魔術」を。でも、自分にはその力を手にすることが出来ない。だから他の「力」を手に入れようとした。資格のいない自分の中にある「力」の象徴、父と兄と姉が持っている「力」、「剣術」を。だが、これも駄目だった。才能が無かった。時間を掛ければある程度までモノにすることは出来るが、時間がかかり

過ぎる。なのは今すぐに力が欲しかった。「義兄」を手助けしたかったから。「一緒」に居たかったから。だから怨んだ。憎んだ。‘力’を持っている父を、兄を、姉を。だが、そんな想いが通じたのか、小学三年生になった頃、なのはは‘力’に出会う。自分が欲していた力、「魔術」以外の力「魔法」を。「魔術」と「魔法」が交叉するとき、モノガタリの幕が上がる。『魔法少女リリカルなのは』の二次創作物です。二次創作やオリジナル主人公、設定がお嫌いな方は止めたほうが良いと思います。またこの作品はFateの魔術関係の設定と「とらいあんぐるハート3」のキャラや設定を独自解釈したものも使っています。そうした独自解釈や独自設定を嫌う人もお止めになったほうが良いと思います。「魔法少女リリカルなのは」の設定など間違い、矛盾に関しては御指摘して下さい。れば、なるべく早く直しますので、ご遠慮なく御指摘してください。初心者なので、誤字脱字や理解できない描写が多々有ると思います。がそちらの方もご指摘してくださいと幸いです。

*Fateキャラを出すことになりました。苦手な方は回れ右を。

1 プロローグ 〈闇夜〉 (前書き)

拙い文章ですがよろしくお願ひします。

1 プロローグ 〈闇奏〉

少女は泣いていた。

涙を流していたわけではない。声に出していたわけでもない。

でも、少女の心は確かに泣いていた。

少女の心は叫んでいた。

誰か助けてと、

独りはいやだ、一緒にいてと。

それを聴いたのは長年暮らしていた家族ではなく最近一緒に暮らすようになった少年だった。

少女は少年に縋りついた。

父も母も兄も姉も、誰も気づいてくれなかった心の叫びに気づいた初めての人。

それを逃したくなかったから。

少年は縋りついてきた少女を拒むことなく受け入れた。

でも、少年は少女に特別なことはしなかった。遊んですらいなかった。

ただ一緒にいた。

そう、「一緒に」にいた、ただそれだけのこと。

だけど、少女にはそれで満足だった。

少女は「独り」がいやだった。怖かった。

だから、「一緒」にいてくれれば、それだけで幸せだった。

その内、少年の隣には常に少女が居るようになった。

少年の隣には、いつしか「居場所」が在った。

少女だけの「居場所」が。

少女は救われた。

だが、

少女が少年により救われたことによつて、後に、救われない者が出ることになっているとは誰も知らない。

それは少女が泣いているときに苦しんでいた「少年」。

少年以外の誰かが、父でも母でも兄でも姉でも、他の誰かの手によつて少女が救われたのなら、

この「少年」は救われたのだろう。

だが、少年が救ってしまった。

「これにより、」「少年」は苦しむこととなる。

その少年の名は白夢理異菟

少女を救った「少年」だった。

1 プロローグ へ 闇奏 へ (後書き)

ご指摘がありましたら連絡ください。

2 第一奏 夢

「?????SIDE」

(……………か……………れか)

まどろみの中、誰かが呼び掛けて来た。

(…声を聴いて、ボクの声が聞こえますか)

何、いったい何なの？ -

(力を貸して)

「っ」

その言葉で、私はこれが夢だと判っているのに、叫ばずには居られなかった。

「‘力’なら、私が貸して欲しいぐらいなの!!」

私は力が欲しかった。欲しくて欲しくて堪らなかった。力を持っている兄や姉に嫉妬して日々を過ごしている。その私に向かって力を貸して欲しい？ 冗談じゃない！ 本当に寝言は寝てから言ってほしいものだ。

(お願い)

まだ声が聞こえてくる。こんな悪夢、さっさと覚めて欲しい。

(力を、貸して)

うるさい。黙って！ いったい何の嫌がらせなの！

(“魔法の力を”)

「ッ！ ちょ、ちょっと待って！」

私は慌てた。

「ねえ！ 魔法って何！？ ‘魔術’ の間違いじゃないの！？」

義兄から聞いた魔術というモノ。それは確かな‘力’だった。そしてその魔術の話の中であまり触れられなかった、“ありえないコトをなす術”。それが“魔法”。

なのに、なんでそんな話が出てくる。ただの夢じゃなかったの？

最初は自分の願望が強すぎて夢で嫌がらせしているんだと思っていた。

だが、自分が知っている単語が出てきた。しかもそれを求めていることにより、これがただの夢とは思えなくなってきた。

「ねえ！ 答えて！ 何であなたは魔法の力を貸して欲しいの！」

その声は答えない。

「ねえってば！ あなたも‘力’が欲しいんでしょ！？ 私みたい

に！ 教えて！ つ！？」

唐突に妙な浮遊感が体を包んだ。

これは経験で夢から覚める感覚だと知っている。

もう覚めるだろう。意識が遠のいていく。

（誰か、魔法の力を）

最後にその言葉が頭に響いた。

くなのはSIDEく

午前七時

PIPIPIPI , PIPPIPI ,

目覚ましのアラームで私は起きた。

ポチッ

「にゅわつあ〜〜」

アラームを止めて自分でも奇怪とわかる欠伸を上げる。

「~~~~んんう。やっぱり悪夢なのかな、アレ」

そんなことを呟き、夢について考えようとした瞬間、

コンコン、ガチャッ

部屋の扉がノックされ、開かれた。入ってきたのは

「おはよう、なのちゃん」

微笑みながら呼びかけてくれる、自分がもっとも大好きな義兄、

「おはよ、リイちゃん」

白夢理異菟だった。

2 第一奏 夢（後書き）

中途半端ですみません。

3 第一奏 望み（前書き）

サブタイトルで時間掛かりました。

3 第一奏 望み

「なのはside」

「なのちゃん、どうかした？」

「へ？」

挨拶が終わると、リイちゃんがいきなりそんなことを聞くものだから私はマヌケな声を出してしまった。だから聞き返した。

「何で？」

私がそう返すとリイちゃんは何も答えずに近付いて来て顔を覗き込んできた。そして一言、

「悪夢でも見たの？」と心配そうに聞いてきた。顔が近いたため私は緊張しながらもそれを極力出さないように苦笑して「少し、ね」と返す。

「平気？」

「大丈夫だよ」

「そう」

納得していない顔をしながらも追及を止めて顔を引っ込めるリイちゃん。私は小さく息を吐く。リイちゃんと至近距離での会話は心臓に悪い。心臓の音がうるさい。

改めて前に立っているリイちゃんの姿を眺める。

白に蒼が少し混じっている髪。男の子なのに後ろの髪をゴムで縛って腰まで無造作に垂らしている。身長は中学一年生の平均と同じくらい、百五十五センチ、体重は「ヒミツ」らしい。体格は華奢で女の子みたい、というか殆ど女の子にしか見えない。服装でしか判断材料がない。声もソプラノで、声変わりもしていないし、これからもしないだろうとは兄の言。左目の色はブルースフィアのような蒼色。そして最後に右目の黒い眼帯（白い眼帯見たこと無いけど）。

この眼帯には秘密があり、眼帯に隠されている右目にも秘密がある。つまり、「魔術」に関係するということ。ちなみに魔術については家族みんなが知っていることだけど、右目に関することを教えて貰ったのは私だけで、リイちゃんと二人だけの秘密になっているの

「あれ、いきなり笑顔になったね」

「うん」

リイちゃんと二人だけって考えるととても幸せな気分になれるの。

「じゃ、とりあえず時間見ようか？」

「じゃ？」

目覚まし時計の方を指差され、そのまま時刻を確認してみると

「し、7時、15分？」

え、うそ。私、10分以上もトリップしてたの？

唐突にだが、私に通っている「私立聖祥大付属小学校」はバス通学である。私は朝弱いので寝ていられる時間はギリギリまで使っている。なので、朝私が使える時間はかなり少ない。なのに、10分以上トリップしている時間は ない。それにより導き出される答えは、

「ち、遅刻する〜〜〜〜！」

である。

私は即座にパジャマを脱いで制服に着替える。部屋にはリイちゃんがいるが何の問題も無い。たまに一緒にお風呂入ってるぐらいだ。今更着替えてハズがしがつたりはしないし、寧ろいつも見てくれtゲフンゲフン。そんな感じでノープロブレム。

私は脱いだパジャマを持って部屋を出ようとするが、一旦そこでとまりリイちゃんのほうに向き直る。

「？ なに？」

きよとんしてみてくるリイちゃんに、私は今まで何度もしてきた質問をする。

「私って、魔術回路……ないんだ、よね？」

リイちゃんはその問いに少し寂しそうな顔をしながら頷く。

「だから、魔術も“魔法”も、使えないんだよね」

「そっだよ」

いつもど通りのその答えに、小さく「うん、そっだよね」と返して部屋を出て行った。

部屋の中でリイちゃんが本当に寂しそうな表情で何か呟いていたのを私は知らない。

Side out

Side in

Side

部屋から出て行ったなのちゃんの後姿を見て、私は呟く。

「確かに、“魔術回路”はないよ。でも」

天井を仰ぎ、やるせない気持ちで言う。

「“リンカーコア”は在るんだよ、なのちゃん」

やるせない。本当にそう思う。何でなのちゃんにそんなモノが在るんだろう？

これは自分の中で幾度となく繰り返された問い。

それに対する答えは無い。

いや、あった。ひとつだけ。

「世界はいつだって理不尽だからか」

今も昔も、世界には理不尽なコトが溢れている。

それは私自身が、よくわかっている。その‘象徴’、みたいなモノだから。

でも、せめて。

「なのちゃんぐらい、そんなの無くたって良いと思うんだけどね」

これからのちゃんは否応無しに巻き込まれる。

それが‘力’を持ってしまったが故の必然。異端は異端を呼び寄せ、力と力はぶつかり合う。なのちゃんは力を欲していた。それが叶うのだから。いや、元から持っていたのだから、それを自分で望むのだから、拒むよりはずっと良いだろう。でも

「出来れば、ずっと‘普通’の生活を過ごしてほしいなあ」

そう願わずにはいらなかった。

だが、その願いがまさか今日で崩れ去ることを理異菟は知らなかった。

3 第一奏 望み（後書き）

サブタイトルに思うところがあったら意見お願いします。

4 第一奏 声（前書き）

読みにくいのでしょうか？

4 第一奏 声

くなのは side

学校の屋上

昼休み

あれから大急ぎで朝ごはんを詰め込み、バス停まで走ることでなんとかバスに間に合うことが出来た。

少しまでやっていた剣術の早朝訓練のお陰だと思う。もしそれが無かったら、絶対に間に合っていなかった。

結局才能が無くて止めたが、こんな恩恵おんけいが得られるとは思わなかった。努力は人を裏切らないとはよく言ったものだ、とバスの中で思っていた。

で、現在は四時間目が終わり昼休みになったので屋上のベンチに座り親友で同じクラスのアリサ バニングスちゃんと月村 すずかちちゃんと雑談をしながらお弁当を食べています。

たまにアリサちゃんがおかずを摘んでいくのがとても腹立たしいです。

せつかくのレイちゃんの愛情お弁当が！

「ねえなのは、聞いてる？」

「うん。聞いてないよ」

アリサちゃんが呼びかけてくるが無視。

リイちゃんお弁当を横取りする人の話なんか聞くわけないの。

「ええい！ 聞きなさい！」

ぱしっ

「むう」

箸を取られてしまった。これでは食えないの。

仕方ないから話を聞くの　なんてことはなく、即座に箸を取り返す。

「で、何の話？　アリサちゃん」

「ったく、少しは話に耳を傾けなさいよ！　話っていつのはさっきの授業で将来について聞かれたでしょう？」

「え？」

「え？　ってあんたさっきの授業聞いてなかったの？」

「うん全く」

「あんたって奴はー！」

「まあまあ、しょうがないよアリサちゃん。なのはちゃん、算数と

かの五教科の授業じゃないと話聞かないんだし」

「算数の授業でもほとんど聞いてないけどね」

ケロつと答える。

私は殆どが家でリイちゃんに教えてもらっているため、学校に行く必要性を感じない。

家で通信教育しているようなものなのに、何でわざわざ学校に行かなきゃいけないのか。まあ、リイちゃんが行きなさいって言わなきゃボイコットしてるし。

「あんた学校に何しに来てるのよ！ ふう、まあいいわ。とりあえず、あんたは将来について何か考えてないの？」

「お弁当食べるに。そういうアリサちゃん達は？」

「今聞き捨てならないこと言わなかった、あんた？ とりあえず聞かなかったことにするわ。あたしはいっぱい勉強して、お父さんやお母さんの会社継ぐと思うわ」

「わたしは機械系 工学系の専門職だと思うよ」

「ふーん」

二人とも、ちゃんと将来のこと考えてるんだ。

「なのは、あんたは？」

箸を止めて考える。

「私は……」

その後が続かない。

それは当然だ。私はまだ先のことなど考えたことがない。

ただずっと力を欲していた。どうすれば力が入るか。

そのことだけを考えていた。

リイちゃんの手助けがしたくて剣術に手を出したりしたが、それも止めてしまった。才能があれば或いはまだ続けていて将来もそれにしたかも知れないけど。

翠屋を継ぐ？

有り得ない。私だけ平穩に生きて客商売なんてしてられないし、耐えられない。

そんなことするんだった才能がなくても剣術また手を出したほうがよっぽどマシだ。

だとしたら、

「……剣術家、かな」

ポツリと呟く。

「剣術つて、あんた、才能がないって言われたんでしょ？」

「翠屋を継いだりはしないの？」

私の呟きに二人が訊いてくる。

「その二つだったら私は剣術を選ぶかな」

「ふーん」

「そうなんだ」

「あんたも変わってるわね」

「にははは。まあね」

それから三人とも止まっていた箸を動かす。

「エビチリもーらい」

「じゃあああああ！ 何するのアリサちゃん！？」

「ふふふふ。世の中は弱肉強食なのよ。取よわられたあんたと、美味し過ぎるリーの弁当が悪いのよ。いただきまーす」

「じゃあ、わたしは春巻きとシューマイ貰うね？ ちなみに答えは訊いてないから。あむっ。ん、ほんとにリイ君のお弁当美味しい」

「すずかちゃんまで！？ 私、裏切られたの！？ しかも親友に！」

「？」

「何いつてるのよ、なのは。騒いでないで食べたら、無くなるわよ？ あと、明日は洋風が好いわね」

「誰のせいで無くなるの！ あと、何勝手にリクエストしているの！？ これ私のお弁当なんだよ！？」

「何言ってるの？ かの有名なジャイヤンはよく心の友たちにこう言ったそうよ？ 『お前の物は俺の物、俺の物も俺の物』と」

「だから何なの！？ 後それって普通は心の友に言う台詞じゃ絶対ないの！」

「ねえ、すずかも明日は洋風が好いでしょ？」

「そうだね。あとデザートにフルーツタルトが欲しいかな？」

「人の話を聞いてなのーーーーー！」

屋上では、なのはの叫びが飛び交っていた。

放課後

学校からの帰り道

ぐうぐう。

「はあー。お腹すいた〜」

そう言いながら二人の親友を睨む。

「ははは、ごめんね」

「わ、悪かったわよ！」

「でも、あまり反省はしてないでしょ？」

「うん」

「ハモツて答えなくてもいいの」

結局ほとんど二人に食べられてしまった。さすがに悪いと思った二人が自分たちの弁当を分けてくれたが、正直、どんなに美味くてもリイちゃんが作ってくれた料理以外の食べても大して腹は見たされないのだ、何故か。味だって他の人の料理なんて味が殆どしないように感じてしまう。

例外なのは飲み物だけ。

なので家ではなのはの料理は全部リイちゃんが作ってくれている。

雑談をしながら歩いているとアリサちゃんが呼び掛けてきた。

「なのは、すずか、こっち行くわよ」

そう言うとアリサちゃんが脇道にそれてしまった。

すずかちゃんと一緒に追う。

二人でアリサちゃんに理由を聞いたら「こっちの方が塾に近いのよ」と答えてくれた。

時刻が夕方のせいか、この道は少し薄ら暗くなっていた。

そのまましばらく歩いていると、

《助けて》

何か聞こえた。

「え？」

「ん？」

「どうかしたの？　なのはちゃん」

「今、何か聞こえなかった？」

「あたしは特に。すずかは？」

「わたしも聞こえてないよ。空耳じゃないのかな？」

二人には何も聞こえなかったらしい。

空耳なのかなあ。でも、夢の時の声に似ていた気がする。

「あれー、確かに聞こえ《助けてっ》ッ！！ ほら、また！」
今度ははっきりと聞こえた。いや、どちらかと言えば『頭に響いてきた』っていう表現が正しいのかな？

場所は

「こっちー！」

そう言っただけは声の方に向かって走り出す。

感だけど、多分こっちははず。

後ろでアリサちゃんとすずかちゃんが何か言ってるけど無視。そのまま走る。

感で走っているなんて言ったらアリサちゃんに「非常識な！」とか言われそうだけど。

でも、「感」には意味ある。リィちゃんが前言った。

『いい、なのちゃん。「感」って言うのは文字通り「感じ取ったモノ」のことを言うの。何も感じてはいないのに「感」とは言わないでしょ？ だからねなのちゃん。「感」を否定しないで？』

『でも、感が間違っていることだって』

『その場合は「感じ難かった」だけだよ』

『「感じ難い？」』

『そう。全部感じ取れなかっただけ。分かり易く言えば、ケータイのアンテナが3本じゃなくて1本しかなくて、データを全部読み込めなかった、みたいなの？』

『圏外じゃなくて？』

『それはない。もし「圏外」なら「感じ取れない」から。それは「感」じゃないよ、なのちゃん』

『そうなんだ』

『さつきも言ったけど、感を否定しないでね？ 「感を否定する」ってことは、自分を否定する「ことと同じことなんだよ？ それは自分、一番悲しいこと……なんじゃないかな？』

『じゃあ、「感を信じる」ってことは、自分を信じるってこと？』

『そうだよ。全ての事柄には意味が存在するんだよ？ だからなのちゃんが感じ取ったモノだってなのちゃんには意味があるんだ。分かった？』

『分かったー』

あの時のリイちゃんの眼はとても真剣で、悲しそうだった。

もしかしたら、過去に「何か」在ったのかも知れない。

でも今はそのことを置いておく。

ただひたすらに走る。

すると、

「フエ、レット?」

傷だらけで倒れてるフェレット? がいた。

しゃがんで触れてみる。お腹が上下しているので、生きているのが分かる。

「何でこんなにスタボロ?」

確か、イタチ科の動物って凶暴なの多くなかったかな? それにフェレットってスカンクみたいに臭い液飛ばすとかして外的から身を守るんじゃない? -

そんなことを思っていると、アリサちゃんとすずかちゃんが追い付いてきた。

「はあ、はあ、ったく、いきなり走るんじゃないわよ」

「そうだね。ちょっとびっくりしちゃったよ、なのはちゃん」

「にゃははは、ごめん」

私は傷だらけのフェレットを負担に感じさせないように抱えて立ち上がる。

すると、私の腕の中にいるフェレットを見てアリサちゃんが訝しげに見る。

「あれ、なのは。それどうしたの？」

「ありさちゃん、それ、って。フェレットじゃないかな？ 多分」

「此処に来たら倒れててね」

「じゃなくて、それ、助けるの？ あんたが？」

「そうだけど？」

そう答えると二人とも驚いた顔をする。

「珍しい。あんた基本は『誰かが苦しんでいる？ ハツ、リイチヤんとお母さんと友達以外はずっと苦しんでいれれば？』があんたのスタンスでしょ？ どういう風の吹き回し？ お弁当食べ損ねて精神がヤバイ領域にでも入ったの？」

酷い言われ様だ。

「別に？ 此処まで走ってきて今更助けられないのも来た意味なくなっちゃうし、どうせ二人は助けるでしょ？」

「まあね」

「そつだね」

「だから」

「でもそいつ、ピクリともしてないわね」

「息はしてるよ？ あ、止まった」

「……………」

「やばいじゃない！ 獣医は！ 獣医は！？」

「と、とりあえず消防隊に電話……………」

「かなりテンパってるね、すぐかちゃん。そこはせめて救急車だよ。とりあえず近くの動物病院に行こうか？」

慌てふためく二人を促しながら動物病院に足を向ける。

ふとフェレットを見ると首には赤い宝石のような物が架かっていた。それが気になり見ていると、

「あれ？」

一瞬だけ、強く光ったような気がする。

「夕日、かな」

ただの反射と思い、宝石から意識を外す。

夕焼けの中で、もう一度宝石が輝いていた。

4 第一奏 声（後書き）

イエレミー「はい、すみません。毎回中途半端な作者です。次こそはいよいよ初めての戦闘だと思います。短すぎて意見も何も無い、と思いますが、気が付いたことがあつたら意見お願いします」

5 第一奏 始まり（前書き）

時間、掛かりました。

5 第一奏 始まり

くなのはsideく

カタカタカタカタ

あれからしばらくして、瀕死のフェレットを榎原動物病院に連れて行った。

特に他の患者はいなかったのですぐに診てもらうことになった。

診察の結果、衰弱はかなり激しいものの、怪我はかすり傷が多いだけで深刻な傷はなかったらしい。

その時、フェレットが一回だけ起きて、指を出してみたら舐められた。

その後またすぐに寝てしまった。

とりあえず今日一日様子を看ましようとのコト。

その間に誰が飼うか決めておいてねっと、別れ際に先生に言われた。

私たち三人の中でもう誰が飼うかは決まっているかのようなものなので、その問題もなかった。

もちろん飼うのは私の家。

アリスちゃんの家は犬がいてフェレットが落ち着かないだろうし、同様にすずかちゃんの家も猫が大量にいて駄目。

消去方で私。

それに拾ったのは私だからその責任も果たさなくちゃいけない。

まあ、これは表向きの理由。

本当の理由は、今朝の夢と、フェレットを見つける時の声が何か関係していると感じたから。

何がどうこれから関係していくのかは分からないが、これは偶然ではないと思う。

カタカタカタ

「願わくば、これが私にとって幸多からんことを。っと。はい、日記終了。保存して、ログオフっと」

最後に臭いセリフ（でも若干本音）を書いてからパソコンの電源を落とす。

同じ態勢でいたので少し疲れたためベッドにダイブする。

あの後フェレットを病院に預けてから私は家にさっさと帰り、アリスちゃん達は塾に後れながらも行った。二人に塾を誘われているが行かない。勉強はレイちゃんがいってくれば満足なのだ。

家に帰った私はフェレットのせいで少し汚れてしまったのでさっさ

とお風呂に入った。リイちゃんが「鍛錬」でいなかったため一人で入浴して少し寂しかったのは、結構大きいことだと思う。

風呂から上がり、髪を乾かし終わるとちょうどリイちゃんが帰ってきてくれて、それから私の夕ご飯を作り、しばらくして皆で食事。

食事の会話の中で、今日フェレットを拾ったを話した。

そして皆に迷惑が掛かるのを承知で、フェレットを飼いたいとお願いして頭を下げた。

それを伝えると皆が皆、箸を止めてぼかーんとしていた。

ちなみに一番のバカ面は美由紀お姉ちゃんだった。

最初に元の戻ったのはやはりリイちゃんとお母さん。次がお兄ちゃん、お父さん。最後にバカ面「ちよつと！ それ酷くない!？」
無視。

とりあえず何で固まったのかを訊いてみると、

「なのちゃんが見ず知らずの人？に優しくした」

「なののが私に我俣言ってくれた」

「なののがお父さんをお願いしてくれた？ 今まで何も行ってくれなかったのに」

「なののが動物を助けた、普通見捨てるのに」

「なのはが人に頭を下げた？ ありえない」

順番はさつきと一緒に。皆が普段私のことをどう思ってるかよく分かった。あと、最後がムカつくの。

まあ、そんなこんなで、滅多にお願いしない（リイちゃん以外に）私がお願いしたということもあって、了承してくれた。

主に私が面倒を見て、何かあったらリイちゃんにも頼んでOKとのこと。

明日リイちゃんと一緒に榎原にフェレットを受け取りに行くことが決まった。

今はもう夜で、お外は真っ暗。

なんとなく今日は気分的にパソコンを起動させていて、日記も書いた。

私はたまにだがかこうしてパソコンで日記を書いている。まあ、パソコンで「書く」という表現は間違っている気もするけど。

それも終わり、後はもうパジャマに着替えて寝るだけ。そんな時、

キイイイイイイッ！

「！」

急に耳鳴りのような感覚に襲われる。堪らず耳を押さえる。

「っ、この感じは、声を感じたときの奴を強く、したのかな？」

『聞こえますか？ 僕の声が、聞こえますか？』

夢とフェレットの時に聞こえた声、今度はハッキリと聞こえる。

「二度あることは、三度あるってね？」

耳を押さえながら苦笑する。

『僕の声が聞こえる貴方、僕に少しだけ、力を貸して下さい！ お願、い僕の、ところへ…じか…がない、き…けん…』

最後が急に聞こえ難くなった思ったら、耳鳴りのような感覚が消えて力が抜けてその場へたり込む。

「これって間違いなく、あのフェレット、に関係してるよね？」

俯いて誰にでもなく問いかける。

顔を上げて自分の思いを吐露する。

その瞳には折れない、意思が宿っていた。

「全てのことには意味があり、感にも意味はある。そして、その感を否定することは自分を否定すること。私はまだ、自分を否定したくない！」

そう決意して、立ち上がると

「それが、答えかい？」

「!?!」

いきなり声がした。

声のした方を振り向くと、部屋の扉が開いて、その扉に寄り掛かってこちらを向いているリイちゃんがいた。

「もう一度訊くよ？　それが、答えかい？　『高町なのは』」

リイちゃんがフルネームで問いかけてくる。この意味は家族なら皆知っている。

嘘偽り、黙秘は許されない時の言葉。

「己こゝろの、“自分自身”の答えを出さなくてはいけない問い。

私はそれが分かっているから、リイちゃん　理異菟に真正面から向き合い言葉を紡ぐ。

「そうだよ。ここで行かなかつたら、きっと後悔する」

「それは『感』？」

「そう、『感』だよ」

「「……………」」

無言のままお互いに見詰め合う。決して視線を逸らさず。

沈黙が場を支配する。

やがて、

スッ

「え？」

リイちゃんが扉から離れた。

「いいの？」

問いかけると、リイちゃんは肩をすくめた。

「なのちゃんが決めたなら、後悔しないのら、私に邪魔する権利なんてある筈ないから。でも」

「何？」

「行ってしまったら、本当に後戻りは出来ないよ？ それだけは言
つて置くね？」

「……うん。心配してくれてありがとう。あと、私に嘘ついてたの
？ 力が無いって」

「嘘は言ってないよ。私はただ、**魔術回路**がないとしか言ってな
いよ」

「他の力ってこと？」

「そつだよ」

少しの反抗を籠めて睨む。

「……屁理屈っ」

「悪かったね!?!」

そう言つて背を向けて部屋を出ようとするが一旦止まり、

「他の皆は私が抑えておくから、早く助けに行つて来な? 抑え終えたら、後から追い駆けるから」

そう言い残して部屋を出て行く。恐らく本当に抑えに行つてくれたのだろう。

「行つてきます」

その心遣いを無駄にしないために私は家を飛び出した。

夜道を走ること十分弱、全力で走つたため息を乱しているが槇原動物病院の前に今立っている。

息を整え敷地内に入ろうとすると、

キイイイイイインッ!

耳を劈く様な音に襲われる。

目を瞑り、耳を両手で塞ぐ。

すると一瞬、体を何かか拭きぬける違和感を感じた。

それと同時に音も止んだ。

目を開けるとそこには

「な、なにこれ？」

さっきとは違う景色が映っていた。

世界が、少しだけ色彩を欠いているような印象を受ける。

少し違うが、これに似たものを私は知っている。

「結界」

リイちゃんが以前披露してくれた「魔術」。

あれは色彩を欠いたようにはならないが、感じた印象がすごく似ている。

一度体験したお陰で平常心は保っている。だからすぐに行動する。

「フェレットのところだ、っ！？」

走りだす瞬間、病院の窓から、フェレットが飛び出すのが見えた。

だが、その後ろに私より少し大きい、どす黒い塊の様な怪物がいた！
フェレットは近くに在った樹に逃げ込むが、怪物が樹に体当たりをかます。

その衝撃で樹が折れ、フェレットが空中に投げ出された。

それを見た私が慌てて駆け寄り両手でキャッチする。

「来て…くれたの？」

抱えられたフェレットが私を見上げながら喋る。

「え？ …しゃ、しゃべった?!」

あまりの珍事に声が裏返る。が、直ぐに気を取り直し、怪物がこちらに気づく前にその場から逃げる。

色彩の欠いた町を走っていると、

「お願い、僕に少しだけ力を貸して！ 君には資質があるんだ！」

「資質？」

走りながら問い返す。

「僕はある探し物の為に、此処こゝでは別の世界から来ました。…でも、僕一人の力では思いを遂げられないかも知れない。だから…迷惑だ

とは分かっているのですが、資質を持った人に協力してほしくて……」

不意にフェレットが私の腕から飛び降り、向き合う。

「お願いです、御礼はします。必ずします！ 僕の待っている、力を、君に使うて欲しいんです。『魔法の力』を」

「魔法の力……」

私は内心複雑だった。

このフェレットが言う「魔法の力」がどういふモノかわからないが、リイちゃんたち「魔術師」が畏怖と羨望を籠めて呼ぶ、「魔法」と同じ単語なのだ。

リイちゃんが言うには「今現存する魔法使いは五人に満たない」らしい。

リイちゃんが言う「魔法」とは違うのだろうが、それでも同じ「魔法」が私には使えるといわれれば、力が手に入るといふ喜び反面、畏れ多いというのが反面ある。

そんな気持ちを抱いていると、上から怪物の唸り声が聞こえた。

即座にフェレットを引っ掴み、電柱の影に飛び込む。

その直後にさっきまでいた場所に怪物が激突していた。

「お、お礼は必ずしますから！」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ!？」

後ろを見ると、地面を砕いた怪物が凹みから抜け出そうとしている。

「ど、どうすればいいのっ?」

「これを!」

フレットが首にかかっていた赤い宝石を渡してきた。少し、暖かい。人のぬくもりみたい。

「それを手に目を閉じて、心を澄まして! 僕の言う通りに繰り返してっ」

「う、うん。わかった」

「いい、いくよ!」

「っ!? 危ない!? くっ」

いきなり怪物が突っ込んできた。

それを間一髪地面を転がって避ける。

即座に立ち上がって逃げようとするが、それよりも早く怪物が襲い掛かってくる!

避けられない 死

腕を盾に 死

他の選択肢 なし 死

え？ 死ぬの？ 私？

怖い。怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い
いこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわい
いこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわい
イコワイコワイコワイ

コワイ！

だから、

「リイちゃん！……！」

私は叫んだ。

私を助けてくれるモノの名前を。

独りひとりの暗闇から救ってくれた人の名前を。

そうすれば

「呼んだかい、なのちゃん？」

彼は、助けに来てくれるのだから！

リイちゃんは私と怪物の間に颯爽と現れると、一瞬で怪物との距離を零にして

「でかい雑念だね

怪物を拳でドゴツ！っといい音を出して叩き伏せ、

邪魔だよ？」

地面にめり込んだ地怪を物面もろ共決り、右足で一蹴した。

蹴られた怪物は物凄い速さで吹き飛び、一回、三回とバウンドしてようやく止まった。

その光景を見て、私とフェレットは呆然としてしまった。

「軽いね、あの雑念」

リイちゃんが殴った手をぶらぶらさせながらこっちに歩いてきた。

「どう？ 怪我は無い？」

「う、うん。ないよ」

「そう、よかった」

私が無事と分かると微笑むリイちゃん。

その時になって私はリイちゃんが今までに見たことも無い格好をしていたのに気づいた。

漆黒の外套にも黒い袖の無いシャツ。両手には黒い革のグローブ。下は何故か黒のショートパンツに黒のサイハイソックス（女の私でも萌えた）。靴も黒で。最後に首には黒いチョーカーをしていた。髪だけいつも通りに無造作に垂らしていて、眼帯も変わっていない。

うん、綺麗だね。可愛い、という表現よりもカツコイイと表現される女性だね。「女の子」じゃなくて「女性」という表現じゃなきや駄目だよ。リイちゃんて足が長くてスラッとしているからこういう格好はともよく映えてるの。これで男なんだから、世の中絶対に間違ってるよね？

「あれ、どうかした？」

そんな感想を抱いていると、リイちゃんが不思議そうに訊いてきた。

「いや、どうもしないけど…その格好は？」

気になるので訊いてみる。遂に女に目覚めたのかな？

「ああ、これ？ これが私の“魔術師”としての格好かな？ これ
で大半は戦闘もするし」

「へー」

「あ、あの、あなたは？」

正気に立ち直ったフェレットがリイちゃんに問いかける。

「私？ 私はなのちゃんの義兄だよ」

「なのちゃん？」

そう言っつてフェレットは私を見上げてくる。

その時になつて私はまだ名乗ってないことに気がついた。どちらかと言えば、名のる暇がなかった、が正しいが。

「あ、そう言えばまだ名乗ってなかったね。私高町なのは。君は？」

「僕はユーノ・スクライアです。ユーノが名前でスクライアが部族名です」

「私は白夢理異菟。兄っついうけど、義理だから苗字は違つよ」

「あの、それで“魔術師”というの…は？」

「まじゅ「グルワアアツ！！つち！ 引っ込んでなさい！」「ガツ！」話は後！ スクライア、アレ、どうすればいい？」

リイちゃんはいきなり突っ込んできた怪物を裏拳で跳ばす。

「あ、あの、封印は「無理！」っ！ 分かりました。では時間稼ぎをお願いしますー！」

「了解！」

するとリィちゃんは跳ばした怪物に突っ込んでいった。

「なのは！」

ユ一ノ君が呼び掛けてくる。

「さっき言ったとおり、眼を閉じて心を澄まして！」

私はポケットに入れて置いた宝石を取り出し言われた通りにする。

「僕の後について！」

頷く。

「我、使命を受けし者なり」

「我、使命を受けし者なり」

「契約の元、その力を解き放て」

「契約の元、その力を解き放て」

言葉を紡ぐごとに、宝石が脈動する。

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

ドッゲンツツ！

「そして、不屈の心は」

「そして、不屈の心は」

「この胸に！！」

「この手に魔法を！ レイジングハート、セットアップ！！」

《スタンバイ、レディ、セットアップ》

宝石から光が夜空に向かって昇る。

「なんて魔力だっ、いい？ 落ち着いてイメージして。君の魔法を制御する、魔法の杖の姿を！ 君の身を守る強い服のイメージを！」

「え、えーと、えーと……と、とりあえずこれでどう！？」

私が杖と服を思い描く^{イメージ}し終わると体が光に包まれた。

side out

side in
理異菟side)

「時間稼ぎをお願いします!」

「了解!」

即座に裏拳で吹き飛ばした雑念怪物てきに向かう。

怪物も私のことを敵と認識したらしく、私に向かって突進してくる。

ん? なのちゃんも始めたみたいだね。

「真意アンサズを接げるモノ」

詠唱し、首のチョーカーのルーンを発動させる。

さて、こちらはじも創めよう。

「真意コネクトの幻想を」

自分の投影げんてい魔術を!

投影魔術で刀を作り出し、上から縦一文字に切り捨てる。が、

「ちっ、再生しますか」

即座に切られたところからまたくっつき始める。面倒な。これなら殴ったほうがまし。

刀を消し、仕方なく怪物に肉薄、右腕を引き絞り

「ウルス退かぬ戦陣」

淡い碧色あおの光を纏った打突あおが放たれた。

それは怪物に突き刺さり、風穴を開けた。

「あれ？」

少し予想外なことが起きた。

あれ、吹き飛ばす筈が……

腕を抜く。抜くときに「ズプツ」という音が聞こえたのが印象的。

「ウオオオウオオオツ！」

怪物が真ん中に風穴を上げて唸る。

だが、中々再生が始まらない。切ったときは直ぐにくつつき始めたのに。

「殴ったときに軽いとは感じたけど、軽すぎっ」

どうやら継続的なグローブルンの魔術のみでさえ軽く感じる程なのに、それを瞬間的に爆発させる退かぬ戦陣ウルスだと、やり過ぎてしまっらしい。

「うわ、萎えますね。これは……」

口元に手を添えて考える。

どうしましょう。確かに私では封印出来ませんが、この程度の相手なら一日中は時間を楽々稼げます。

だからと言って、ボコボコにし過ぎてしまつとなのちゃんの出番が薄過ぎます。せっかくの初陣、満足感を味合わせたほうが好いでしょう

「よし！ コネクト 真意の幻想を、セイバー 凍れる刺剣、バレル セット 軍勢展開」

投影魔術でルーンが施されている剣を作り出す。その数六本。

ルーンが施されている物（以前自分が全部ルーンを施して全て解析し、投影で作れる様にした物）を一気に六本作り出すのは流石に少し疲れる。

「ファイア 射出！」

五本の剣を怪物の周囲に突き刺し、一本を真上から怪物に突き刺す。

そして右手で宙にルーンを描き、

「スリサズ 凍てつく縛棘」

刺した剣から氷の棘が生えてきて、怪物を突き刺し、氷らせる。

怪物は身動き出来なくなっている。

「結界に加えて、スリサズ 凍てつく縛棘まで使ってるから当然なんですけど

ね

肩をすくめて苦笑していると、急に強い魔力を感じた。

「なのちゃんの魔力ですか、やはり魔導士の魔力はでかいですね」

振り向いて見てみると、魔力を空に昇らせている彼女の姿が在った。

そして何やらスクライアと会話して、桜色の光に包まれていった。

そしてそれが納まると、

「ん？「ふえ？ ふえっ？ うそお！？」 あらあら」

いかにも“魔法少女”らしい格好をした、慌てふためいたなのちゃんの姿が在った。

「魔法少女なのちゃんっ、でしょうか？」

クスクスと笑いながら私は、妹の元に向かった。

side out

side in

（なのはside）

光が収まってから眼を開ける。

そして、自分の格好を見る。

「ふえ？ ふえっ？ うそお！？」

手に持っているのは先端に金の装飾があり、それに守られている様な赤い宝石がある杖。

そして服は聖祥大の小学校の制服のラインが青に変わってスカートにフリルが少し付いたり所々装飾がつかされ、後はリボンが大きめになったりつと制服を全体的に可愛らしくアレンジした感じだ。

自分でこんな服を思い描いたのが信じられない。

「な、なんなの、これえ？」

自分で思い描いておいてそれはないんじゃない、と言われるかも知れないが気にしない。

クスクス、と誰かが笑うのが聞こえた。

「似合ってますよ、なのちゃん？」

リイちゃんがクスクスと忍び笑いしながらこちらに来た。

「むう。じゃあ、なんで笑っているの？」

笑われるのが気に食わず頬を膨らませる。

「いえ、あまりこういう可愛い格好は見ませんから、つい」

「それじゃあ、普段の私の格好がかわ「あ、あの！」なに、ユーノ

君！」

リイちゃんとの会話の最中に遮ってくれた声の主を睨む。

「ひいつ。ライトさんが折角時間を稼いで来てくれた訳ですし、早く封印をっ」

そう言えば、リイちゃん此処にいるけど、怪物は？

「あの雑念なら、そこにいるよ」

自分の背に向けて指を刺す。

「えええええっ！？ なに、何で氷っているの？」

そこには氷の棘みたいのに突き刺されて氷付けにされた怪物がいました。

「あれは、氷結？！ レアスキルなんですか！？」

ユーノ君は氷付けされた怪物に驚愕しながらリイちゃんに尋ねる。

「いや、スキルって程じゃ……。ルーンだし、基本かな？」

「魔術士」ってあれが基本なの？ そう思わずにはいられなかった。

「あの拘束も、後2、3分しか持たないだろうし、早く封印とやらをして」

「そ、そうですね。なのは！」

「何、どうすれば？」

「まずは僕たちの魔法の説明から。僕らの魔法は発動体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。そしてその方式発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです。そしてアレは忌まわしき力の元に生み出された思念体。アレを止めるには封印して元の姿に戻さなくてはいけないんです」

「うん」

「簡単な魔法は心に願うだけで発動しますが、今みたいに封印する場合、より大きい力を必要とする魔法には呪文が必要なんです」

「呪文？」

「そう。心を澄ませて。心の中に貴方の呪文が浮かぶ筈です」
「言われたとおり眼を瞑り心を澄ます。」

「……っ！ これ！」

私は目を開きレイジングハートを思念体に向ける。

「リリカル、マジカル」

「封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！」

「ジュエルシード封印！」

《シーリング、セットアップ》

レイジングハートの先端が変形し桜色の羽の出てくる。

さらにリボンの様な魔力がレイジングハートの先端から伸びて氷付けの思念体に巻きつき拘束する。

思念体の額にナンバーが浮かび上がる。

《スタンバイ、レディ》

「ジュエルシード！ シリアル21 封印！」

《シーリング》

レイジングハートが強く輝き、リボンが思念体を包み込むと、一瞬強く光、そのまま跡形もの無く思念体は霧散した。

そして思念体がいた場所に青い宝石が落ちている。

私たちは青い宝石が落ちている場所まで行き、

「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れてみてください
さい」

ユ一ノ君に言われたとおり触れてみる。すると、杖の赤い宝石部分に吸い込まれてしまった。

そしてそれと同時に私の服が元に戻り、レイジングハートは宝石になっ
て手元に戻った。

「終わったの？」

「はい、ありがとうございます……貴方たちのおかげで大きな被害はな……」

聞くとユーノ君はそう言っつて気を失いました。

「ちょ、ちよつと平気？」

いきなり気を失ったので慌てて抱き上げる。

すると、私の頭の上にポン、と手が置かれた。

見上げると、リイちゃんが微笑んでいた。

「気を失っただけだよ。安静にさせて置けば平気だよ」

「…うん」

くしゃり、と撫でられる。

「どうだった？」

何が、とは訊かない。

「……………怖かった」

ポツリと呟く。

「リイちゃんが助けしてくれるまで、ずっと「力が手に入る」って期

待してて、そう誤魔化して……」

「……………」

「怪物の襲い掛かってきた時、避けれないって感じた。そしてそれで助からないって、‘死ぬ’って感じた。怖かった、本当に怖かった」

スツと何も言わずにリイちゃんは抱き締めてくれた。

リイちゃんの胸元に顔を埋める。

「…あつたかい」

とても暖かい。

「…大丈夫？」

耳元で訊かれる。

「怖いよ。でも……」

「でも、何？」

顔を上げて告げる。

「こっやって抱き締めてくれたら、きつと大丈夫」

「!?!? ん、そう」

一瞬眼を見開いてからリィちゃんはまた直ぐに微笑んで、一層強く抱き締めてくれた。

私は、この暖かいぬくもりをいつもより近い場所を感じていた。

5 第一奏 始まり（後書き）

イエレミー「どうも。今回も「魔法少女は儂^トき幻想と共に歩む」を読んでもうござってありがとうございます。

初めての戦闘、ということでは死を始めて感じ取る、ということにしてみました。

いや、こういうのって凄く大事だと思いますので書いてみました。まあ、リイが潰しましたけど。

少しでも読みやすかったらこれ幸いです。

読み易くないぞ！って貴方。ごめんなさい。私に文才は皆無です。ですので、応援してください。それが私の力になります。

これ、本当です。本当にエネルギーが湧いてきます。

気になること、此処間違っているぞ、という指摘も大歓迎です。そうしてくれた方が、あ、興味を持っていてくれるんだ、とより実感できますので。

ある程度の設定も投稿しますので見てやってください。

読んでくださってありがとうございます

理異菟の設定(前書き)

調べて分かったこと。サイハイソックスってオーバーニーソックスと殆ど同じらしい。ちなみに太股までのソックスのこと。

理異菟の設定

今回は理異菟や魔術の設定です。

名前 白夢理異菟
はくむりいと

左の瞳の色は碧あお 髪の色は白に蒼が混じっています。体格は華奢です。

性別 男

身長 155センチ

体重 「ヒ・ミ・ツ」らしいです。40キロはないです。30キロ内です。

生年月日 3月27日

年齢 12歳 私立聖祥大付属中学校の一年生。

部活は入ってないが、極たまに助っ人として何かやる。

特技 料理

好きなもの なのちゃん（LIKE） 猫（ちよつと肥満が好み）
暗闇

苦手なもの　　自分に好意（LOVE）を寄せる人（この場合なの
ちゃん）
機械（絶滅的。今年だけで、ケータイを3個壊した。殆ど1ヶ月に
一個壊す。滅多に使わないにも関わらず）

嫌いなもの　　どっかの傲慢な局員

血の繋がった家族、白夢は龍（はくむ）（不破の一族を壊滅状態した組織で、
士郎の旧姓は不破）の組織に属していたために、士郎たちが突き止
め殺した。

これについて理異菟は士郎を何も恨んでいない。魔術師に最低限必
要なのは一番大切な人が目の前で殺されても平常心でいられる精神
力だからだ。でも、許してもいない。この出来事が、理異菟7歳の
時で、士郎は「いくら復讐したいと思っても、その一族を滅ぼした
いわけじゃない。それにまだこんな子供を」と言っつて、怨んでもい
いから家に来なさい、と半ば無理やり連れて来られた。

ちなみにこの三カ月後に、士郎はコンサートの事件で重傷を負う。

魔術についての知識は殆ど父親と母親に持てる知識の粋を叩き込ま
れてきた。

高町家に来てからは、夏休み等に短期で「時計塔」にお世話になり
に行った。親が校長と親しかったから、その厚意で。

魔術について

理異菟が出来る魔術は解析とルーン、投影です。

解析は三流止まり。ルーンは二流（一流ではない）

投影についてはまだ秘密です。

戦闘では、主にルーンと投影を使います。ルーンを刻みながら殴ったり蹴ったり。投影でルーンが付与されている結界補助の剣や氷結停止を念頭に置いた剣を乱射しながら最後に「スリサズ」で氷り付かせて捕縛する戦い方。

ただ、相手が強者の場合は本来の戦い方である、投影で作った刀を駆使して敵を倒します。その場合、投影は作るだけ、ルーンは使いません。

魔術回路の本数は33本です。初代ではありません。

理異菟は「生み出すモノ」です。彼の「右眼」については、今はまだ出番ではありません。

この「第97管理外世界地球」について

あらすじにも書いてあるように、Fateの魔術などの設定を独自解釈して、自分なりの独自の設定を作りました。またそれも追々書きます。

魔術協会「時計塔」は一応ロンドンにありますが、Fateキャラなどはいません。

そしてこの世界に「魔法を使いは五人にも満たない」という理異菟の言葉は、実際にその一人に出会い、その魔法使いが「自分は二人

しか知らない」と聞いて、「確認された魔法使いは五人にも満たない」という意味でなのちゃんに言いました。

ちなみに理異菟は魔術協会の依頼を受けたりして、その報酬で今身に着けている魔術礼装を作り上げました。

理異菟の魔術礼装について

グローブ 腕を保護する程度のルーン「アルジズ」と瞬間的発動のルーンを補助する術式が二年かけて練りこまれている。名前は「真意アシサーを摘み取るモノ」

黒の外套。 守護を意味するルーン「アルジズ」を刻み、継続的発動のルーンを補助する術式を三年掛けて練りこまれている。裾等は織り込まれているため、背が高くなっても調節できるようにしている辺り、計画性がある。名前はまんま「真意アルジズを秘匿するモノ」

黒の袖なしシャツ、ショートパンツ、靴は「アルジズ」のルーンを刻んで壊れにくくしただけ。

黒のサイハイソックス 実はこれも礼装。素足だと寒いから。昔、長ズボンを引っ掛けて転び、溝に落ちたのがトラウマになったらしい。なので、ショートパンツにサイハイソックスという出で立ちになった。内容はグローブと殆ど同じ。だが、補助するルーンが違う。名前は「真意アンサーの代行者」

眼帯 当然これも魔術礼装。半年前までは親が作ってくれた眼帯をしていたが、この「眼」に合うように自分で専用の眼帯を作った。

製作期間は3年。名前は「神秘を隠匿するモノ」^{アンスル}

黒のチョーカー これも魔術礼装。これの能力は、本来、ルーンと言われる魔術には“描く”という工程がなくてはなりません。なので、これを発動させても、その工程がなくなることはいけません。それを出来るだけ少なくさせるのがこの礼装です。ほとんど一工程と、詠唱だけで発動は出来ず。

これには口で伝えたモノに意味がある、つまりは詠唱の補助のルーンとその補助の術式が刻んであります。詠唱も補助という役割はありますが、これはそれを増幅させた物です。製作期間は一番長く、四年。両親がいたころからで、一番早く作ったもので出来た物。両親も製作に携わっているので形見的な物。^{アンセス}名前は出てきたとおり「真意を接げるモノ」

理異菟の設定（後書き）

イエレミー「まずは始めに、読んでくださってありがとうございますとござい
ます。

言いたいことは多々あるでしょう。説明になつてないとか、色々。
矛盾があるぞ、など。中にはこのまま物語が進めば分かるのもあり
ますし、文字通りの矛盾もあります。まあ、私から言わせれば矛盾
が在つてこそ《ヒト》だと思えますし。

こんな設定の話なんか読んでられん！ って人もいるでしょうし、
逆にこれでも読める人だつてると思えます。え、いますよね？

もし、誰も読まないって言われて、じゃあ物語を変えるかってこと
にはなりません。ある程度の修正はしますが。ま、そんなモノなん
ですよ。

あ、最後に。多分これからの更新は最低二日は掛かります。まあ、
この長さで二日なので、もっと一話を長くしろって言われたら、四
日間、ぐらいでしょうか？

いや、それにしてもやっつとです。やっつと「始まり」って感じですよ。

ご指摘ありましたら連絡ください。待ってますので。

では、次回でまた会いましょう。

6 第一奏 これから (前書き)

原作がブロークンしました。

え？ 元から？

6 第一奏 これから

「なのはside」

しばらくあのまま抱き締めてもらっていたのだが、突然パトカーのサイレンの音が聞こえ始めた。

そしてその時になってここには不味いのではないかと気づき、リイちゃんは離れようと言って来るが拒否。

まだ抱き締めて欲しい、と顔が赤く染めながらも伝えるとリイちゃんは私を抱えた。所謂お姫様抱っこだ。

「これなら良い？」と訊いてくるので、頷いて答えるとリイちゃんは私を抱えたまま走ってその場を離れました。

それから殆ど覚えていません。強いて言うなら良いに匂いだったなあとか、暖かい温もりとリイちゃんの心臓の鼓動くらいかな？
覚えているのは。

あの時の気持ちを幸せだったと思います。

え、今？ それはもちろん

「こら。なのは、ちゃんと人の話を聞いているの？」

「はい。聞いてます」

憂鬱ですよ。説教なんですよ、説教。しかも正座です。道場の真ん中で。

目の前には我が家の最凶のヒエラルキー、お母さん、高町桃子さんです。その後ろにリイちゃん、ユーノ君と他多数。

何故怒られているか？ それは夜遅くに家を飛び出したことと、さっきの戦闘（私は回避と封印しかしていない）、まあ危険なことに頭を突っ込んだためです。

何故それを知っているか？ 答えは簡単。

リイちゃんが全部バラしました。

正確にはそれがリイちゃんがお父さんたちを抑えた時の条件だったみたいです。

「自分が行って助けってくるから、見て来た事は全部報告するから、家で待つて欲しい」

当然最初は皆反対したそうですが、リイちゃんが「魔術よりも厄介な危険性もある」と言って、それなら尚のことっ、となったそうですが「“魔術士”以外がいると足手まといにしかない場合もある」と切って捨てられ、一応皆了解したそうです。リイちゃんの実力も知っています。

それでも心配だった皆はずっとリビングで私たちが帰ってくるのを今か今かと待つていたそうです。

そして突如遠くの方で聞こえたサイレンの音。

まさか何かあったのでは?!と皆に緊張が奔る。

その時、チャイムが鳴り、私たちが普通に「ただいまー」とのん気に帰宅。

皆さん玄関で総での出迎え。

「どうかしたの?」

私の言葉にお母さんプツン。

私は道場に強制連行　正座で説教。リィちゃんはリビングで事情説明。ユーノ君玄関で放置。

それが、一時間前のこと。

今はもう、ユーノ君が起きているし、ユーノ君の事情を聞いたほうがいいと思うの。

「こら、なのは。お母さんの話をちゃんと聞いてるの?」

「聞いているよ、っていつかさっきから全部同じ話でしょ」

「もうっ。もうこんなに心配掛けちゃだめよ?」

「はあい。よく分かりました。以後気を付けます」

「正座止めて良いわよ」

「うにゃ〜」

痺れてきた足を伸ばす。

流石に正座一時間は辛い。

side out

side in

（理異菟side）

なのちゃんの説教が終わり、スクライア、なのちゃん、私が皆の前に座る。

予断だけど、フェレットの前に勢揃いして正座する大人ってシユールじゃない？

「この度は、なのはさんを巻き込んでしまって申し訳ありませんでした」

ペコリ、とスクライアが頭を下げる。が、父さんが止めさせる。

「いやいや、頭を下げないでくれ。理異菟の話聞く限り、君は助けを求めただけなんだろう？」

スクライアははい、と頷く。

「そしてなのはそれに応じた、つまり、それでなのはが被害を被っても責任は君ではなく、なのは自身にある」

「ですが！ 僕はなのはさんを危険な目につ」

「まあまあ。別に君に対して思うところが親としてない、とは言わないよ？ でもね、なのはは魔術がどういうモノなのかを知っているんだよ」

その言葉に首を傾げるスクライア。ちょっと可愛い。

「魔術というのは表の世界では出て来ないらしい。つまりは、裏の世界なのさ」

「なっ!？」

父さんの言葉の意味に驚愕して私を見上げるスクライア。

私は頷く。

それが意味するのは私が、裏の住人、ということ。

「かくいう俺も、裏の者さ、まあ、元が付くが。現役時代、俺

はボディガードの仕事をしている時に人だつて何人も殺めている。それに俺たち、俺、恭也、美由紀が使った剣術、御神流つというんだけど、俺たちはこれを大切な人を守るために修得しているが、これも突き詰めれば人殺しの技術であり業なのさ。この道場は、その御神流の道場さ」

「私も少しやつてた。今は才能がないし、やめてるけど。でも、訓練を始めるときにちゃんと全部聞いて、その上でやったよ？」

なのちゃんの言葉にスクライアが絶句する。

まあ、こんな子供が人を殺す技術を承知して訓練受けてたつて聞けば絶句するかな？ やつてたの一年は経ってないけど。

「まあ、なのはが裏を本当に何も知らない子だったら、私は君を一発は殴っていたであろうね、絶対に。」

だが、なのはは知っているんだよ、裏を。体感はしたことないが、どういふ世界なのかは知っている。その上でなのは今回の魔法？ のことに首を突っ込んだわけだ。ならばそれで命を落としても、それは自分の責任だ。君を責める謂れはない。だからなのはに説教したんだ、そうだろう？ 桃子」

「ええ。そこはユーノ君の責任じゃなくて、もうなのはの責任になっているから」

「そういう訳だ、ユーノ君。俺たちは納得はしていないが、理解はしている。だから頭を下げることはもういい。さっきの一回で十分だ。それでいいな、恭也？ 美由紀？」

「……納得はしてないけどな」

「まあ、無事だったし、いいよ」

あっさり水に流す美由紀姉様と不承不承の恭也兄様。子供ですか。

「すみません」

最後にもう一度頭を下げるスクライア。律儀な子だね。

パンツ！ と父さんが両手を叩く。きつと空気を変えるためにやったことだろう。

「で、そろそろ本題だ。君の事情を聞かせてはくれないか？」

スクライアは話始めた。

自分がこの世界とは違う世界からやって来た魔法使い 「魔導師」であること。

遺跡の発掘を生業としているスクライアという一族の出身。

自らが発掘した「ジュエルシード」が事故によってこの世界にばら撒かれてしまった事。

その数は全部で二十一個もあること。

それに責任を感じて自分独りでこの世界に回収に来たこと。

しかし、封印に失敗してしまい重傷を負ってしまったこと。

魔力を持つ人に念話で助けを求めたこと。

倒れていたのをなのはが見つけて動物病院に搬送してくれたこと。

その病院でジュエルシードを取り込んだ思念体に襲撃されたこと。

なのちゃんが助けに来てくれたこと。

そして、そのなのちゃんに「デバイス」と呼ばれる魔導師の杖、「レイジングハート」を渡したこと。

「あとは理異菟さんから聞いていると思いますが、彼が危ないところを助けられて、思念体を拘束し、なのはさんがジュエルシードを封印してくれました」

「そして今に至る、と言うわけだね？ ユーノ君」

「はい」

父さんの確認に肯定するスクライア。

「そうか。ちなみにユーノ君、そのジュエルシードというのはいくつ封印したんだい？」

「僕が一つ、今回なのはさんが封印してくれたので二つです」

「ということは、後19個同じものが在るんだね？」

「はい」

「そうか。それで君はこれからどうするんだい、ユーノ君」

「それは当然、ジュエルシードの回収を」「無理だね（ですね）」「つ！ 何でですかっ！？」

私と父さんが同時に断言する。

それに食って掛かるスクライア。本気で言ってるんですかね？

「ユーノ君。君は21個のジュエルシードを封印しに来たのだろう？」

「そうです」

「だが君は実際には一個を封印し怪我を負い、二個目で早くも助けを求めた。これが現実だよ？」

「……………はい」

「それなのにジュエルシードを回収しに行く？ 君は現実を甘く見すぎてはいないかな？」

「……」

スクライアが頂垂れた。

父さんに言いたいこと言われたよ。

それにしても、

「父さん。やっぱりなのちゃんを巻き込んだこと根に持つてるでしょ？」

いつもより少し言い方が辛口だ。

「ま、少しはな。だが、言い方はキツイが間違っではないぞ」

「そこは否定しない」

そう言われ更に凹むスクライア。これで少しは現実を見てくれるかな？

「さて、ユーノ君への指摘も終わったし、これからのことを考えるでしょう」

父さんはそう告げてから間を少し置き、私に目を向ける。

「理異菟。お前はこれからどうしたら言いと思う？ 正直、俺たちは魔術や魔法について無知だ。魔法についてはお前も殆どは知らないだろうが、実際にその目で見てきたのだろう？ だから少しでも詳しいお前がこれからのことを考えて欲しいんだが、皆はどうだ？」

そう言って皆に確認を取る父さん。

「私はそれで良いわよ、あなた。私は魔術や魔法どころか裏についても対して無知だし」

「私もそれで良いと思う。リイは頭の回転とか私なんかよりも速いし」

母さんと美由紀姉様が同意する。

「なのはは？」

「私もそれで良いと思う」

父さんの問いかけに頷くなのちゃん。

「恭也、お前は？」

最後に恭也兄様に訊く父さん。

「俺もそれでいい」

「ユーノ君、それで良いかい？」

まだ凹んでいるスクライアにも確認する。

「……で、でも彼は魔法やジュエルシードについて知らないんじゃない？」

「そこは君が教えればいいだろう?」

「え?」

彼の問いに「何当たり前のことを」的な顔を向ける父さんに、呆けるスクライア。

「君が魔法やジュエルシードについて教える。その情報でこの手のことに向いている理異菟が方針を考え、それで皆が行動する。理想的だろう?」

「え、あ、はい」

「別に理異菟だけにやらせはしないよ。ただ彼にこれからのことを決めて欲しいだけだ。彼が一番頭の回転が速いだろうしね」

「……」

「適材適所、ってやつさ。何も一人でやることはないんだ。人には出来ることと出来ないことがあるのだから。それに、君は責任を感じて一人で此処に来たって言ったね?」

「…はい」

「でもさ、このことを知った同じ部族の人は、どう思うだろうね? 君一人にやらせてしまった、責任、を感じてしまうんじゃないかな?」

「!?!?」

驚愕するスクライア。恐らくそのことを考えなかつただろう。

「どうだい？ 君と同じ部族の人たちは、仲間一人が責任を感じて飛び出して、何も感じないような人たちなのかな？」

「そんなことはありません！」

「だろうね。だったらさ、今回、どれだけ皆に迷惑を掛けているか、分かったかな？」

「……はい」

優しく諭す父さん。

「最後に言うと、君は責任を感じたっていうけど、君が責任を感じなきゃいけない部分はどこにもないんだよ？」

「え？」

父さんの言葉に聞き返すスクライア。

え？つて。そんなことも理解してないんですね、貴方。

仕方なく、教える。

「スクライア、あなたは言いましたよね？ 『事故』でジュエルシードがばら撒かれたと」

「え、はい。そうです」

「何故‘事故’なのに、あなたが責任を感じるのですか？ あなたが事故を起こしたりしたのですか？」

「いえ、違います」

「本当に事故なのでしょう？ だったら責任は誰にもありはしませんよ。それなのに責任を感じるのは筋違いでしょう」

「でも、僕が発掘したs「何ですか、それは。それでは自分が存在したせいで今回の事件が起きたっていうのと同義ではないですか。あなたはそんなに自分を否定したいのですか？」そ、そんなことは別に…で、でもっ」

「全く、頑固ですねっ」

ヒョイツと隣の小さなフェレットを両手で拾いあげて胸に抱き締める。

「!?!」

「あなたが今回の件で責任を感じる必要がある部分は本来なら、なのちゃんを巻き込んだ、という一点だけですが、生憎なのちゃんは自分で首を突っ込みましたのでこれも責任を感じる必要性は皆無です。それでも納得出来ませんか？」

腕の中のスクライアに問う。

「……はい」

「それなら、少しはその責任とやらを私たちに分けなさい。具体的

には私に協力することで」

「は？」

間抜けな声を上げて私を見上げるスクライア。

にやりと笑う。

「私は今日、青い宝石、そうですねこの場合、'ジュエルシード'と名付けましょうか。それを見つけ、なのちゃんに封印させたのは良いのですが、困ったことに情報が全く持ってないのです」

「いや、あの。何を言っ「唐突にですが、魔術師は魔術を一般人に隠匿する義務の様なものが存在したりするんですよ」それが何か。僕たちにも管理外世界に魔法を自ら教えてはならない法律が「それって殺されたりしますか?!?」そ、そんな分けないじゃないですか?!」

「そうですね、それは軽い。ちなみに私たちの場合は魔術協会という組織が在るのですが、無闇やたらに教えてしまったりして、協会側に目を付けられると裏で使命手配、賞金を付けて抹殺されたりします」

「「「「「「?!?」「」「」「」

私以外の全員が驚愕する。

変ですね、なのちゃんに伝えていませんでしたか？

「このまま何も情報がないまま探していたら、どんな被害が起こる

か分かりません。そして被害が起こり、下手をしたら魔術教会に手配されるかも知れないので、あなたに手伝って欲しいのですよ。あ、報酬はジューエルシードです。どうです?」

「……すみません。僕はあなたにもめいw」そんな言葉は要らないのです。欲しいのは手伝ってくれるのかどうかの言葉ですよ?」……手伝いますよ」

「どうもです。まったく、最初からそう言えばいいのですよ?」

「……強引ですね」

「うじうじ後悔しているスクライアよりは二億倍はマシですよ、きつと。迷惑掛けたなら挽回する、後悔するんならせめて全部終わってからにしないで。一々後悔してたら挽回する時間なんか無くなりますよ?」

「……考えてみます」

「そうしてください。こんな小さなフェレットの癖に、何を色々と背負っているんですか」

スクライアの背中を撫でる。

すると爆弾が投下された。

「フェレットって。今は魔力が少なくてこうですが、普通の人間ですよ僕は」

そう言って腕から抜け出し、体から翠色の光に包まれたかと思うと

そこには、スクライアの民族衣装と思われる衣を纏、ブロンドの髪を肩まで伸ばした、

「女の子」がいた。

『え?』

スクライア以外全員が固まる。

「これが本当の姿です。って、あれ? 皆さんどうかしました?」

「ゆ、ゆゆ、ユーノ君?」

「なんですか、えつと...」

「士郎だ。いや、そんなことより、君は...女の子なのかな?」

「そうですね? 僕は女です。何を当たり前のことを?」

「.....女.....リィちゃんに抱き締められてた、女」

父さんの確認に「彼女」は首を可愛く傾げながら答える。隣で何かぶつぶつ聞こえる。

その答えに皆絶句する。

「あれ、もしかして男と思ってましたか?」

「あ、ああ。失礼ながら。声はちょっと高いと感じていたが、理異菟の様な例外もあるし。一人称が僕って言うてたからね」

「そうですか？ 別に女の子でも‘僕’と呼ぶ人はいますよ」

「それはそうだが。まあ、此処に男なのに女の声をして、一人称が‘私’の例外がいるから…理解は出来るが」

「ちょっと待つて父さん。例外つて表現は…」

「ちょっとユーノ、あつちでオハナシしようヨ？」

「ひゃあ！？ 何でレイジングハートを僕に向けてるの！？ おまけに起動パスワードは!?!？」

「あらあら。なのはったら嫉妬バリバリね」

「お母さん。ビデオ取るの止めなよ、っていうか今何処から出したの!?!？」

「止せ、美由紀。何を言つても無駄だ」

スクライアによる衝撃的な事実で場がカオスになった。

皆が大人しくなるまで30分程かかった。

「では、これからジュエルシード探索についての方針を決めて行きたいと思う。理異蒐、任せるぞ」

「了解、父さん。最初に言うけど、ジュエルシード探索については私、なのちゃん、スクライアでやるしかないと思つよ」

「つな、…それは俺たちが役に立たないと」

「落ち着け恭也。理異菟、当然理由はあるんだろう？」

食つて掛かつて来ようとする恭也兄様を父さんが手で制す。

「まず第一にだけど、封印や結界ができるのがなのちゃんとスクライアの二人だけ、でもスクライアは怪我を「いえ、怪我は全部治したので、後は魔力が回復するのを待つだけです」して…:…:そうですかでは、正直に答えなさい、スクライア。あなたは今ジュエルシードの思念体に襲われても結界や封印できる程の魔力がありますか？」

「……無いです」

隣に座る彼女に横目で見ながら問い、彼女は顔を沈ませながら答える。ちなみに今は人の姿に戻っています。

「つまりは、封印出来るのが実質一人だけなのです」

「お前は出来ないのか？」

「残念ながら」

兄様の質問にきつぱりと答える。

「私が結界やが封印出来るのならば、兄様たちにもジュエルシード

探索に出られたのですが、すみません」

そう言っつて兄様に深く頭を下げる。

「いや、すまない。何も考えていなかったようだ。頭を下げるな、リイト」

ゆっくりと頭を上げる。

すると、なのちゃんが「あれ？ リイちゃん結界出来なかったの？」と訊いて来る。ああ、それですか。

「今回必要なのは、スクライアが張った結界ですよ。それじゃないと被害が大きくなり過ぎます」

「？ リイちゃんとユーノの結界ってどう違うの？」

「私のはあくまで其処に停止させることの出来る結界と、人に此処を来ない様に意識に働きかけるモノです。恐らくですが、スクライアのあの結界は空間の座標をほんの少しズレさせることで一種の疑似空間を新たに作り上げて、結界内に魔力を持た無いモノを弾き有るモノを閉じ込め現実世界に影響を及ぼさない様にする結界の類ではないですか？」

「凄い。よくそこまで分かりましたね？」

「周囲の家から何も人の気配を感じず、それに加えて魔力を持つなのちゃんだけが居ればある程度は分かりますよ。その結界でないと、ジュエルシードがどんな被害を起こした時でも、收拾が付かなくなるんですよ」

そう言って肩を竦める。だが、それに疑問を問いかけたのがもう一人。

「あれ？ でも、リイが結界や封印出来ないのと、私たちが探索できないのと、どう関係があるの？」

「美由紀、少しは考えろ。確かに俺たち一般人でも探すことは出来るだろうが、なのは以外結界も封印も出来ないんだ。それにジュエルシードの思念体はユーノを今日襲ったんだ。傍から見たらただのフレットにしか見えないユーノをだ」

「？ それが？」

「それはつまり、魔力が有る者を襲いに来たと考えられるだろう？ 違うか、ユーノ？」

「は、はい。確かにジュエルシードはかなりの魔力を持っています。だから魔力を持つ者にも反応しますし、僕もそれで狙われたと思います」

「ジュエルシードが発動して襲われても戦闘ではリイトがいる。ならば余計な俺たちが居ると寧ろ邪魔にしかならない可能性がある」

「そっか」

兄様の説明にやっと理解した姉様。

次に進む。

「次に第二、というかこれが本当の理由ですね。なのちゃんに経験を積ませる為です」

「何故だい？」

「皆には黙ってましたが、私はなのちゃんに魔術以外の力が有ると知っていました」

「……」

「出来れば関わらないに越したことはないと考えていましたが、今回力が目覚めてしまったので、これを機に出来るだけの経験を身に付けれるだけ、身に付けた方が良いでしょう」

「何故身に付けた方が良いでしょう？ 理異菟」

母さんが不思議そうに問う。

「異端の力は異端を誘き寄せますよ、母さん」

「それは……」

「この世界では、異端な力として魔術が分類されるでしょう。そうでしょうか？ 父さん」

「そうだな」

神妙な顔で頷く父さん。

普通の人は魔術なんてないと思っているのだから、十分異端だろう。

「ですが、その魔術士からもスクライアたちの魔法は異端だと思いますよ？」

「つまり、魔術師を寄せてしまおうと？」

「魔術師とは限りませんが、概ねそうですね。異端は異端で引き寄せあい、力と力はぶつかり合うのが何処の世でも真理だと思いますよ？ それに今回はスクライアという先生とデバイスと言う魔導師をサポートをさせる道具まで有りますし、幸い海鳴市に他の魔術師の存在はないです。魔法の練習、経験を積むにはこれ以上ない位の好条件だと言っておきます」

「そうだな。力に目覚めたのだから振り回され無い様にするのが普通か。だが、ジュエルシードと並行することになるから、なのはには大変なんじゃないか？」

「その辺は私たち三人で決めます」

「なら、それで構わない。だが、俺たちに出来ることは待っていることだけか」

「適材適所、これ、さっきの父さんのセリフです。皆には皆が出来ることを、私たちも出来る事をするだけです」

「そうだな。ジュエルシード、及びなのはの魔法の件にはこの三人に信じて任せる、それで良いな？」

「いいわよ」

「悔しいが、出来ることがない」

「こればかりはね〜」

父さんの決定にあっさり頷く母さん、少し納得できてない兄様と姉様。

「なのは、ユーノちゃんもそれで良いかい？」

「うん」

「構いません。あと、出来れば『ちゃん』付けは止めてください。せめて『くん』の方がいいです」

二人に呼びかけると二人とも頷く。

「よし！ 今日はまだ遅い。皆、早く寝ることだ。後ユーノ君には空いている部屋を用意するからフェレットにならなくてもいいぞ。恭也、部屋を少し片付けるからちよつと手伝え」

「分かった」

「ありがとうございます」

こうしてなのちゃんの魔導師初日は終わった。

6 第一奏 これから（後書き）

イエレミー「この度も読んで下さって本当にありがとうございます。

ははは、ユーノが好きだった方ごめんなさい。女にしまいましたた。

いや、私はユーノ君のこと結構好きですよ？ でもですね、ユーノ君でどんどんフェードアウトしていつてると思うんですよ。段々とだから女の子にして、なのは恋のライバル的なキャラにすれば、意外と大丈夫なのでは？ と思ってやりました。後悔はしていません。

だけど僕っ娘です。

いや、リリカルなのはに僕っ娘少ないと思ってころしました。

容姿的は、髪を肩までにして服を女の子用にしただけと思ってください。

ツッコミどころ多いですが、生暖かい目で見てやってください。

それではまた。」

7 第二奏 剣士・戦士（前書き）

ちよつと少ないです。

戦闘が上手く書けません。

文才、欲しいです。

7 第二奏 剣士・戦士

（理異菟side）

高町家に新たにユーノ・スクライアを迎えた翌日の朝。

私はいつも通り四時に起床した。

そして顔を洗い、服（Yシャツ。いつもこれで寝ている）を脱いで半袖のTシャツにジャージという格好になり、朝の鍛錬に出かける。

鍛錬とはもちろん魔術もだが、戦闘の鍛錬もしている。主に夕方に兄様や姉様と。

魔術の鍛錬だけだと、勘が鈍り、何時力不足を痛感するか分からないからだ。

力不足を感じて戦いたくなどももちろんない。

い 「時計塔」の校長にいつ何を依頼されても大丈夫なようにした

あの人には恩があり、今こうして日常を送れるのはあの人の御陰だ。

やってきたのは人気の無い森の置く。

適当に開けた空間の中心にたち、ゆっくりと呼吸をする。

此処で魔術の鍛錬をするからだ。

右手を開き、眼を閉じて集中する。

三十三在る魔術回路　その内の一つに火を熾す。おこ

「真意コネクトの幻想を」

右手に作られたのはただの刀。

そしてそれを直ぐに消す。

右手を正面に向けてから、今度は二十の火を熾す。

「真意コネクトの幻想を」

次に投影したのは十二の凍れる刺剣。セイバー

「っ」

体に痛みが走るが無視する。

数分程投影を維持して破棄する。

「……っ、真意コネクトの幻想を」

今度は自分の最大数、三十三の火を熾し投影する。

作ったのは一本の黒い直刀。だが、

「う！」

パキイイインッ

直ぐに砕け散ってしまった。

体中に激痛が走った時に、ほんの少しだが構成維持の制御が乱れたようだ。

だが、少し腑に落ちないのか眉を顰める。

魔術を行使するとき、大なり小なり痛みを伴うのが普通だ。

私はこれでも「魔術士」としてそれなりにやってきているつもりだ。

魔術の腕では二流の域を超えることは出来ないが、戦闘では一流たちとも殺し合ってきた。

今更、痛みが走っただけで集中をきたす様には出来ていない。

第一、それを出来るようにする為の魔術行使を今までしてきたのだ。

出なければ、とうの昔に魔術回路を暴走させて死んでいる。

ならば、何故出来ないか？

魔力が足りない？

確かに今作るうとしていいるのは概念武装。

1000年は経っている代物。

魔力は多いが、生成できないわけじゃない。

現に成功したこともある。

その時は眼帯を外していたが。

「はあ」

ため息を吐く。

「やっぱり、“このままの状態じゃ”無理ですね。それによしんば
投影できたとしても、本来の三割ですし……」

右手を右眼の眼帯にもっていく。

「“これ”の、出番が無ければ良いのですが」

その後、少しでも投影がスムーズに出来るように一時間ほど魔術回路を行使していた。

現在は五時四十分。

私は今、道場で兄様と対峙していた。

これから模擬戦をするのだ。

「何故？」

思わず呟く。

「諦める、理異菟」

私の呟きに審判の父さんが苦笑して答える。

今日は朝からスクライアの「魔法」について色々聞こうと思っていたので、いつもより一時間早く魔術の鍛錬を切り上げたのだ。

その家に帰る途中で鍛錬前の父さんたち（兄様と姉様たちも）のラ
ンニングに出くわしてしまった。

その時に戦闘狂いバトルジャンキーの兄様に捕まえられた。その時に、

「兄様。いつも夕方は私と一緒にしているのですから、朝、する、必要ないのではないですか？ 別に嫌ではありませんし、兄様が望むのなら構いませんが…理由は？」

「「「「ぶっ…！」「」」」」

と私が言ったら父さんと姉様が噴出した。何故？

「そんなもの、足りないからに決まってるだろっ！」

「「ぶっ！」」

また噴いた。汚いですよ？ 他のランニングしている人がこちらを見ていないですか。何か呟いていますよ？

「ちょ、お前らっ。その会話はないだろ？ 主語が無さすぎだ」

「二人とも、朝っぱらから何言ってるの?! 人がいるんだよ!？」

「「ん？ 何処か変か(ですか)?」」

という出来事が有ったが、些細な問題だ。でもその時に、二人から「「見た目美男と美女がそんな会話を道端でするな!」」と私と兄様は怒られた。何か問題でも？

「準備はいいな？ 二人とも」

私がさっきの出来事を思い返していると父さんが開始を促して来る。

仕方ない、気持ちを切り替えますか。

別にさっき言ったとおり、嫌いでは無いです。強者と戦えるのですから。

「いいですよ」

黒いグローブを嵌めながら頷く。

さすがに「真意^{アンサー}を掴み取るモノ」を使うわけにもいかないのだ、ただのグローブに守護のルーンを即席で刻んだものを使う。

腕を保護するだけだが、それでも十分だ。

「俺もいいぞ」

兄様は小太刀の木刀を二本構える。

父さんはその後一步下がり、

「では　　始め！」

剣士と戦士の戦いが始まった。

s i d e o u t

開始の宣言と共に動いたのは理異菟。

恭也に肉薄し胴体に拳を叩き込む。

それを恭也は右の小太刀を側面から薙ぐことで逸らし、すかさず左の小太刀を振るう。

理異菟は拳を引き、振るわれた一撃を後ろに下がり避ける。だが、恭也が追撃する。

左を逆手にしての切り上げに右からの刺突、更に左を順手にして切り下ろす。

理異菟はそれらを体を逸らすことで回避する。だが、少し態勢が崩れる。

恭也はそれを逃さずゼロ距離で技を放つ。

小太刀二刀御神流 奥義之式 『虎乱』

ゼロ距離で二刀による剛剣の嵐が理異菟に襲い掛かる。

これを理異菟は後ろに大きく跳び退いて避けるが、態勢は崩れる一方。

そして恭也は更に追撃を掛ける。

小太刀二刀御神流 奥義之参 『射拔』

御神流の奥義の中でも最長の射程距離を誇る超高速連続突き。

理異菟は初撃は何とかガードに成功したが、

「ぐっ！」

二撃目が突きではなく薙ぎだった為、脇腹に重い一撃をもらい吹っ飛ばす。

理異菟は道場の壁まで吹き飛んだが、ぶつかる前に態勢を整え壁に着地し、

「脳内リミット解除」

言葉通り脳内のリミッターを外し、駆ける。

「ッシ！」

一瞬で恭也の背後に回り込み、背中に刺し穿つ様な蹴りを放つ。

「つく！」

恭也はこれを振り向き様に二刀を交差させて防御するが弾き飛ばされる。

弾き飛ばされた恭也は四足歩行の獣の様に着地し、

恭也は消えた。

side in

く士郎sideく

「えく。二人とも神速に入っちゃったの？」

「ああ」

隣で一緒に試合を見ている美由紀が不満そうに話し掛けてくる。

俺は神速が使えるので二人が戦っているのが見える。

美由紀には誰も居ない空間しか見えてないのだろう。

「理異菟のは神速じゃないがな。似たようなものだが。それに見たいのなら早く神速を習得して見せる、美由紀」

「無理だよく」

娘が泣き言を言ってくる。

全く。才能なら恭也より有るといふのに。

そんなことを考えていると二人が神速を解いて神速の世界から出る。
お、そろそろ決着かな？

s i d e o u t

神速の世界で二人は幾度と無く交差する。

相手よりも速く、強く、技と技、力と力をぶつけ合っていた。

だが、唐突に二人はその世界から出る。

神速を維持できなくなっただからだ。

神速は「自分の時間感覚を引き伸す」技（理異菟のは脳内のリミッターを外しているだけ）。

当然そんなモノを何の代償も無しに使えるわけが無い。使った後には体に極度の疲労が襲ってくるのだ。

そうそう使えるものじゃない。

恭也は息を乱し、理異菟は肩を上下させている。

だが、二人の眼光は全く戦意を衰えさせていない。
寧ろ始まった頃より増していた。

両者は息を整え、お互いに飛び退いた。

最後の一撃でこの試合を終わらせるためだ。

恭也は両手を下げて構える。

理異菟は体を前に倒し、両手を腰だめに構える。

道場の空気が二人の圧力により震える。
フレッシュャー

そして、

「ハアッ！」

裂帛の気合と共に同時に動き、

「神速！」

「脳内リミット解除！」

二人は神速の領域に入る。

恭也は神速の速さで突撃しながら反転し抜刀術の構えを取り、

小太刀二刀御神流 奥義之六 『なまぎつむじ薙旋』

反転し遠心力を生かした高速の抜刀術からの四連続切りを放つ。

迫りくる四連撃を前に理異菟は、

「リミット解除」

脳内だけではなく肉体のリミッターも外した。

一刀目を頭を下げることで回避し、二刀目が来る前に密着。

薙ぎの二刀目を密着状態で左手で恭也の腕を受け止めることで一瞬だけだが動きを止めることに成功し、隙が出来る。

腰だめの右腕を引き絞り、

明心館空手 巻島流・昇華我流奥義 『こっは吼破・れつ裂』

恭也の無防備な胴体に体重を乗せた掌底を打ち込む。その状態から更に踏み込んで右手に左手を添え、今度は全体重を乗せた衝撃を前方に徹す。

「っぐ!？」

恭也は吹っ飛ばされて壁に叩き付けられる。

「がはっっ！」

何とか四つん這いで着地する恭也だが、

「チエック」

恭也の目の前には、手刀を首元に突きつける理異菟がいた。

「そこまで！」

審判の士郎の声が道場に響き渡る。

その声で理異菟は脳内と肉体のリミッターを戻し、身体の緊張を解く。

「ふう。また負けだ」

負けを素直に受け止める恭也。

「えへへへ〜。また勝ちました」

嬉しそうに顔を綻ばせる理異菟。

こんな笑みを見せる事は滅多にない。

二人は道場の真ん中に移動する。

「次は勝ってやる。負け越しは嫌だからな」

「次も勝ってみせます」

そう言うってお互いに握手してから礼をする。

剣士と戦士の戦いは、戦士が勝利を飾った。

s i d e i n

く理異菟 s i d e く

「ふう〜。サツパリしました」

シャツにシヨートパンツ姿でタオルで髪を乾かしながら脱衣所から出る。

模擬戦で汗を掻いた私はシャワーで汗を流してきたのだ。

あの三人はまだ鍛錬をやっている。

「もう六時過ぎましたか」

リビングに入って時計を見ると六時を十分程過ぎていた。

ぼちぼちなちゃんの朝食と弁当を作り始めないといけない時間になった。

「うーん。スクライアと話し合う時間は無さそうですね。まあ、仕方ありません」

私はエプロンを付けキッチンに入り、料理を開始した。

髪をちゃんと乾かさないと料理をしたら、後から来た母さんに「もっと髪を大事にしなさい！！ 髪は女の命なのよ？！」とにっこたま怒られた。母さんが私を男として見ていなかった事が分かった。

朝食と弁当を作り終わると丁度7時になった。

そろそろなのちゃんを起こさなくては。朝食の時間だ。

昨日は寝るのが遅かったし、きっと目覚ましのアラームでは起きないだろう。

私はなのちゃんを起こす為、二階に上がり彼女の部屋に行く。

コンコンッ

.....。

返事が無い。まだ寝ているのだろう。

「なのちゃん？ 入るよ？」

ドアを開ける。

ベッドにはなのちゃんが気持ち良さそうに寝ていた。

気持ち良さそうに寝ているのを起こしたくは無いが、昨日みたいに走らせるのも可哀相なので、一発で起こす呪文を使う。

「今起きるなら、頬にキスしてあげますよ？」ボソッ

「ほんとっ！？ キスしてくれるの、リイちゃんっ！？」

私がボソッと呟くと神速の速さで起きるなのちゃん。

アラームの音で起きないのに何故？

「ねえ、私起きたよ？ キスしてくれるんだよね？！」

「はいはい、してあげますよ」

詰め寄ってくるなのちゃんに苦笑して少し屈み、彼女の頬に唇で触れる。

ちゅっ

「じゃあああああ」

なのちゃんが首を振って悶えています。

「ほらほら、皆待っているのですから、早く顔を洗ってきなさい」

「はああああい」

笑顔で洗面所に向かうなのちゃん。

キス一つでご機嫌ですね。

よく解りませんよ。

「キスってロンドンの時計塔とかだと挨拶代わりでしてましたけどねえ」

とりあえずリビングに行きますか。スクライアは……この際まだ寝かせておきましょう。こっちに来て禄に休めていないでしょうから。部屋出て階段を下りようとしてると、ちょうどスクライアが部屋から出てきた。

「あ、おはようございます」

ペコリと頭を下げてる。

「ええ、おはよう。まだ寝てても良いんですよ？ 疲れているのでしよう？」

「はい、まだ少し」

「まあ、朝食のが出来ているので丁度良いといえはいいですね。食べますよね？」

「あ、はい。頂きます」

二人でリビングに向かい私はスクライアの分をご飯を盛り席に着く。今席に着いていないのは後なのちゃんだけ。

少し、すると制服に着替えたなのちゃんが全員に挨拶してから席に着く。

皆で手を合わせる。スクライアも真似る。

「いただきます」

「……………いただきます」「……………」

父さんの声に皆で復唱して食べ始める。

『この念話って結構便利だね』

『ええ。でも、かなり初歩的な魔法なので妨害とか簡単にされてしまいますが』

私は学校に行く前にスクライアと魔法についてリビングで話し合っていた。

今は念話を教えてもらったところ。

スクライアの無差別念話を聴いていたので出来るか訊いて見て、「聞こえるなら発信も出来るのでは？」と言われて試してみたら、最初は感覚が掴めなかったが、十分もすれば大体コツは判る。

今家に居るのは私とスクライアのみ。

兄様と姉様となのちゃんは学校、父さんと母さんは店の準備に行った。

7時45分。

私もそろそろ出ないといけない。鞆を手取る。

首に黒のチョーカー「真意アンサズを接げるモノ」を身に付け、制服のポケットに黒のグローブ「真意アンサーを摘み取るモノ」を入れ、

「じゃ、私も行くから。昼ごはんはレンジで暖めてね？ 使い方は教えた通りだから。後、なのちゃんにも念話教えたよね？」

「はい、平気です。なのには出る時に伝えましたよ」

「そう、なら平気ですね。魔法や魔術については授業中に私から念話で話しかけます」

「分かりました。行ってらっしゃい」

「ええ、行ってきます」

スクライアに見送られながら家を出る。

やれやれ、全力で走らないと間に合いませんね？

7 第二奏 剣士・戦士（後書き）

イエレミー「いつも読んで下さってありがとうございます。こんな拙い文章でも読んでくれている人たちに毎日感謝感激しているイエレミアスです。

やっと第二奏ですよ。ほんと、遅いです。はい、すみません。全部未熟な私が悪いです。

ちよこつと戦闘を書いて見ました。いや、戦闘って全然上手く書けませんね。分かり難くて仕方ないでしょうが、何とか読んでいただけたら嬉しいです。

そう言えば、女ユーノは皆様に受け入れられているのでしょうか？

ちよつと不安です。

本当に拙い文章ですが、少しでも楽しめるようにこれからも日々精進しますので、これからも気が向いたら読んでやってください。

それでは、また」

8 第二奏 初日（前書き）

かなり適当になってしまいました。

8 第二奏 初日

くなのはside)

『ジュエルシードは、僕らの世界の古代遺産なんだ』

『古代遺産、ねえ』

私は何時もの如く授業を聞かないで、ユーノと念話していた。

『本来は、手にした者の願いを叶える、魔法の石…。なんだけど。力の発現が不安定で、昨夜みたいに単体で暴走して使用者を求めて周囲に危害を加える場合もあるし』

『傍迷惑な石』

『偶々見つけた動物や人が、間違っで使用してしまって、それを取り込んで暴走することもある』

『本当に傍迷惑な石みたいだね、ジュエルシードって』

『ごめ』謝らないでよ、ユーノに言った訳じゃないんだから。その石が傍迷惑って言うてるだけなの』ん…。そうだね、確かに傍迷惑だね』

全く、一々謝罪聞かせられる身にもなって欲しいの。

ちなみに昨日の一件でユーノが女と分かってから名前を呼び捨てで呼んでいるし、ユーノにも呼び捨てで呼んで貰うことにもしてある。

『そう言えば、もうリイちゃんから魔術について聞いた？』

『あ、うん。リイトさんが一時間目の授業の時から話を聞いたよ』

『……今、私のところでは四時間目なんですけど？　今までずっと話してたの？』

『え、うん。僕たちの魔法は本当に「数式」だからね。それに比べてリイトさんが使っている魔術は「神秘」って感じ、というか神秘だし。正直言って、魔術の方が聴いていて楽しいし、習いたいよ？　でもさ、「相手が神秘を理解するだけでも、ほんの少し、本当に少しだが私たちの魔術は質が下がるし、正直言ってスクライアは理解することが出来るだろうから余り教えたくは無い。ましてやスクライアには魔術回路がある」とか言わ「ちょっとまって！！！！」それなら……。なに、なのは？』

いきなり暴走し始めて、その中に聞き捨てなら無い言葉があった。

『魔術回路、あるの？』

聞き捨てなら無いことを訊いてみると、

『みただよ？　彼が僕の身体の傷を解析した時に魔力が流れて、僕がその痛みで飛び起きたから』

『いい気味。でも、ユーノは魔導師だよ？　だったら私と同じモノがあるんじゃないの？』

『それって、リンカーコア』のことだよな？ 当然僕にもあるよ』

『多分それ。じゃあ、何で魔術回路もあるの？ 私は無いのに』

『スクライアが部族名なのは言ったよね？』

『うん。遺跡発掘を生業としているんだよね？』

『そう。流浪の部族でもあるんだけど、捨て子を捨てたりするんだよ、旅をしているとね。で、僕はその拾われた子』

その言葉で、少し自分が無神経なことを聞いたとが分かった。

『ごめん。ちょっと無神経だった』

『え、あ？ いや、別に気にしてないよ。部族の皆にはよくしてもらっていたし。僕が言いたいのは、僕がこの星の生まれ、若しくは両親がそうだった可能性があるってこと』

『？ どういうこと？』

『ライトさんの考えなんだけど。まず二つ目に、恐らく魔術回路はこの世界特有のモノだということ』

『ふむふむ』

『二つ目に、リンカーコアっていうのは、持っている人の血を引いていなくても、空気中の魔力素がある程度満ちている世界だと誰でも持つ可能性があるということ』

『…………』

『最後に、この二つは別に同じモノでもないし、相反している訳でもないということ』

つまり…………。どういうこと？

『結論は？』

『この世界の出身者（親か、血筋に魔術師がいる）だった場合のみ、この二つを持つ可能性があるってこと。彼曰く、「血筋の無い場合、この世界のリンカーコア発現確率は数億分の一で、魔術回路は数十万分の一の確率です。この二つを血筋のない人が持つのは、可能性としてはありますが、恐らくユーノの場合は、両親のどちらかが魔術士だったのでしょう。初代としては魔術回路が多いので」って言うってたよ』

『…………とりあえず、ユーノは魔術回路が有るから、魔術を使えるって解釈でいい？』

『それでいいと思うよ。僕もさっきそれ聞いて、こんがらがって居たから』

『魔術回路の本数は？』

『二十七本だって』

すうじう。

『凄いね、リイちゃんと同じ位ってことだよね?』

リイちゃんは三十三。六本しか変わらない。

羨ましい。

『本数だけはね?』

『? どういうこと?』

本数が多い方が良いんじゃないの?

『いやさ、さつき僕もそれをリイトさんに言ったら「君は魔術回路を一本も使っていないんですよ? 幾ら多くたって使えなきや意味ないでしょ?」今の状態だと実質ゼロと同じです」って一蹴された』

『ははは。でもさ、それって使っていけばいいだけでしょ?』

『使い方も知らないのに?』

『リイちゃんは教えてくれないの?』

リイちゃんなら教えてくれそうだけど。

面倒見がいいし、弟子に取って貰えるんじゃない?

あ、質が下がるから駄目かな?

『「それは私に“魔術士”としてお願いしている訳ですよね? だったら対価を用意してください。私たち魔術士は基本等価交換です

ので。そうすれば弟子に取って上げます」って言われた」

『対価って何を？』

『「私にリンカーコアが在れば、貴方が魔法を教えてください、それで十分なのですが。残念ながら在りません。なので他の見合っモノを用意してください」ってさ』

『我流でやれば？』

『言った。じゃ、自分でやりますって。そしたら「別に止めはしません、止めた方が身のためですよ？ 誰にも指導して貰わずにやるなんて。まず、どう起動したら良いか分からないですし、運よく起動させても、制御出来ずに魔力暴走させて民家を消し飛ばすのが関の山です。なので山でやってきて下さいね。関の山だけに」って言われたよ。最後意味不明だけど』

『確かに、意味不明だね』

頭打ったのかな、リイちゃん。

『じゃあ、教えて貰えないんだ？』

『魔術がどういう物かは教えてくれるけど、扱い方は等価交換だつて。まあ、僕としてはそれだけでも有り難いんだけど…でも、』

ユーノが、何かを渴望しているのが分かった。

『……魔術が……、力が欲しい？』

それは昨日まで私が渴望していたものと一緒。

『そうだね。力が欲しい。僕はね、「結界魔導師」なんだ』

『結界魔導師？』

『結界魔導師っていうのは、防御専門の魔導師のことだよ。仲間の盾となり、攻撃を防ぐ役割が主だね。後はサポートに結界とか封印、バインドと呼ばれる相手を拘束するモノを使ったりするかな？』

『盾…』

『そうだよ、盾さ。なのに僕が昨日したことはなのはを危険に巻き込んだことだけ。結界魔導師としての面目丸潰れだよ。自分で助けを求めてなんだけど。そのことに朝気付いてね。だから…』

『力が欲しくて、リイちゃんに魔術を使えないか聞いたってこと？』

『…うん。力不足って再認識出来たからさ、なのはに魔法を教える時に僕もリイトに魔術を習おうってね。でも、対価が分からないし、なのはと一緒に魔法をやり直そうってね。今はそんなこと考えてる』

少し前の私と一緒にだ。

力が欲しくて、自分が力と思える物に手を伸ばすこと。

今のユーノの声を聞くと、特にそう感じる。

だから、

『私からも、リイちゃんにお願いしてみようか？』

気が付いたらそう告げていた。

『いや、いい』私はレイジングハートをユーノから受け取った。でも私は何も返していない。リイちゃんにお願いすることしか出来ないけど、少しは条件を下げられるかも知れない』……良いの？』

『私だつてずっと力を渴望してたから、ユーノが今本当に力を欲しているぐらい分かるよ。私にとってはユーノは力を運んでくれた恩人でもあるからね。力で困っているのに何もしなかったら、私は最低の人間だよ』

『うん。ありがとう、なのは』

『まだ、リイちゃんが弟子にしてくれるか判らないんだから、それは後ね』

「 それでは、今日の授業はここまで」

ん。やっと四時間目が終わった。

『そう言えば、これから放課後はどうするの？』

『魔法について教えたいから、今日は早めに帰ってきてくれればいいよ』

『分かった。じゃ、その時にリイちゃんにもう一度言ってみようか』

『うん』

「起い立」

遅れないように立ち上がり、礼をする。

お昼休みにアリサちゃんに「あんた、よく名指しで無視できるわね」と白い目で見られた。

流石の私でも、成績やばくないかな？って不安になったのは余談だ。

午後の授業も終わり、アリサちゃん、すずかちゃんと途中まで一緒に下校して、今は家に帰っている最中。

「...」

急に「何か」を感じた。

もしかして、ジュエルシード？

『なのは！』

いきなりユーノから念話が来た。

『今のつて、もしかしてジュエルシード？』

『なのも感じた？ 間違いなく今のはジュエルシードが発言した感覚だよ』

『何処にあるのっ』

『結構近い。念話で僕の後を追ってきて』

『分かった。リイちゃんは？』

感じる方向に走り出す。

『念話でもう伝えた！ 授業が長引いて、少し遅れるらしい。僕達だけでも先に！』

『わかった。でも、いいの？ 待っていた方が』

『せめて結界だけでも張らないと被害が増える。それに目印にもなる。デメリットはないよ』

『分かった』

念話で送られてくる場所に向けて全力で走り出す。

最近走ることが多い気がする。また鍛錬始めたほうが良さそう。

最近よく走るなと思いながら、鍛錬を再開することを真剣に考えていた。

途中でユーノ（フェレット型。少しでも消費魔力を抑えたいらしい。今は肩に乗っている）と合流して、力の発信元である神社に来た。

「この上だよ、なのは」

私はそれを聞いて懐からレイジングハートを手に取り、階段を駆け上がる。

其処には、どす黒い大型犬の様なバケモノがいた。あくまで、様な、だが。

ユーノから緑色の光が広がり、境内を囲むようにドーム状の膜が覆う。

恐らく結界だろう。

結界を張ったユーノが肩で少し息をしながら口を開く。

「原住生物を取り込んでるっ」

「取り込んでると、どうなるの?」

「実体がある分、手強くなってる。なのは、レイジングハートを起動させて!」

「え、どうやって?」

「っ! 我は使命をくから始まる起動パスワードのこと!」

「あ、あんな長い覚えてないよ」

「グル` オオオオ!!!」

ユ一ノと口論をしていると、バケモノがこちらに向かって突撃してくる。

「もう一度言うから、繰り返して!」

「わ、分かった!」

「オオオオ!!!」

「!」

バケモノの威圧に、思わず目を瞑る。

ドクンッ

すると、手の中にあるレイジングハートが輝き、

《スタンバイ、レディ。セットアップ》

手に、赤い宝石の付いた杖が姿を現す。

「パスワード無しでレイジングハートを起動させた…なのは、防護服を！」

唸りながらバケモノが飛び掛ってくる。

慌てて昨日の服を想い浮かべる。すると、

《バリアジャケット》

機械音声がした後に服が変わり、薄い膜みたいなのが張られて、そこにバケモノが突撃する。

「キヤアッ」

後ろに後退させられるが、怪我は何処にもなかった。

それに安心していると、

「ウゝアゝウー！」

何時の間にかバケモノが鳥居の上において、再度飛び掛ってきた。

「しっこい！」

私は思わず杖を前に突き出し、迎撃しようとする。

《プロテクション》

桜色の光が障壁の様に展開される。

バケモノがそれにぶつかり、

バチイッ！

と音を立ててバケモノが弾き飛ばされる。

「なのは、封印を！」

「うん。レイジングハート、封印お願い！」

《シーリングモード、セットアップ》

レイジングハートに指示すると、モードが変わり先端から羽が飛び出す。

「リリカルマジカル ジュエルシード、シリアル16！ 封印！」

《シーリング》

レイジングハートをバケモノに突きつけると桜色のリボンが包み込み、そして一瞬強く輝き霧散する。

封印されたジュエルシードをレイジングハートに回収する。

「これで、いいのかな？」

「うん。これ以上ないくらいに」

一人呟くと、それに肯定しながら結界を解いたユーノが近付いてくる。

「上出来ですよ」

「「!?!?」」

いきなり掛けられた声に驚き、声の方に振り返ると、

リイちゃんがすぐ傍の樹の枝に座ってこちらを見ていた。

「お疲れ様です。なのちゃん、スクライア」

樹から降りて傍まで寄る。

「リイちゃん、居たの?」

「ええ、いました」

私が訊くとリイちゃんは微笑みながら答える。

「あ、少し待っていてください」

そう言い置いてリイちゃんは、近くに倒れている子犬（恐らく取り込まれた原住生物）を抱き上げ、少し離れた所に横たわっている女性の元に近付いて呼び掛ける。

「大丈夫ですか?」

肩を揺ると「ううう」と呻きながら女性が起きる。

「えと…。あれ、あなたは?」

額を押さえながらリイちゃんに問い掛ける女性。

「私は偶々境内に散歩しに来た者ですよ」

「そう、ですか。あの、どうして私は寝ていたのでしょう?」

「貴方は最後の石段に躓いて転んでしまい頭を打ってしまったんですよ。ちょうど私がその時に下から見えましたから」

「それで、気絶を?」

「ええ。頭を打った場合は無理に動かしてはいけませんから、こうして横になって貰っていました。気分はどうです?」

「ええ、問題ありません。ご親切にどうも」

リイちゃんに支えて貰いながら起き上がる女性。

「あと、この子犬はさっきまで起きていたのですが疲れて寝てしまっただけです」

「あ、はい」

子犬を受け取る飼い主の女性。

「では、お気をつけて」

「はい。どうもありがとうございます」

子犬を抱いて境内から出て行く。

そしてリイちゃんが此方に戻ってくる。

私とユーノはスラスラ対応するリイちゃんに少し啞然とする。

「? どうかしました」

啞然としている私たちを見て首を傾げる。

「えあ、うん。なんでもないよ。それよりも」

リイちゃんに声掛けられてハツとする私たち。

そしてユーノが何か思い出して、

「何で手伝ってくれなかったの、リイト?」

リイちゃんを睨む。睨むのはやりすぎじゃないかな?

「手伝いが必要な場面が、ありました?」

「で、でも万が一」

「その時に、私かなのちゃんを見捨てるだけでも?」

「「……。」」

そ、それは見捨てないで助けてくれるとは信じているけど。

「じゃあ、何でなの？」

「なのちゃん、私はこう言いましたよ昨日。経験を積ませる、と」

「じゃあ、手伝わなかったのは…」

「ええ。少しでもなのちゃんによりよい経験を積ませる為です。当然のことですが、若しなのちゃんでは手に負えなくなれば助けるつもりでした」

それを聞いて安心する。見捨てられた訳じゃない。

「そっか。じゃ、これからも？」

「そうですね。出来る限り、なのちゃんに頑張ってもらうつもりです。まあ、無理をさせない程度には、ですが」

「分かった。これから頑張る！」

つまり、可愛い子には旅をさせよっていう精神だよな？

「スクライアも、それでいいですか？」

ユーノに視線を向ける。

「危険になったら助けてくれるんだよね？」

「ええ」

「なら、いいよ」

「そうですか。すみませんね、勝手に決めて」

「いや、いいですよ。別に……それと」

「？ どうかしましたか？」

ユーノが言いにくそうにしている。

魔術のことをお願いするんだ。

「リイト、僕に魔術を教えてくださいませんか？」

「魔術を……ですか」

眉を顰めるリイちゃん。やっぱり、あまり進んで教えてはくれないみたいだ。

「リイちゃん。私からもお願いする。ユーノに魔術を教えてくださいませんか？」

私からもお願いする。

するとリイちゃんが驚いた顔をする。

「なのちゃんが他人の為にお願いしますか」

自分でもかなり珍しいことをしている自覚はある。

「やっぱり、対価がないと駄目なの？ それって何なの？」

「私としても、あまり魔術関係で安請け合いはしたくないのです。それにスクライア。仮に私から魔術を教えてもらうことになったとしても、貴方はジュエルシードの件で此処に来ているのですよ?」

「……………」

「つまり、集め終わったら部族の元に帰るのでしょうか。何時まで掛かるかはまだ目途も立っていませんが、そこまで長期でもないでしょう。あなたは、そんな時間で魔術を実戦までもっていけるとしても? 私ですら今のレベルになるのに九年掛かりました」

「あ……………」

「魔術回路がある程度の本数使えるようになるまで、それこそ血反吐吐いても一ヶ月は掛かります」

リイちゃん言葉に、私たちは何も言えなくなる。

魔術回路を起動させるには痛みが伴うことを聞いているからだ。ユーノも聞いただろう。

「あなたに、そんな時間がありますか?」

side in
ノside

「…ない、です」

ライトからの言葉に奥歯を噛み締める。

まただ。

また僕は現実を見ていなかった。

そうだ。

僕は初めて新しい力を習うんだ。

魔法と魔術が同じ様モノなら、なのはの様な才能が有れば出来ただろう。

だが、今習おうとしていたのは全く違う力。

魔導師だからこそ分かる。

魔術と魔法は真逆のモノと言っていい。

魔法でさえ、優秀と称されて、今のレベルに至るのに数年掛かったのだ。

才能が有るかも分からないモノが、直ぐに手に入るわけない。

それに有ったとしても、問題は時間だ。

これを全く考えていなかった。

今の僕のやるべきことはジュエルシード集め。

魔術を習うことではない。

仮に習ったとしても、物凄い中途半端なまま終わる可能性が高い。

リイトにしたら、そんなの御免なのだろう。

後は、スクライアの方だ。

魔術は当然リイトのいるこの世界に習いに来るわけだ。

ここに長期滞在しなくてはならない。

長と話をしないと、当然駄目に決まってる。

解決しなきゃいけない問題は多い。

それを考慮していないとは、如何に現実を見ていないか再認識した。

昨日も認識したばかりのに！

「すみません。また、現実を見ていませんでした」

リットに頭を下げる。

なのにもお願いさせておいてこの始末。

すぐ横のなのは顔を見る。

唇を噛み締めてる。

きつと、見通しが甘いとか考えているのかも知れない。

でも、それはなのではなく、僕だ。

君が気にすることなんか何も無い。

なのには、謝らなくちゃ。

「理解してくれましたか？」

「……はい」

「では、その問題を解決してきてください。若しくは解決させると誓いなさい」

「「は？」」

なのとはモる。

「だから、問題を解決させてくるか、それを確約するのなら、魔術を教えるもいい、と言っています。理解できましたか？」

何を当たり前のことをつ的な目をして言うリイトさん。

「いや、あの。教えないんじゃない？」

僕がそう言つと、彼は首を傾げて

「誰が何時、弟子にしないと仰いました？ 私は安請け合いはしない、としか言つてもせんし、問題を把握していない貴方に理解させただけです。何を勝手に勘違いしているんです」

「じゃ、じゃあ、ユーノを弟子に取ってくれるの？」

なのはが恐る恐る訊く。

「他ならぬなのちゃんからのお願いですしね。しかも昨日今日会つたばかりの子の為にお願いするなんてことありませんからね。流石に無碍には出来ません」

肩をすくめるリイト。

「で、でも、対価は？ 等価交換なんですよ？」

こればかりは用意できるか判らない。

「等価交換と言っても、物とは限りませんよ。貸し借りも立派な等価交換です」

「じゃあ、貸しつてことになるんですよ？」

そう訊くと彼は手を顎に添えながら考える。

「そうですね。まだ決めてませんが、追々決めましょう。で、どうします？ ジュエルシードの件が終わって問題を解決させてから習うのか、解決を確約して今日から習うのか決めてください」
少し考える。

「あ、勿論最優先は事項はジュエルシードとなのちゃんの魔法の修行ですから」

補足を入れられる。でも、

「問題を必ず解決しますので、今日から教えてください」

即座に決めて頭を下げる。

「分かりました。ではさっそく今日から教えていきましょう」

「はい、ありがとうございますっ」

もう一度頭を下げる。

「良かったね、ユーノ」

「なのはもありがとう」

「いいよ、別に」

なのはにもお礼を言うと苦笑して手を振るっ。

大半が彼女の御陰なのだ。

これくらいじゃ足りない位だけど、あまり言い過ぎても受け取らないのは分かるのでこれ以上は言わない。

「さて、そろそろ家に帰りましょうか。決めなくてはいけない事が増えましたので」

そう言っただけで家に向かって歩き出す。

途中、

「うん。お腹空いたの。リイちゃん、今日はハンバーグが食べたい」

「あ、僕もそれがいい」

「そうですか。ふむ、ちょうど大根などが在った筈なので、今日は和風ハンバーグですね」

「わーい」

なんて会話もあり、すっかりこの人たちに馴染んでいる自分がいた。

なのは周りの人が明るい御陰かもしれない。

こうして、僕が高町家に居候になってからの初日が終わった。

ちなみに帰宅すると、

「な、なにこの臭い！？ 瘴気！？ キッチンから瘴気が！！」

「ユーノ！ 人聞きの悪い言わないでよ！ いつもリイちゃんがキ
ュートなエプロンで料理を作っている神聖な領域からそんな邪神の
住処に有る様なモノが、つてまさか！？ “奴”が！？」

「！？ この臭いはっ！？ つく！ 不味い、手遅れです！ まさ
か“奴”がこんな暴拳に出るとは想定外でした。すみません、なの
ちゃん、スクライア。この事態は私の甘さが招きました」

「“奴”つて誰？！」

「違うよリイちゃん！ 全部こんなことをした“奴”のせいだよ！」

「だから誰！？」

「あ、おかえりー、なのは、リイ、ユーノ」

「「出たな（出ましたね）“DEATHコック”《高町美由紀》！
！……！！」」

「ちよつとおお！！？ 今、デスコックって言わなかった！？」

「それがどうした（しました）！！」「コック」という文字が有るだけ感謝して（しなさい）！！」「」

「流石に言い過ぎだよ！？ 今回も少し失敗しちゃってちよつと変な臭い「ちよつと！？ この瘴気がかがですか！？」っっ！ ユーノ酷い！ リイちゃんが遅いから気を利かせて私だって頑張ったのに！」

「「気を利かせた（ですって）！？ だったら作るな（らないてください）！！」「」

「何作ろうとしたらこんな瘴気が出るんですか、美由紀さん！」

「瘴気じゃないもん！ 簡単そうだったからハンバーグを」

「！？ ね、姉様、材料は？ ご自分で買いに？」

「え、ううん。冷蔵庫に有る物使ったよ？ あれ、駄目だった？」

「そ、そんな。今日は和風ハンバーグを作ろうとしてたのに……。残りは？」「ないよ」「っ！」

「じゃあ、リイちゃん特性のハンバーグは！？」

「そ、そうですね、どうなるんです？」

「え、私の食べれば」「「食べるか！！」「」「うえ〜ん！」

ガチャッ「ただ、い……ま……。」

「あ、恭ちゃんおかえりー。今日の夕飯は私がつく「俺、今日は忍の家に行く、じゃ!」ちよ、何でいきなり出て行くの〜!」「ガチャツ。ただい、ボタンツ」「〜っ! もう! 何で私がつつただけで皆拒絶するの! もしかしたらリイのより美味しいかも知れないじゃない!」

「「それは無い!〜!」「」

「うわ〜〜〜んっつ!〜!」

この後、キッチンで《浄化》をして、それから買い物をしたため、何時もより夕飯がかなり遅くなった。

8 第二奏 初日（後書き）

イエレミー「読んでいただき、本当にありがとうございます。今回、かなり適当感が出てしまい、本当に申し訳ないです。

これも、未熟ゆえです。少しでも上達するように頑張っていきますので、暖かい目で見てくださいと幸いです。

急にですが、これからの更新スピードが落ちます。

恐らくですが、一週間に一話、といった具合になると思います。

少しでも楽しんでいてくれた人に本当に申し訳ないです。

せめて、一週間に一話は何とか死守していきたいので、見守って下さると幸いです。

それでは、次回に、また」

9 第三巻 寝る前は講義？（前書き）

更新遅れました。

大変すいません。

9 第三巻 寝る前は講義？

くなのはside)

「ふにゆうわ~~~~ん」

只今の時刻、深夜一時。日曜日です。

ベッドに腰掛けている私、高町なのははとてつもない眠気に襲われています。

ユーノの居候した日から毎日、放課後や夜ジュエルシードが発動しています。

そして今日（正確には昨日）もジュエルシードが発動して、それを封印しに行きました。

それも学校です。

いきなり襲ってきた不気味な人型の思念体を思わずレイジングハートで殴り倒して、透かさず封印するというスピード解決しました。

私はあまり動いていないのですが、魔力を多く使うというのは体に結構疲れが来ます。ましてや上手く魔力行使が出来ない私は結構疲労が溜まっているようです。

なので、私は今直ぐに寝たいのです。

ですが、問題があります。

それは、

「これから、私が知る中でも主に戦闘で使われていた魔術について説明します」

「うん。僕は“魔法”に至りたい訳でも、“根源の渦”に至りたくないわけではないけど、それよりも力を身に付けたいからね」

この二人が、魔術の話をしているからです。

今日は疲れたので、リイちゃんと寝れることになったのですが、ユーノに魔術の講義が有るので、それが終わるまでこうして待っています。

三時間程。

今は暇つぶしに二人の講義を聞いています。

「全ての魔術師は根源の渦を目指すつと云っても過言ではないのですが、そうすると、私とスクライアは異端でしょうね」

「リイトは目指さないの？ 君って、戦う者、じゃなくて、生み出す者、なんでしょ？」

ユーノはそう問い掛ける。

そう言えば、前にリイちゃんが「自分は異端な生み出すモノ」って
言ってた。

「確かに私は『生み出すモノ』です。ですが、私の家系は魔術師の
家系中でも変わっていて、魔術協会の依頼や荒事を主に生業として
いた戦闘者ですからね。だから偶にですが戦闘の時に命を落として、
代の引継ぎが出来ないこともあったそうです。それが多々続いてか
ら私の家系は根源の渦を目指すことは殆ど無くなりました。私も特
に目指したいと思わないので、今までの代の様に偶に来る時計塔の
依頼をこなしています」

「そうなんだ。で、そろそろ教えてよ」

「はい。といっても余り知りませんが。主に相手が使ってきたの
は魔眼に五大元素、後は戦闘用の魔術礼装ですね。基本魔術師は荒
事はしませんからね、目を付けられたくないですから。あ、後は極
めることの難しい『強化』のみで一流にまで至った変人が居ま
すけど、これは例外で」

「ははは…は。確か、強化って肉体で例えると神経、筋肉とかを逐
一設定し補強する魔術だよ。物の場合は材質とかの強度とか性能
を上げるんだっけ？」

「ええ。おまけに強化は誰でも出来る初歩です。当然人によって煉
度は違ってきます。戦闘に特化した魔術師なら強化の煉度も高く、
家の美由紀姉様と互角には戦えます。ですが、それは他の魔術も合
わせて互角でしょう。しかしあの奇特な人は純粹に強化魔術のみで
す」

リイちゃんが奇特や変人なんて言うなんて珍しい。

その人のこと嫌いなのかな？

「…戦ったことあるんだ？」

「一度だけ。正直言って強化の認識が変わりましたよ」

「勝った？」

「ええ。幸い、強化の魔術は一流ですが、戦闘は二流に届くかどうかでしたので。私は戦闘なら一流の魔術師にも勝てると自負していますし」

「それ聞くと、やっぱり僕が目指すのはリイトの様な魔術師しかないね。僕もまほ…じゃない、‘魔導’も魔術も二流三流で構わないし。戦闘に役立ってくれれば」

「まあ逆に言えば、私は一流の魔術は扱えないわけですが、ん。そろそろ話を戻しましょう。さっき言ったように、私が知っているのは魔眼と五大元素と魔術礼装が魔術師の主な攻撃方法です」

「正確にはその相手が主だった、でしょ？」

「はい。極論ですが、どんな魔術も戦闘にある程度は関わってきます。ですが、全部習得させてたらそれこそ長い時間が掛かります。なので、“契約”通りに戦闘に使われる魔術を身に付けて貰います」

リイちゃんの契約という言葉で私は一気に目が覚めた。

そのせいでユーノをぎろつと睨む。

だけどユーノはそれを無視。

「とうか二人とも私の存在を忘れてる？」

「そうすれば、直ぐに戦闘に使える？」

「ええ、貴方次第ですけど。初めてスイッチを作った時のことを考えると、あまり心配は無さそうですね。煉度と相手にもよりますが最低牽制は出来ますよ」

「スイッチの時かあ、うん。気持ち悪かったね。魔導で術式の制御に慣れていたのが幸運だったんだよね？」

ユーノが若干遠い目をしながら呟く。

「ええ。出なければ一回も魔術回路を立ち上げたことがない初心者が、十秒足らずで自身の魔力制御が出来ますか」

「はは、そうだね。その後直ぐにイメージも浮かんだし。風は熾セトアップきる」

ユーノが目を瞑って呟く。

魔術回路を起動させたみたい。

起動は白い羽が舞い上がるイメージがしたらしい。

最初思ったけど、「セトアップ」ってデバイスの起動言語と同じなの。

「ん。立ち上げはスムーズに出来ているみたいですね。切つていいですよ」

「風は止む。うん。やっぱり少し痛いね」

ユーノが米神を揉みながら苦笑する。

でも、初めての頃（三日前だが）は毎回顔を顰めていたのだから、制御に慣れてある程度は痛みが引いてきたみたい。

「制御に慣れれば只の起動では殆ど痛みはありませんよ。まあ、痛みが完全には無くなりませんが」

ユーノの言葉にリイちゃんも苦笑する。

「実感して解ったけど、苦痛の無い魔導師ってかなり楽だったね。今まで魔導を使ってあんな痛みを味わったことはないよ。非殺傷設定の有無といい、魔導ってかなり生温いつて解った」

ユーノの言葉通り、私とユーノが使う魔導には非殺傷設定という、相手を傷つけないで魔力ダメージだけを与えるというのがある。普段の設定がこれ。任意によって設定を変えられる。

対して、魔術にはそんなモノがない。

というか神秘である魔術にその発想が間違っていて、何でもかんでも非殺傷など物理破壊などの設定がある魔導の方が異常とのこと。

ちなみに、「魔導」っていうのはユーノが魔術について説明を受け

た時、当然「魔法」の定義も教えられて「僕たちの「魔法」って途轍もなく「魔法」に対して失礼ですよ。これから「魔導師」から取って「魔導」っていいです。なのはもそうしよう?」って言うて呼び方を変えてしまったの。

正直、私も恐れ多かつたから変えて良かったと思う。

リイちゃんが言うには魔法使いは居るんだから、その人たちに対する侮辱以外の何者でもないと思うから。

「ちゃんと、一ヶ月以内」に牽制までもっていけるかな?」

ユーノが少し不安そうに对面のリイちゃんを見上げる。

私以外の女がリイちゃんに潤んだ瞳を向けないで欲しいの。ツブスヨ?

「『契約』通り、そこまで至る修行は考えましたよ。後はユーノ次第です」

「期待していいよね?」

「私としても、『魔導と魔術が使える相棒パートナーが手に入る』のは大変魅力的ですから、真剣に考えましたよ。だから貴方の戦闘スタイルまで考えた上で必要な魔術のみを叩き込むのですから」

そう、パートナー。

それがリイちゃんからユーノに突き付けた条件ではなく、『契約』。

バケモノ犬のジュエルシードを封印した夜、魔術について簡単に説明したリイちゃんは、ユーノに魔術を教える為の‘条件’を突きつけた。ちなみに最低条件が自分の問題を解決するだった。

一つ目に、魔術を他の誰にも教えてはならない。これは、最低限存在を知られてもいいが、どういったモノなのかを理解させるなど言われている。戦闘で誰かに見られてもレアスキルと言って誤魔化せとも言われていた。当然部族の皆にも誤魔化さなければいけない。

理由は魔術の隠匿の為と、威力が下がるのを恐れていたこと。

ユーノはこの条件を了承。

二つ目に、もし魔術師と戦うことになったら魔導は使ってはならず、魔術で乗り切れとのこと。

これはこの世界に魔導を隠匿するため。

これに対しユーノは了承するが、代わりに更にお願ひした。

内容は一ヶ月、もしくはジュエルシード事件が終わるまでに戦闘で使える魔術を教えてくださいとのこと。

リイちゃんは「魔術ナメテンノ？」と珍しくキレた。

ユーノはそれでも食い下がり、必死にお願いした。

そしてリイちゃんが少し考えると、‘契約’を持ち出した。

「貴方が私の“相棒に成る”と、^{パートナー}契約’してくれるのなら、本当に

戦闘で使われるだろう魔術のみで一ヶ月もしくはジュエルシードの件が終わるまでに戦闘で牽制ぐらいには至る様な修行を考えましよう。幸い、怪我を診た時に魔術回路の性質、貴方の使える五大元素の属性も把握しましたので、後は戦闘スタイルを確立させるだけで修行内容は絞られます。当然厳しいモノになります。それでも構わないというのなら、私と契約しなさい。どうします？ ユーノ・スクライア？」

ユーノは少し考え、ジュエルシードの件が終わったら他の魔術もちやんと教えてくれるなら契約すると答え、リイちゃんはそれで了承しました。

そしてユーノはリイちゃんが家系に代々伝言霊で誓い、‘契約’した。

その時の内容が新郎新婦の誓いの言葉を連想してしまい、私は契約後にレイジングハートでユーノを袋叩きにしたが、私は悪くない。全く無い！

寧ろ生かしているのだから感謝して欲しい。

特に魔術的な契約ではないが、リイちゃんの家ではこの契約は何やら昔に神聖な儀として扱われていたため、今でも特別な誓いの時に使うそうだ。

この契約の儀は使われてから、今まで一度も破棄されたことが無いと伝えられていて、破っては成らない禁忌とまで言われているらしい。

「さてまた少し話が逸れましたが、さっきの三つの内の何れかが大

半の魔術師の主な戦闘手段です。そして貴方にそれを当て嵌めると、貴方は五大元素ですね。それが貴方の攻性魔術になるでしょう。ちなみに使えるのは三つもあります」

思考が少し飛んでいると、リイちゃんがユーノに説明していた。

「風、空、水ですね。メインは風です。三つも属性が在るのはかなり貴重なので、貴方は恵まれていますね」

「風かあ。どんな風に使うの？」

「それは自分で決めなさい。あと、」

リイちゃんはそこで一旦句切って、ユーノを見据える。

「当然ですが、恵まれているからって普通は ジュエルシードの件が終わるのが何時かは解りませんが、一ヶ月程度で五大元素で攻性魔術を使い物、牽制ですら、無理です。発動出来なくはないですが、何工程必要なのか数える気にもなりません。そんなの戦闘で使えるいと同義です」

真剣に話すリイちゃんに真剣に話を聞くユーノ。

「ですが、それでは契約違反をしてしまうことになります。私は貴方を短くても長くても一ヶ月を目途に攻性魔術を牽制の域には届かせると契約したのですから」

「じゃあ、どうするの?」

ユーノが口を開く。

「魔術師の基本は覚えていますか？」

「うん。足りなければ他から持ってくる、でしょ？」

レイちゃんの問いに淀みなく答えるユーノ。

「その通りです。貴方は恐らく、三属性の発現は一ヶ月でも出来るでしょう。‘理解する’ということに至ってはかなり優秀ですから、魔術の理論、構成、工程、発現に至るまでは一ヶ月で基礎はマスター出来るでしょう」

レイちゃんは続ける。

「ですが、それが望んだ出力に至るかは別問題です。ましてや戦闘中で使い物にならないくらい工程が必要だったら論外です。そこでさっきの問いです。望んだ出力が出ないなら上乘せすればいい。工程が長いなら短くすることです」

「どうやって？」

ユーノが問う。

「魔術礼装ですよ」

「魔術礼装って、ライトが付けてる魔術を補助したりするアレでしょ？ でも、一ヶ月で魔術を覚えながら作る時間なんて在るの？」

確かに。そんな時間なんて在るのかな？

それじゃ目的がジュエルシードからユーノ魔術師育成計画に変わっちゃうよ。

するとリイちゃんが、呆れた顔で告げる。

「バカですか貴方は。そんなモノ、数日前に魔術を知った素人が作れる筈ないでしょ。作るのは私です」

その言葉に

「「え？」」

私とユーノの声が重なる。

そしてユーノがハツとして口を開く。

「さ、流石に悪いよ」

「何言ってるんですか。未熟の身ながら私ですら複数の魔術礼装の補助無しでは戦闘では十分な力を発揮できません。少なくとも同じ威力にはなりませんし、魔力をバカ喰いします。その私より遥かに劣る素人の貴方が何の補助なしで一ヶ月で戦闘で牽制でも魔術を使用できるレベルに至ると本気で考えましたか？ 封印指定のバケモノ魔術師が束になって師になっても無理ですよ、そんな芸当。そんなの既に魔法ですよ」

「それは……そうだけど」

口籠るユーノ。

「それに、礼装は殆ど出来ていますよ」

「へ？」

その言葉に更に私とユーノの目が点になる。

早すぎない？

その私の考えを読み取ったのかリイちゃんは答えてくれる。

「実は私が一年と少し前から作っている礼装が二つあるんです。それが完成間近の時に貴方が相棒になってくれると契約したので、急遽術式を少し変更して貴方に合うように作り変えている最中なんです」

「そ、そんなの悪いよ。一年も前から作ってたんでしょ？ そんなちゃんとした礼装じゃなくても簡易的な物で十分すぎるよ」

ユーノが慌てる。

まあ、一年も手掛けている物を行き成りプレゼントするなんて聞かされたら普通は慌てるよね。

リイちゃんは構わず続ける。

「何言ってるんですか。手抜きの礼装を私に作れと？ そんなの御免ですよ。大体、そんな物じゃ大して効果も有りませんよ。貴方は私の弟子、というか相棒パートナーに成ったのですよ？ そんな貴方に弱いままでは居られたら私が困るのです」

「で、でも」

ユーノが食い下がる。

「貴方は私の弟子でもあり、相棒でもあるんですよ。弟子に中途半端な礼装を渡したら、師としての私の程度も知られます。まあ、其処は別に気にしてませんが。ですが、さっき言った通り貴方は私の相棒なのです。相棒が私より遥かに格下なんて相手にも想われたくありません。ですから、貴方にはさっさと私の域にまで近付いて欲しいのです。幸い、今作っている礼装は出力アップを念頭に作られているので、貴方の魔術を底上げしてくれます。牽制には至るでしょう。後は貴方が三つの元素を発現出来るようにさせ、効率化を図るだけです。何か不満が？」

「……そんなわけ、ないじゃない。ありだとう」

「どういたしまして。ん、そろそろお仕舞いにして寝ましょう。なのちゃんが疲れていますし」

「そうだね。それに今日は休みだし、時間は在るんでしょ？」

「はい」

二人は笑いあう。

それを見て私は胸がチクつと痛む。

ユーノが立ち上がる。

「じゃ、僕も部屋に戻って寝るね。お休みなのは、ライト」

「ええ。おやすみなさい」

そう言っつてユーノは部屋から出て行く。

「さて、私たちも寝ますか」

私はベッドに入り、リイちゃんは部屋の電気を消してから入ってくる。

お互いに向き合つ格好で寝る。

「寒い」

小さく呟く。

するとリイちゃんが苦笑しながらも抱き寄せてくれる。

体全体が暖かい温もりに包まれる。

「これで大丈夫ですか？」

「うん」

本当は大して寒くないのだが、さっきのユーノに優しくしているリイちゃんを見てたら胸がざわついたからそれを落ち着かせるために言った嘘だ。この温もりに包まれると幸せな気持ちで満たされるから。

リイちゃんが優しくしている対象は今まで私しか居なかったから、ユ

ーノに嫉妬してしまった。

リイちゃんは基本優しくは無い。

親しげに話したりはするが、優しくは無い。

優しくする対象は私だけだ。今ではユーノもその枠に入っている。

理由は簡単。魔術を、‘内側’を知っているから。

全部ではないけど、私の周りで私以上にリイちゃんの秘密を教えられて
もらっているのは居ないと断言できる。

お母さんやお兄ちゃん、お姉ちゃんも聞かされてないしお父さんな
んて論外だ。

だって、お父さんはリイちゃんの両親を殺しているから。

これを聞いたのは御神流を習うときにお父さんから聞いた。

それにお母さんも論外かも知れない。

リイちゃんはお姉ちゃんたちのことを姉様と様を付けている。

だけとお父さんとお母さんには母さん父さんと呼んでいる。

死んだ両親のことは父様母様と様付けで呼んでいたらしい。

これは言外に貴方たちは親と認めただけではないと言っている。

私の場合は呼びやすい自分だけの呼び名で呼んでくれているから特別なのが一目瞭然。

でも、その特別な私ですら、拒まれている、のを“私は気付いている”。

その理由も気付いている。

リイちゃんは‘本当に大切なモノ’を作って失いたくないから、拒んでいるんだということも。

‘あの時’、本当は私よりもリイちゃんの方が孤独で耐え切れなくて私と居たということも。

孤独の恐怖と失う恐怖、二つの感情に挟まれながらも尚根底で人を拒み続けていることで自分を保っている事実を私は知っている。

でも

私は瞼を閉じながらもしがみつく腕に力を入れる。

「ん」

リイちゃんが背中に回した腕で頭を撫でてくれる。

そんな恐怖も、“愛”の前では塵同然なんだよ？　リイちゃん。

9 第三奏 寝る前は講義？（後書き）

イエレミアアス「どうも。一週間ぶりです。

読んで頂き本当にありがとうございます。

更新は一週間に一度のペースになってしまつてしまうでしょうが、なるべく早く更新出来る様にしていきたいと思っています。

短いですが、ではまた次回に。」

10 第三奏 “高町なのは” (前書き)

イエレミーアス「すみません。マジすみません。本当にごめんなさい(土下座)。

更新遅れました。言い訳はしません。もう本当にごめんなさい!-)
もう一度土下座」

なのは「まったく、遅すぎなの」

イエレミー「うわっ! 何、いきなり出てこないでよ」

ライト「確かに、遅いですね」

イエレミー「ブルータス、思えもか」

ユーノ「もう少し頑張りなよ」

イエレミー「帰って、性転換者」

ユーノ「したの君だよね!？」

イエレミー「いいじゃん。原作ブレイクしたいし」

ユーノ「そんな理由?!」

ライト「こらこら、二人とも止めなさい。それよりも早く始めましょう」

なのは「リイちゃんの言つとおりだよ？ ノロマに変態」

ユ一・イエレ「黙れ、この狂愛者が！！」

なのは「あ？」

ユ一・イエレ「あ、あ？！」「」

リイト「三人とも、止めなさい？」

ユ一・なの・イエレ「はい」「」

リイト「疲れます。とりあえず始めましょうよ」

ユ一「きつとそれは、誰でもよくある些細なことだった」

なのは「でも、その些細なことが大きくなるなんて私は知らなくて」

リイト「自分を否定してしまった」

ユ一ノ「でも、彼女は新たに創める」

リイト「本当の自分を」

イエレミ一「魔法少女リリカルなのは 魔法少女は儚き幻想ユと共に
歩む」

なのは「第三奏 “高町なのは”」

ユ一・リイ・なの「「「始まります」」」

10 第三奏 “高町なのは”

「なのはside」

「~~~~んう。……眠いの」

日曜日。

時刻は現在九時。

朝起きると隣にリイちゃんは居なくて、もう起きてるみたい。

私は重い瞼を擦りながら洗面所いき顔を洗って自室に戻り服を着替えてリビングに行く。

テーブルにはリイちゃんとユーノの二人だけが座って会話していて、他の人はなかった。

「おはよう。リイちゃん、ユーノ」

「おはようなのちゃん（なのは）」

挨拶するとリイちゃんがキッチンに行き料理を温めて持ってきてくれる。

それをいただきますと手を合わせ食べ始める。

朝はリイちゃんに和食と言ってあるから例に漏れず暖めてもらった味噌汁や焼き魚、出し卵にひじきに混ぜご飯を食べ始める。うん、いつも通りとっても美味しいの。

私の食べてる前でリイちゃんはユーノと話を再開する。

「次は、私が使っているルーン魔術について説明します」

どうやら魔術の講義みたいだ。

暇なので少し耳を傾ける。

「ルーン魔術は、ルーンを直接的、または遠隔的に‘描く’という行為によって成り立っています。主な使い方としては、私の真意^アを接^{ンサス}げるモノとかの様に装飾品に刻み込んで魔術礼装にしたり、術式の補助にされるのが一般的です」

「術式の補助ってことは単体で戦闘には使えないの？」

ユーノが問い掛ける。

「使えなくも無いですが、あまり使われることが無いですね。私は使いますけど」

「どんな風に？」

「私の魔術礼装には術式とそれを補助するルーンが刻んであります。それに更にルーンを描くことによって、ルーンが術式を補助し、その補助された術式が描かれたルーンの補助をするっといった具合です。二流の私では、そうでもないかと単体では一流に太刀打ち出来

ませんから。一流のルーン魔術師なら、礼装に頼らずにルーン単体でも、私と同等か、上をいきます。まあ、ルーンを一流にまで持つていこうとする人は、極少数だと思いますが」

「強化と一緒にってこと？」

「そうですね。強化と一緒にで凡庸的な魔術ですから」

ユーノの言葉にリイちゃんが苦笑する。

「ルーンで描かないと発動しないの？」

「ええ。強化の魔術の時に対象に魔力を流すように、ルーンには描くという行為が必要になります」

「効果を上げる方法は？」

「礼装で魔術を底上げするか、ルーンを描くときに神秘を帯びたナイフなどで刻む方が効果は高くなります」

「へえ」

でもリイちゃん。一回私が前に見せてって言ったら私のシャーペンで紙に書いて氷を生やしていたよね。

リイちゃんてルーンは「二流」断言してたけど、ルーンとか強化の場合には他の魔術で言う「一流」なんじゃないのかな？ リイちゃん以外の魔術師のレベルを知らないから判らないけど。

「あ、そう言えば昨日聞き忘れたんだけどさ、ライトの属性って何

「？」

私が箸を少し止めていると、ユーノがそんなことを言い出した。

「ほら、僕って五つの属性の内に三つ在るんでしょ？ リイトは何の属性なのかなって」

私はユーノの言葉に首を捻る。

リイちゃんて、属性が五大元素じゃなかったよね？

確か

「“星”ですよ」

「星？」

ユーノがきよとんとする。

「星なんて属性在るの？」

「目の前にその保有者が居ますよ？」

リイちゃんが自分を指を刺しながら微笑む。無駄に可愛いしぐさだと思っの。

「まあ、多くは言わないですが、稀に五大元素以外の属性を持つている人は居ますよ。但し、その属性に特化している為、使い勝手が良いかは判断出来ませんが」

「そうなんだ」

ユーノは少し納得してない風だったけど、これ以上は教えてくれな
いと判ったのか引き下がる。

私は少し聞いたことあるけど、難しくてよく解らなかった。確か“
星”っていうのは「世界」を表しているとか何とかって…。思い出
せない。また聞いてみようかな？

そこで考えるのをやめて、止めていた箸を再開させてご飯を食べる。
うーん。砂糖の甘い卵焼きも好いけど、出しの卵焼きも美味しい

その後は殆ど話も聞かず黙々と目の前の料理を食べ進めた。

程なくして食べ終えて食器を片付ける。

自分の物以外の食器が無いため自分で洗う。洗い終えてから自分に
紅茶を入れて席に戻る。

二人はまだ少し講義していたが、唐突にリイちゃんが私を見る。

「そう言えばなのちゃん。今日はサッカーを見に行かないのですか
？」

「「サッカー？」」

私とユーノが聞き返す。

私は何で此処でサッカーの話題が出てくるのっという意味で。

ユーノの言い方は「さっかー？」って感じなので恐らくサッカーを知らない。違う世界の住人だしね。サッカーは無いのかな？ もしくは名前が違う？

「ええ。今日は翠屋JFCの試合の日です。なので父さんは其方に行っています。ちなみに兄様と姉様は山で鍛錬です」

お兄ちゃんとお姉ちゃんだから居なかったんだ。

日曜ならお姉ちゃん大抵部屋で読書しているだろうけど、居る気配しなかったし。

鍛錬で思い出したけど、神社での一件から私はまた朝の鍛錬を再開させた。今日はサボっちゃったけど。

内容は前と違い、レイジングハートを起動させての体捌きと槍術の訓練、後は魔導の鍛錬だ。

最初はレイジングハートの姿が杖その物なので杖術にしようとしたら、ユーノが「シューティングモードを見てから決めれば？」と言い皆して「何それ？」と首を傾がユーノはいいからと私に催促し、言われた様にレイジングハートに指示してシューティングモードを展開する。

杖の全体が少し長くなり宝石を囲んでいた先端部分が分解され、銃剣の様に再構成された。

刃は付いてないみたいだが、突起物に加えて長さも槍として使えるため槍術に決まった。

魔導の鍛錬は主に誘導弾の制御と自由自在のコントロールをしている。ただ、リイちゃんのアドバイスで直射弾の練習もしている。

「誘導弾も良いけど全部が全部誘導弾だけだとリソースが増えてしまいそれだけに精一杯に成るからリソースの少ない直射弾も時折混ぜればその分余裕が出来る」とはリイちゃんのお言葉。

直射弾の方を貫通性と速さを誘導弾より上げれば尚良いらしいみたい。

今はこの二つを鍛錬しているけど、その内「砲撃」というのも練習していくらしい。鍛錬のメニューはユーノとリイちゃんとレイジングハートが意見を出し合い決めているみたい。私は蚊帳の外。

レイジングハートは元々が射撃と砲撃を主体に置かれたデバイス。

私との相性が見事に一致しているらしい。

ユーノは攻撃系の魔導の適正が皆無だから、私にレイジングハートを渡すときに特に未練は無かったみたい。まあ、私としては魔導に目覚める切欠だけで十分なんだけど、貰える者は貰っておきたい。

ついでにレイジングハートについても聞かされた。

レイジングハートは「インテリジェントデバイス」という種類のデバイスとのこと。

このデバイスの特徴は、意思ではなく、'意志'を持っているという部分。只の人工知能とかではなく、

ある種の使命みたいなモノをそれぞれが持ち合わせているらしい。

なのでこの種類のデバイスは人を選ぶ。例えば、全く一緒の戦闘スタイルの魔導師同士が居て、全く同じような性能のデバイスで交換をして使ってみても、そのデバイスの真価を発揮することは出来ならしい。

もし真価を発揮させることが出来るとするならば、それはそのデバイスの意志に添うことの出来る魔導師のみらしい。

性能は主に自ら主と定めた者の才能を引き伸ばしその性質によって自らを調整したり、その場の状況判断で自ら魔導を起動させることも可能。

意志疎通がしつかりと出来ているのなら、お互いが高め合っていく存在になるみたい。

だからこのデバイスは、‘道具’ではなく、‘相棒’としての見方がかなり強いらしい。

因みにまだ私はレイジングハートに真のマスターと見なされた訳じゃない。あくまで仮のマスター。

別に構わないけど。

まだ私の‘意志’を見てもいないのに認められたらこのデバイスをスクラップにするだろうし。

私はまだレイジングハートに“高町なのは”という存在を魅せてはいない。

決めるのはその後にして欲しい。

ま、私は別に認められなくても構わないのだけど。デバイス無くたってユーノみたいに魔導は使えるんだし。

足りなければその分努力すれば良い話。

閑話休題。

ちよつと鍛錬のことで思考がそれたの。

うん。サッカーの試合ね。そんなことするより鍛錬したいな。特に魔導。

それをリイちゃんに言つと、

「行かないのですか？ 確かアリサちゃんやすすかちゃんと約束していたのでは？」

え？ 嘘、そうだったかな……………あ、うん。暇で気が向いたらつて言ったような気がする。鍛錬するから暇じゃないし、いけないね。

「そうですか。ユーノはどうします？ とりあえず、使える魔術回路の本数でも鍛えますか？」

「うん、そうだね」

どうやらリイちゃんたちもサッカーは見ないみたい。

というか、何時の間にユーノこと名前で呼んでるのリイちゃん？
夜中の講義ではまだスクライアって呼んでいなかったかな？ ユー
ノに唆されたの？

「では、山にいきましょうか」

私たち三人は動きやすい服に着替えて近く of 山に出かけた。

その途中でユーノに何回か直射弾をぶち込んだけど、全部シールド
で防がれた。ちっ、結界魔導師め。後でプログラムにバリア貫通も
追加しとこ。

s i d e o u t

s i d e i n

＼ユーノside＼

「……………」

十二時のお昼時。

僕は高町夫妻が経営している喫茶翠屋のカウンター席で突っ伏している。

直ぐ横にはなのはも同様に突っ伏している。

「えあ、う」

もう呻き声しか出ない。

「……」

なのはは呻き声も出ないらしい。

「平気かい？」

士郎さんが呼びかけてくれる。

僕にはそれに答える力が残ってないが、氣力を振り絞り顔を上げ、目で士郎さんに無理っつと告げる。

苦笑して返された。伝わったみたいだ。

「そんなに魔術の訓練っていうのは大変なのかい？」

小さく肯く。

「今、ライトが軽めに作ってくれているみたいだから、もう少し間

つてなさい」

それに頷いてまた突っ伏する。

突っ伏する前に横のなのはをちらっと見たが、屍のようにピクリともしていなかった。

僕らがカウンターに突っ伏している理由は単に鍛錬のやり過ぎが原因。

僕は魔術回路の本数を多く使いが為に何度も魔力を流し、魔術回路を慣れさせる鍛錬。

なのはは最近覚えたばかりのマルチタスクを最大運用して誘導弾を最多展開して同時運用の鍛錬。

それを僕らは九時半から十一時半までの二時間休み無しで続けた。

僕は魔術行使による全身が焼き切れる様な痛みと使い慣れていない魔術回路と魔力枯渇の疲労で、なのははマルチタスクの最大運用のし過ぎで脳が酷使されて酷い頭痛と慣れない魔導使い過ぎでの疲労で今この状態になっている。

ライトは僕の傍で魔術回路の扱いを見ていたので、こうなることは解っていた（正確にはこうなるまでやらないと魔術回路を短期間で慣れさせることなど出来ない）そうだが、なのはは少し離れた広い空間でやっていた為監督できず僕が倒れて帰る時まで分からなかったみたいだ。

これに対してリイトは怒らなかつたが、少し注意をしていた。ジユエルシードが何時発動するかは分からないから余力は残しときなさい、とのことだ。

倒れるまでやったのに怒らないの？つと聞いてみると

「ユーノの魔術回路の本数を上げるのが大変なように、なのちゃんも魔導を使い慣れてない無いですよ。ただ覚えるってだけなら怒りますが、なのちゃんはこの力を使いこなせなければいけないのですよ。何時何が起きて力が必要かは分かりませんが、なのちゃん自身も目覚めた魔導という力を早く使いこなさなければいけないという意志があります。多分、私の隣に立ちたいのでしょう。私はその意志を否定する気はないし、出来はしないのですよ。掛ける言葉があるとすれば『この程度で倒れるのですか？』と発破をかけるだけです」

と返された。高町家はスパルタ教育みたいだ。時々美由紀さんが何かボヤいてるみたいだし。

鍛錬の関係で思い出したけど、二日前の朝の鍛錬の時に桃子さんを抜いて僕を含めた高町家で強い順番を付けたら、誰が一番強いのかと一郎さんとリイトに聞いてみた。

とりあえず最初に、二人が戦ったらどちらが勝つか聞いてみたら二人に難しい顔をされた。

一郎さん曰く

「不破として一切の躊躇いや体への負担を無視すれば相打ちには出来る筈だ、恐らく。魔術という不安はあるが」

その言葉で、じゃあ強化のみの魔術でやるとどうなる？つとリイトに聞くと、

「魔術を強化のみで殺り合った場合ですか？ 刀で本気でやったとしてそれに加えて脳と肉体のリミッターを全て切っても勝てる確率なんて良くて三割ですよ？ 戦闘者として間違いなく最高峰にいるのが父さんなのですから、生み出すモノの私が戦闘だけで勝てる確率なんて三割もあれば奇跡です」

じゃあ、他の魔術も使うと？

「それならば恐らく五割前後といったところででしょうか？ 私は一流の魔術師にも勝てるとは思いますが、最高峰の戦闘者相手に楽に勝てるとは思いません。というか純粹に魔術無しでやったら勝率なんて一割ありませんよ？ 魔術有りで私と互角に戦える父さんが異常なんですよ？」

ぶつちやけバケモノですつとため息を零しながら言っていたのが酷く印象的だ。

ちなみに一対一の強さの順番は、大まかに一番が土郎さんと僅差でリイト、次に恭也さん、美由紀さん、なのは、僕だ。

まあでも、戦闘ってというのは色々な要素が噛み合わせって成りえるモノだから、やり方次第では如何とでも引っくり返せるみたい。僕となのは以外四人の共通認識。

そんなことを思い出していると、とても好い匂いが漂ってきた。

「はい、ご飯ですよ。何時までも寝てないでください」
顔を上げると、ウェイターの格好をしたリイトが両手に料理を運んできていた。

うん。どうみても男装の麗人って感じがするね。右眼の眼帯がミステリアスな雰囲気醸し出して、思わず見惚れる。

リイトはそれに気付かず料理を僕となのはの前に置く。どうやらパスタ系みたいだ。

すると、

「いったただつきまーす」

何時の間にか起き上がったのはが料理を食べ始めていた。

僕も起き上がり作ってもらった料理を食べ始める。

うん。意外とあっさりしていて美味しい。

十分も掛からずにパスタが胃に収まる。

「アップルパイとミルクティーですよ」

食べ終えた時にリイトが皿を下げてデザートと飲み物を置いてくれる。なのは既にパスタを食べ終えていたため先に頂いていた。フオークで小さく切り口に運ぶ。

サクッとパイが音を立てる。出来立てで香ばしく、絶妙な甘さが口

の中一杯に広がる。思わず頬が緩むのが分かる。

僕も女だから甘い物は大好きなんだよね。

ささやかな幸せを味わって食べていると、後ろから声を掛けられる。

振り返ると気の強そうな金髪の女の子と御淑やかイメージが湧く黒髪（少し紫が混じっている）の女の子、それになのはが居た。なのは少ししばつの悪い顔をしている。

あれ、この二人がなのはの親友のアリサとすずかかな？

「えっと、何か用ですか？」

とりあえず無難に聞き返す。

「あなた、誰？」

金髪の女の子は行き成りそんなことを聞いてくる。

「ユーノ・スクライアですけど……」

名乗ると彼女は「ふーん、ユーノね。あなた、何でなのはと一緒にいるの？」と更に聞いてくる。

何でそんなこと聞かれるのか分からない僕は首を傾げるしかない。

だから素直に「何でそんなこと聞くんですか？」と逆に問い返す。

すると彼女はキッと僕を睨む。

「今日なのはと約束していたのはあたしたちなのよ。なのになのは
ったら何時まで経ってもサッカーを見に来ないし、終わってお昼に
なって翠屋来てみればあんたと並んでカウンターに突っ伏している
し。いったい如何いうことなのかしら？」

その言葉に僕は「ただ鍛錬してきたただけど」と答える。魔術や
魔導のことは伝えていないだろうからその言葉を省く。

これで問題ないよね？って感じになのはの方をしてみると顔を青く
していた。何で？

僕の言葉で彼女は眉を吊り上げる。

「それはあんたが誘ったの？」

『お願い！　そういうことにして！』

彼女の言葉と同時になのはの念話が届く。

どうしようかなと一瞬考えるが、鍛錬に出掛ける時に直射弾「デ
イバインバレット」で狙われたことを思い出し、本当のことを話す。

「違うよ？　だって僕となのはのしている鍛錬は全く違うし。僕は
僕の鍛錬を個別でやっていて、なのはも個別の鍛錬をやってたみた
いだし」

「そう、ありがとね。喧嘩腰で悪かったわねユーノ」

彼女は僕の言葉を聞くと即座に逃げようとしたなのはの頭を鷲掴み

にして空いているボックス席に引き摺っていった。

黒髪の女の子も会釈をしてから追いかける。

『ユーノ。後で覚えておいてよね?』

怨嗟のような念話が聞こえたが、無視した。

『自業自得だよ、なのは?』

最後にそう念話を贈り、念話の回線を閉じる。

何か聞こえたような気もするが特に気にせず、ミルクティーを飲み干し、今度は同じ茶葉のストレートを楽しんでいた。

s i d e o u t

s i d e i n

くなのは s i d e く

アリスちゃんとすずかちゃんの折檻を受けた私はテーブルに突っ伏していた。

「じゃあね、なのは。今度からはちゃんと断りを一言は入れて置くことね」

「じゃあね、なのはちゃん。ついでになのはちゃん払いでイチゴのシヨートとフルーツタルトお土産で頂いていくね」

二人はそう言っただけで帰って行く。最近すずかちゃんが黒いです。あの黒髪は暗黒物質が体から漏れ出した結果なのでは。

後でユーノに砲撃…はまだ止められてるから止めて、未完成の‘アレ’の実験台にしようかな？と考えながら起き上がる。

「？」

不意に、何かを感じた気がする。

一瞬、本当に一瞬だけど今、ジュエルシードが発動しようとした？
周りを見ってみるがジュエルシードが発動した感じはない。

ふと、窓ガラスから外を見ると翠屋JFCの男の子とマネージャーの女の子が目についた。

「気の、せい？」

ちよっと腑に落ちなかったけど、そう結論を出してユーノとリィちゃん三人で家に帰る。

この時、私はリィちゃんとの約束を破った。

それに気付くのは事件が起きてから。

この日、初めて私は感を否定し、
「高町なのは、
」を否定し
た

家に帰ってお風呂に入り、部屋で寝ていると

「っ!!」

ジュエルシールドが発動したのを感じた。

「いつもより、大きい」

伝わってくる力がこれまでに比べると比較にならない。

ベットから飛び起き即座に着替える。

部屋から出て階段を駆け下りるとユーノとリイちゃんが準備を終えて既に待っていた。

「行きましょう」

リイちゃんのその言葉で私たちは現場に急行した。

~~~~~

ジュエルシードが発動した現場は繁華街のど真ん中だった。

目の前には巨大な樹が幾つもそこ等らから生えていてアスファルトに根を張り、町を侵していつている。大樹の周りにある建物や車には根が這い回り、道路からも根が突き出し、その根は信号機や電柱を薙ぎ倒している。人々は異常な光景を見て我先にと逃げる。

酷い…有様だね

いつもリイちゃんたちと出掛けている町の惨状を目の当りにして胸糞の悪い感じがする。

「ユーノ、結界を最大展開してください」

「了解！」

ユーノの足元から緑色の魔導陣（魔導の陣だから）が描かれ、辺り全域に緑色の光が一瞬にして亘りドーム状の結界を形成させる。

現実の空間から私たちと大樹全てを切り取り、擬似空間に閉じ込める。

「封時結界」というらしい。

「これでこれ以上の被害は出ません」

ユーノは額の汗を拭いながら告げる。

どうやらまだ魔力が全快していないらしく、この範囲を結界で覆うのはかなり苦になるみたいだ。

「全体を見渡せる場所に行きましょう」

リイちゃんはユーノを抱き抱えて近くの大樹の根に覆われていないビルの屋上に駆け上っていく。私はレイジングハートを起動、バリアジャケットを展開してユーノに訓えて貰っているまだ慣れない飛行魔導を使い屋上に飛んでいく。

「？」

飛んでいるときに少し体の胸の辺りから違和感を覚えた。でも少しチクツとする程度なので気にせず屋上に向かう。

屋上には既にリイちゃんたちが着いていた。早すぎると思うの。それからこれが終わったらユーノは一遍シメる。リイちゃんに普通に抱き抱えられていたらまだ許せたものの、顔を上気させながら胸に顔を埋めてたのだ、ユーノは。だけどことがことだから今は見逃すの。

ビルから辺りを見回すと改めて酷い有様だと思う。

根はどんどん建物に這い回り町を侵食している。

「きつと、人間が発動させたんだと思う」

ユーノが町の惨状を見ながら話す。

「強い想いで願ってしまうとその分だけジュエルシードは力を発揮する。ここまで強い力を発揮させることは人間以外では不可能だと思うよ」

ユーノの言葉に人間の想いに限界なんて有りませんからね、と同意するリイちゃん。

私もそれには同意する。想いに上限なんか有りはしない。

「それで、どうすればいいのですか？」

リイちゃんがユーノに問い掛ける。

「ここまで強い力を発揮させられると、元を探して一気に封印しないと駄目です。だからまず」

「その元を探さなくてはいけないみたいですね　なのちゃん、お願いします」

「了解だよ、リイちゃん」

私はレイジングハートを構えて足元に魔導陣を描く。

「っ」

リンカーコアから魔力を汲み上げると、飛行魔導を使ったときより鋭い胸の痛みが襲う。

だけどそれを無視して呪文を唱える。

「探して、災厄の根源を」

私の周囲に魔力で生成された「サーチャー」と呼ばれる無数の端末が浮かび、

《エリアサーチ》

機械音声と共に町に飛び交っていく。

端末からは視覚情報が送信されてきて私はジュエルシードを探す。

「……………っ、見つけた　え？」

サーチャーから送られてきた視覚情報に思わず呆然となる。

ジュエルシードの場所は此処から目の前にある一番大きな樹の幹の中心部分。そこにジュエルシードを発動させた人間が淡い光の膜に覆われている。

発動させた人間は、私があの時不意に目にした、翠屋JFCの男子とマネージャーだった。

…私が、この事態を引き起こした………？

ぎりつと奥歯を噛み締めてレイジングハートを握る手にも力が籠もる。

あの時の感を信じていれば、リイちゃんに話しておけばこうはならなかった！

“高町なのは”を信じていれば！

「なのちゃん、どうかしましたか？」

私が葛藤しているとリイちゃんが呼び掛けて来る。

違う。今はこんなことを考えている場合じゃない。後悔なんか後で幾らでもできるんだ。今はこれを解決させるのが優先事項。

「……ううん、なんでもない。元は分かったよ。正面の一番大きな樹の幹の中心にあるよ」

私は一先ず後悔の念を追い遣り、あそこ、つと元がある場所を指で刺す。

「確かに、男の子と女の子がジュエルシードに取り込まれているね。ユーノ、次は？」

「近くに行って封印しなきゃいけない。だからライトには周りの幹や根を取り払って欲しい」

「分かり「待つて」まし…なのちゃん？」

「どうかしたのなの？」

ユーノの言葉に、リイちゃんが頷く前に私が遮る。

二人が訝しげに私を見てくる。

「このジュエルシードのことは私が全部引き受けたいんだ」

「何言ってるの、なの？ 別にそんなことしなくても「私、気付いてた筈なんだ、あの二人の内どちらかがジュエルシードを持っているの」！？ どういうこと？」

私の言葉にユーノが驚き聞いてくる。リイちゃんは無言で見据えてくる。

私は続ける。

「翠屋でね、一瞬だけジュエルシードの存在を感じたんだ。そしてその時にあの二人が目に残ったの。私はそれを気のせいにして二人にも話さなかった。あの子達に確認するか二人に言えばこんなことにはならなかった。このジュエルシードは私が発動させた様なものなんだよ。…だから」

ユーノとリイちゃんを正面から見据える。

「だから私は、自分でこのジュエルシードを何とかしたい。ううん、しなきゃいけないの！ リイちゃんとの‘約束’を破って自分で引き起こしたこの件を自分で解決しなきゃ、私は、この先きつと何も出来ない」

今まで私は感を否定してこなかった。

リイちゃんとの‘約束’を決して違えなくなかったから。

でも、最近になって魔導を手に入れた私はそちらに目を奪われてリイちゃんとの約束が頭から抜け出てしまっていた。

大切なのは魔導じゃないのに！

私にとって、“高町なのは”にとって一番大切なのは白夢理異菟だけ。リイちゃんを助けたいから、もつと傍に居たいから、力を、魔導を手に入れたのだ。魔導は手段であって目的じゃない。一番じゃない！ 私はそれを一度間違えた。一瞬でもリイちゃんを一番から外した私なんて私じゃない。

“高町なのは”じゃない！

だからそんな‘私’は捨てて、私はもう一度零から始める。

“本当の高町なのは”を！！

私は誓いを胸に、一步踏み出す。

二人は真剣にこちらを見据えてくる。

「信じられなかった自分をまた信じられる様に、今度こそ自分を履き違えないように！ 私はもう一度最初ゼロから創めるよ、“高町なのは”を」

「……！」

ユ一ノが眼を見開いて息を呑んでいる。

けど、

「ふふっ」

リイちゃんは口元に笑みを浮かべる。

私の瞳を覗き込み、宿っている誓いを見据えてくるのが分かる。

「好い瞳めです、本当に。決してただの人が出来るとような瞳ではないです。それは人から一つの存在として成り得た時に創めて瞳に宿ります。貴方は人の前に、“高町なのは”という存在を既に確立させています」

その領域に至る人は本当にほんの一握りですよ、とリイちゃんは苦笑している。宿るって、何がだろう？



「なのちゃんが一人で片を着けたいならそうしても構いませんよ。幸い此処は結界内ですので、これ以上被害は出ませんし、いいですよね、ユーノ？」

「え、あ、う…うん」

ユーノはやけにどもりながら頷く。どうかしたのかな？

「なのちゃんの威圧に中てられたのでしょうか」

私が首を傾げているとリィちゃんが答えてくれる。威圧って何？した覚えはないんだけど。

「その眼は一種の存在を切り替えた状態ですからね、さっきまでのなのちゃんとは別人と言っても過言ではないですよ。今のなのちゃんは分かりやすく言えば殺気をばら撒いている様なものなんですよ。父さんが翠屋のマスターしている時と、朝の鍛錬の時では存在感がまるで違つてしょう？ あれと同じ様なものです」

その言葉に私はなるほどつと納得する。

初めて鍛錬したときに行き成り殺気ぶつけられた時は、お父さんがまるで違つ存在に感じられたし、今の私は正にそれなのだろう。

つとこんなこと考えてる場合じゃないよね、まだジュエルシードは発動したままなんだし。

二人の前に出て正面の大樹に正対する。

「でもなのは、一人でやるのは分かったけど、いったいどうするの？」

後ろからユーノが問い掛けてくるがそれには答えず、

「レイジングハート、シューティングモードに移行して」

《Shooting Mode, set up》

杖は銃剣の付いた槍の様に再構成される。

腕を伸ばして杖の穂先を幹の中心部分に向けて突き出し、両足を前後に開いて態勢を固定する。

そしてリンカーコアから大量の魔力を汲み上げてレイジングハートに注ぐ。

「まさか、砲撃！？ まだ大した訓練もしていないのに無茶だよ！」

「うるさい」

ユーノが大量の魔力を感じて喚いている。集中できないから外野は黙ってて欲しい。

更に魔力を汲み上げる。

「つつく!!!」

胸から全身に掛けて痛みが走る。

今日はバカなことに膨大な量の魔力を鍛錬で使ってしまったからあまり残量は残っていない。

おまけにリンカーコアは魔力を汲み上げればその分だけ肉体だけでなく、リンカーコア自体にも疲労が蓄積される。そして過度に使いば焼ける様な痛みを襲われるのだ。それでもユーノは魔術回路を立ち上げた時に魔導はこんな痛みを味わったことが無いと言うのだ。魔術には頭が下がる。

穂先に汲み上げた魔力を集中させ、杖に展開されている環状魔導陣で魔力を加速、増大させる。

そしてそれを

「デイベインバスター！」

一気に開放する！

桜色の魔力の光が奔流となり一直線に奔る。

射線上にある大樹の枝や根を突き破り、幹の中心部分にある光の膜に突き刺さる

瞬間、

膜が一際強く輝きだし、光の障壁に阻まれ砲撃は数瞬拮抗した後掻き消されてしまった。

「あ、あの砲撃を防いだ!?」

「ふむ…」

ユーノが驚愕の声を上げ、リィちゃんは少し柳眉を下げる。

私は特に気にせずもう一度魔力を汲み上げ始める。

あのジュエルシールドが今までの奴とは全くの別物と言ってもいいのだ。

ただ思いが強い、っていうのも原因なんだろうけど、アレは「二人で願っている」のだ。

詳しくは本人ではないから知らないが、二人とも一緒に居たいなどの類だと思われる。でも、全く一緒ではない筈。でなければ今の砲撃をタイミングよく防いだ理由が分からない。普通なら最初から障壁を張ってあるものだと思う。

だけど、それも関係ない。

さっきよりも速く術式を編み上げ、それにバリア貫通を付与する。

「ただ貫くだけだよ」

魔力をチャージし終え、打つ。

ドオン、という砲撃音と共に腕に衝撃が襲い掛かって来る。足に体重をかけて踏ん張る。

再度放たれた光の奔流は一直線に突き進み、さっきと同じ箇所につき刺さる。

だが、やはり障壁が砲撃を受け止める。

ピシッ

障壁に罅が入り始めた。

ミシミシ、ピシィッ

徐々に罅が大きくなっていく。が、

「ちえ、また耐えられちゃった」

砕くことまでは出来ず、砲撃を防ぎ切られてしまっ。

今ので終わらせられなかったのは痛い。

恐らく撃てるのは後一発。

もし障壁が罅のない元の状態なら敵しいだろう。

だけど、

それでも私は杖を構え直し、穂先を同じ場所に向ける。

「今度こそ徹す」

リンカーコアから根こそぎ魔力を掻き集める。

「つつぐ!!--」

一日で酷使し続けられたリンカーコアは既にボロボロだ。

それに構わず魔力を汲み上げながら術式を描いていく。

「っ！」

だが、体中に奔る痛みでなかなか上手く魔力と術式を安定させることが出来ない。

本来は術式はデバイスに全部任せるそうだが、私はそんなことしない。そんな依存するような真似は決してしない。これはリイちゃんも賛成してくれている。私はあくまでデバイスは補助として活用と  
している。

上手く術式を制御できずにいると、

「少し、本当に少しだけ後押しをしてあげます」

直ぐ後ろからリイちゃんの声が掛けられる。

私は答える余裕がないので首を僅かに横に振るう。

「安心してください。本当に後押しをするだけなので、障壁を敗れるかどうかは全てはなのちゃんしだいです。それぐらいなら構わないですよね？」

戸惑いながらも頷く。

本当にそれだけなら手を貸すとかではないので、拒否するような理

由にはならない。

とうかリイちゃんを拒絶するなんて出来ない。

私にとって一番はリイちゃんなんだから。

s i d e o u t

s i d e i n

〈理異菟 s i d e〉

「今度こそ徹す」

なのちゃんは自分に誓うように告げると三度目の術式を立ち上げていく。

なのちゃんは奥歯を噛み締めて呻き声を押し殺している。きつとリンカーコアから魔力を搾り取っているのだろう。

正直言つて、あの障壁を貫けるかは微妙なところだと思う。それに貫いても封印まで持つていかなくはないけないのだ。分が悪過ぎる。

それ程にまで鍛錬で魔力を消費している。

リンカーコアは魔術回路と違って、大気中の魔力を即座に自分の魔力として取り込めない。ユーノが未だに魔力が半分にまで至っていない（正確にはこの世界の大気中の魔力がユーノの体質には適合率が悪過ぎる為と、リンカーコアを少し損傷した為。ユーノのと同じ貯蔵量で悪くない適合率なら7割は回復している程時間は経過している）のがいい証拠です。

魔導師の収束という技術を高度なレベルまで高めたなら自分の使った魔力をもう一度集めて使うということも出来る人はいるそうですが、これは魔力を取り込むのではなく、あくまで術式にそのまま外部から流し込むので平気みたいです。逆に魔術師はそんなこと出来ませんね。あくまで使われない魔力を魔術回路に取り込み自分の魔力として練るわけですから。

仕方ありません。本当は全部なのちゃんに任せて上げたいのですが、これに失敗して更に体やリンカーコアを酷使されたら堪ったものではありません。私の心労的に。

なので、ほんの少し後押しをしましょう。

「少し、本当に少しだけ後押しをしてあげます」



術式制御と魔力運用の両立に奮闘しているなのちゃんに声をかける。

でも、私の声に首を僅かに横に振り、拒否する。

きつと手を貸されたくないのでしょうか。でも残念ながら手は貸しません。あくまで片を着けなければいけないのは私ではなくなのちゃんですから。

「安心してください。本当に後押しをするだけなので、障壁を敗れるかどうかは全てはなのちゃんしだいです。それぐらいなら構わないですよね？」

只の後押し。……………屁理屈でしょうか？

私がこれからするのは魔術を使って本当にただ背中を押すと同等のことをするだけです。結果は本人次第。

ですが、世界に“高町なのは”という自己を存在を確率させたなのちゃんなら、きつと いや、必ず あんな障壁如き貫いてくれるでしょう。

なのちゃんも頷いてくれたようですし、なのちゃんの魂の確立化が解けないうちに始めましょうか。

「コネクト魔術回路起動。ソウルゲイン魂意の顕現化、ドライブ開始」

魔術回路を立ち上げ、ずっと使う機会のなかった魔術を行使する。

では、私の魔術属性“星”の一端と

「アンサズ真意を接げるモノ」

レイジングハート歩みを止めないモノの真意、その力

世界に魅せて上げましょう、高町なのは。

s i d e o u t

s i d e i n

くなのはs i d eく

凜とした声が響く。リィちゃんの声？

私は自然に瞳を閉じる。

「durchsetzen(穿て)、unerschütterlich(折れぬモノよ)、durchschlagen(徹せ)、euchselbst(汝の魂源)、sichausgehenfer(魂意の下)、fortsetzen durchziehenen(歩み続ける)」

まるで世界に響かせるかの様に透き徹った声。儂くも、決して弱くはない声。

何でなんだろう？ この声は心に浸透していくみたいなの。

まるで全てを認めてくれた様に。

「durchsetzen(穿て)、durchschlagen(徹せ)、durchziehenen(貫け)！ unerschütterlich(折れぬモノよ)！！ diese Welt Epiphania(今この世界に顕現せよ)」

ッ！ 心が、ううん。魂が震えてくる。

術式が安定し、どんどん感覚が研ぎ澄まされてく。

いや、違うかな。研ぎ澄まされてるんじゃないやなくて、透き徹る感じなの。

透明に成るみたいに。

でも、確かに此処に在るし、感じる。

きつと最後の一言で私は人ではなく“高町なのは”という存在そのものに成り上がる。そんな確信が来る。

「  
『  
レイジングハート  
歩みを止めないモノ!!!』」

ツツツ!!!

ナニかが体を、心を、魂を駆け巡っていく。

しかしそれも一瞬で終わる。

眼を開く。

眼前には巨大な樹。その中心にあるのはジュエルシードに取り込まれた少年少女を守る光の膜。

さつきと何も変わらない光景。

でも、何故か初めてみる光景みたいだ。

人は眼で見てるのではなく脳で見てるというけど、今の私は眼でもなく脳でもない感じがする。これは、魂なの？

さつき感覚が透明になっていく感じがしたけど、真実今は透明な感覚だ。

全てが澄んでいる。

「さあ、これで終わりにするよ」

「!?　なのは、何しているの?!」

私は折角安定していた術式を全て一から改変し始める。

それにユーノが驚愕する。ユーノって本来はドライなのに常識外のこと眼にすると変わるよね。

術式に組み込むのはただ砲撃の速度を上げる為のもの。バリア貫通なんて必要ない。間に合ってる。

後は詠唱するのみ。

この魔導には詠唱が不可欠だから。

これから打つ砲撃は、間違いなく魔導の域を超えたモノに成る。

今ならリイちゃんが私に何をしたのかも判る。

魂の源にある意、それを世界に降ろしたのだ。

今の私は簡単に言えば魔術的な概念を持っている状態みたいだ。

“高町なのは”の魂源は歩みを止めないモノ。

その魂意は止めない歩み（貫く）だ。

「…風は空に、星は天に…。一条の閃光よ、我が魂意の下、全てを貫き徹す止めぬ閃光と成れ。尊き想いは蒼穹に、止めぬ閃光はこの腕に！いくよ、レイジングハート」

《了解です、我が主よ》

レイジングハートを改めて構え直し、ジュエルシールドに矛先を向ける。

この一撃は神聖なる光ではなく、止めぬ歩みの輝き。

だから

「歩みを止めない、尊い閃光！！！」

この一撃は、全てを貫き徹す！！！！

ツバアアアッ！という空気を突き破る爆音と共に一条の閃光が奔る。

それは前の二発の「デイバインバスター」よりも細い光だった。

だが、前の二発には無いナニかが宿っていた。

ただ速度をだけを高めた一条の光は音速を超えて一直線にジュエルシードに向かう。

ジュエルシードが強く輝き障壁を張る。

今までより光が強く、一番堅牢になっているであろう障壁は、

パライイイイインッッ！

まるで何も無いかの様に貫かれた。

閃光はそのままジュエルシードを貫き、

ツツツパキイイイインン！！！！

ジュエルシードは砕け散った。

ジュエルシードが砕けたことにより、今まで生えていた樹も一瞬で消えてしまい、取り込まれた二人は樹が在ったであろう下の道端に倒れていた。

それを見て構えていたレイジングハートを下げる。

「ちょ、ちょっとなのは！？　なんでジュエルシード砕いちゃってるの?!　いやそれよりも何で砕けたの?!」

すると今の光景に啞然としていたユーノが復活して私に詰め寄ってくる。

「何でそんなに取り乱しているかなあ。魔術を習う者として自分を制御できない精神はだめなんじゃないのユーノ？」

「え、あ、う、うん。そうだね。いや、でも！」

私の言葉で一端落ち着くがまだ駄目みたいだ。

「こら、ユーノ。なのちゃんの言う通りですよ？」

リイちゃんも歩み寄りながらユーノを嗜める。可愛くめつ、て指を突きつける仕草がなんとも言えないね

それでも落ち着かないユーノの為に仕方なく教えてあげる。

「今の私は魔術という概念を持っている状態なんだよ」

「概念？ 概念で確か概念武装に宿っている、儀式や積み重ねた歴史で付与された魂魄の重みだね？ 何でそんなものなののが持っているの？」

私が少しでも教えだしたら直ぐに冷静になり考え始めるユーノ。何で直ぐに冷静になれるのにそれをしないかなあ。

「正確には概念ではなく魂意ですけどね」

ユーノの問いにリイちゃんが答える。今ならよく判るから私が答え



たかったのに。

「魂意？」

「ええ。まずは魂源から話します。あ、魂源は魂のことですよ。魂源は当然ながら他の存在と同じモノはありません。皆それぞれ違います。そして魂源にはそれぞれ情報が入っています。その魂を存在足らしめる情報が」

「存在足らしめる情報……」

「解り易く言えば、自分が自分らしく居られる元みたいなものだよ」

「なるほど。確かにそれなら同じものはないね」

少しユーノが眉を顰めていたので補足してみると理解したみたいだ。

「で、例に上げるとなのちゃんの魂源には歩みを止めないモノレイジングハートという情報が入っています」

「レイジングハート？ それってレイジングハートデバイスと同じで不屈の心って意味？」

「違うよ、私のはそんな意味じゃない」

ユーノが案の定私の魂意を取り違えたので私は即座に否定する。不屈？ 挫けない心？ そんなのいらないよ。

「え、じゃあ、何？」

行き成り自分の言葉を切つて捨てられユーノは困惑する。

ユーノはリィちゃんを見るが苦笑して私を見る。

私の魂源だからその意味は私が答えなくちゃ駄目だよ。

「私のレイジングハートって意味は“歩みを止めないモノ”、だよ」

「歩みを、止めないモノ？」

「そ。不屈って挫けないって意味だよ。でもさ、挫けない心が本当に不屈って意味なのかな？」

「ど、どういう意味？」

私が逆に質問してみるとユーノは更に困惑する。

「ねえ、ユーノの世界の言葉だと不屈って言葉はどんな意味？」

ユーノの言葉には答えずまた質問する。

ユーノはそれに戸惑いながらも「挫けないとか折れない心って意味だよ」と答えてくれる。

「そっか。私はそうは思わない。その折れない心って言うのはただ‘折れたことが無いだけ’の心だと思っな」

「折れたことが無いだけ？ 折れないから、折れない心なんですよ？」

その言葉に私は首を振る。

「それは違うと想う。折れたことを知らない人が不屈って意味なら、大抵の人は不屈の心の持ち主だと想うよ」

「それは……そうかも……」

「不屈って言うのは挫けないんじゃないやなくて、挫けても何度でも這い上がる人のことだと想う。何度倒れてもまた起き上がって歩き出す人、どんな障害があっても前に歩き続けることだけは止めない人。それが本当の‘折れない心’、不屈って意味じゃないかな？」

折れない心っていうのは折れたら終わりってこと。たった一回折れただけで‘折れない’心？ 笑っちゃうよ。

折れないから折れない心なんじゃないよ。折れてもまた立ち上がるから‘折れない’んだよ。

「だから私に取って一不屈って意味は歩みを止めないってこと。このデバイスの不屈の意味は知らないけどね」

そう言っ て手元のレイジングハートに眼を落とす。

反応は無いね。

意志のあるデバイスでも自分の意味を考えたことは無いみたいだね。

そんなモノに主と認められてなくて良かった。……あれ、さっき我<sup>マ</sup>が主よとかほざいたよね、このデバイス。壊していい？

「ちょっと話が魂意からなのちゃんの魂源についてに離れたので戻しましょう。魂源については理解できましょね、ユーノ?」

「うん」

手にあるデバイスをギリギリシメていると話が再開されそうになるので止める。

「さっき言った通りなのちゃんの魂源は歩みを止めないモノです。レイジングハートでは魂意は何か? っといきたいですが魂意について話します」

「そう、それ」

「魂意とは魂の意と書きます。漢字の通り魂の意味です」

「うん。かんじ? はよく解らないけど、魂源とは何が違つ?」

そう言えばユーノの世界って英語圏だから漢字ってないんだよね。確か一番繁栄しているのがミッドガルだっけ? あれ、ミット散るのだ、だっけ? どっちでもいいけど。

「魂源はその魂の在り方を示しています。なのちゃんは歩みを止めないってというのが要するに本来の在り方なのです」

「あ、だからさっきなのは自分が自分らしく居られる元って言ったのか。ああ、ちょっと勘違いしてたみたいだね。でもこれで理解したよ。それで魂意は?」

何だ、さっきので理解してなかったんだユーノ。まあ、言葉で説明って難しいしね、これは。一番手っ取り早く理解させるのは、この

を確立させる領域に立つことだね。後はリイちゃんの「星」の力だね。そう言えばやっと思い出せたよ、「星」の意味。っていうかりいちゃん酷い。私に魔術使って記憶操作で殆ど思い出せないようにしてあったよ。右眼も含めて。まあ、この状態になったから脳に掛けられた魔術なんて無いも同然だから思い出せたけど。

手っ取り早いつて言うけどほんの一握りの人しか領域に立てないみたいだし、それはそれで難しいけど。魂の確立化つて。

今の私の状態つて魂意ソウルゲインの顕現化つていうんだっけ？ OGに居たよね。同じ名前の奴。リイちゃんとは比べられないけど、それでも結構好きだよアクセルさん！ 確かアレは魂を確するモノだっけ？ ちよつと自信ないかな。今度OG外伝六週目やり直そつと。

私の思考がかなり逸れてしまっているが、二人は会話を続ける。

「魂意は魂源に籠められている意味です」

「私の歩みを止めないモノは折れない心と阻めない歩みレイジングハート（貫く）つていう二つの魂意から成り立っているんだよ」

思考がそれソウルゲインでもちやつかりと会話には参加する。ちなみにこの知識は魂意の顕現化していると普通に判る。魂そのモノ（一部）を世界に顕現させて感じられるからね。

「阻めない歩み（貫く）？ ……確立……概念……貫く……在り方……なるほど。やっと解つた。ついでにリイトの「星」の属性の意味もある程度はね」

「え？」

うそ？ 理解したの？ さっきみたいに勘違いじゃなくて？ しかも星の属性も？ 私やっと思い出せたのに、何行き成り理解してるのユーノ？

ちよつと疑うようにユーノを見ると彼女は自信をもつて話す。

「まず最初に僕が問い掛けた『何でジュエルシードが碎けたの』ってあれはなのはの魂意の阻めない歩み（貫く）の性質だよな？ 最初になのはが概念みたいなものって言ったよね。概念で物理的には困難・不可能な効果を発揮させるといふものでもあるんだよね？ だったら概念みたいな性質の貫くという魂意は文字道理『貫ける』よね、ジュエルシードすらも」

「そうですね。ジュエルシードを貫けたのはなのちゃんの魂意による能力ちからです。ですが、」

「問題はそこじゃない、でしょ？」

ユーノがリイちゃんの言葉を続ける。

「ええ」

リイちゃんは何故か楽しそうにしてる。

「問題なのはどうやってなののが魂意を魔導付与したか。でもこれをしたのはリイトだって明白だよな。詠唱してたし」

「ええ。やったのは私です。ではどうやったかは解りますか？」

リイちゃんが試すように問う。

「まだ情報が足りないけど、一番可能性が高いのはリイトの属性、  
‘星’が大きく関係しているってこと」

「それはなぜ？」

リイちゃんが眼を細める。

「リイトがよく使うルーンの「アンサズ」は確か口で伝えたモノこそ意味があるってものだよね。それも神の声だったって話。ま、其処はいいんだけど、今回、いつものリイトが使うアンサズの条件とは違うことがあるよね」

今回は私見てないから知らないけど。

「他のルーンを使っていない」

「……」

ユーノって、リイちゃんが魔術を使うときは注視しているんだ。

「リイトが「アンサズ」のルーンを使うときは必ず他のルーンと組み合わせているし、リイト自体、これは他のルーンの工程や術式の補助をするものだって言ってたよ。なのに今回君は他のルーンを使っていないのに真意アンサズを接げるモノを発動した。何故？ それは簡単だよな。“本来それは今回の時の様に使う為のモノ”だから」

「その根拠は？」

「リイトが言ったよね、自分はルーンでも二流だって。なのにそれ以外の魔術で「アンサズ」のみで今回の様な魔術を成功させたの？ 嘘でしょ、それは。だってさっきのアレって禁呪の類でしょ？」

「…っ、よく判りましたね？」

「なんとなくだけどね。でも、今までの魔術とはちよつと違うしね。それに確か魔術の禁呪の中に心の風景を世界に作るっていうのがあるんだよね？ 魂意を世界に出しているんだから、それに近いんじゃないかって想ってね」

ユーノの言葉で初めてリイちゃんが顔色を変えた。

私も内心冷や汗だ。うわ、本当に理解してるよユーノ。読みが当たってる。

「ええ。正解です。アレはある種の固有結界と同等ですから。とっても此方の方が全然簡単ですが」

固有結界。“異界創造”法の一種と呼ばれている、最も魔法に近いとされる魔術。現実を侵食させて結界を作り出すモノ。リイちゃんも使える魔術。私、これも思い出せないようにされてたんだよね。というか八割ぐらい封印されてたよね、魔術のこととか。

っっていうかユーノは何で此处まで理解しているの本当に?! さっきまであたふたしてたくせに！ ドライのときは本当にドライになれるね、ユーノって！ 褒めてないけど！

属性どころかこのままじゃ“右眼”のことも看破されないかな？ いや、流石にそれはな……………くもないかも…。



「全然簡単でも禁呪に分類されるものがルーンの補助とされるモノとルーンだけで成功するとは思えないよ。仮に出来るとして考えるよりも、君の魔術礼装が本来は今回の魔術の様なものに特化して使う為のモノで、術式補助の類は副産物として考えた方が理に適っている気がするけどね。で、今僕が判らないのは今回魔術が何に分類されるか、またその魔術に特化して作られている礼装は何を補助しているのか、だけど。これに君の属性を当て嵌めるとある程度は予想が付くよ」

私たちは既に無言。

流石ユーノ。リイちゃんに理解することに関しては優秀と謂わしめただけはあるよ。普通そこまで考えがいかないと想うよ。

「君の属性の星だけど、これは‘世界’とかに関係していると想う。使うのが今回見ただけだからどうしても推測が偏っちゃうけど。今回の魔術は固有結界の一種なんだよね？ これって世界そのものが異界を潰しにかかるんじゃないかな？ だから維持には莫大な量の魔力が必要なはずだよ。なのに今回君からはそんな魔力は感じなかったよ。確かに今までの魔術の中では一際多かったよ？ でも、君はそこまで魔力を使っていない」

「魔力なら礼装の術式などでカバーできますよ？」

「そう、そこだよ」

「ん？」

リイちゃんが首を傾げる。

私もよく解らない。

「礼装の術式でカバーできる、でもこれって全ての術式に対応してるとは思えない。いや、全てに対応したモノのあると思うけど、君は絶対にある分野に特化しているモノを使う筈だよ」

「……」

「沈黙は肯定ってこの国の言葉だっけ？ 君は生み出すモノであり戦う者ではない。だから魔術は創るに系統されているよね。でも君は魔術を礼装に組み込むか戦闘用に行っている。攻撃にしか使えない魔術を君は殆ど無いはず。投影もそうだし、ルーンもだ。生み出す方に特化している。でも少しでも戦闘で役立つように必然的に術式だってそれに特化させている筈。じゃないと魔術では一流に追い付けなくなるから。少しでも一つを高めるために余分なモノは組み込まない、違う？」

ずっとユーノのターンだね。

もう私たちはぐうの音も出ないです。魔導の学校を既に卒業しているだけはあるね。頭の回転が速い速い。

「特化している術式だと考えると、当然今日あの魔術行使に特化している訳だね。あの魔術は確か、‘異界創造’と言われる魔術だよ。それに特化している礼装。世界を作り上げる。世界を‘生み出す’のに特化している礼装、そう呼べるよね？ 君は生み出すモノ。何を？ 解らない。じゃあ君の属性は何か？ ‘星’だよ。後は解釈の仕方だよ、‘星’っていうのは‘世界’を表している。世界を生み出すとはなにか？ ‘異界創造’法のことだよ。

つまり、君は“異界創造”法を生み出すのに特化している魔術師だ。僕の推測間違っている？」

ユーノが可愛く飛びつきりの笑顔でリイちゃんに問う。

凄いムカつく。

これで間違っていたらバカに出来るのに。

「ええ。正解です。ユーノの推測どおり私の属性の‘星’は世界を示していて、私は本来異界創造法に特化している魔術師です」

残念ながら正解なんだよね。にしても今日の朝に星のこと言っただけだからなのにもう看破するとか有り得ないよね？ まあ、有り得ない事なんて有り得ないんだけどさ。

「因みにその右眼は何か関係しているの？」

「ええ。詳しくはまだ言えませんがね」

「なのはは知っているの？」

「ええ。思い出しましたでしょ、なのちゃん？」

「御陰様で」

リイちゃんが聞いてくるので若干圧力を放ちながら答える。

「ふん」

ユーノがこちらを見てくる。羨ましいのかな？ 鼻で笑ってやろうか、と考えていると、

「ま、いいや。でもこれでデートしてくれるんだよね？」

ユーノがリイちゃんに近付きながら原爆を落とした。

「は？」

ナニライツ テイルンダロウカ、コイツハ

「まさか本当に一週間以内に私の星の意味を中てるとは思いませんでしたね。しかも初日に。まあ約束は約束ですからちゃんと守りますよ」

「えへへへ」

顔を綻ばしながらリイちゃんの腕に抱き付くユーノ。

私はその光景を唾然と見ている。

するとユーノが私の状態を見て、

「っふ」

「っあゝあゝ！？」

鼻で嗤った。

「ふふふふふふふ、あはははは、h a h a h a h」

嫌だな。嗤いがトマライヨ。アハハハ、ハ。

「ブチツツツ貫く！！！！！！」

「嫉妬は見苦しいよゝなのは」

私がレイジングハートを構えて突撃をすると即座に逃げ出すユーノ。

「五月蠅いつ！！！！」

接近して喉に向けて刺突を嚙ます。

だが体勢を傾げるだけで避けられる。

するとユーノは結界を解除する。

バカだね。この至近距離なら魔導なんかいらんし、そんな魔力も残っていないよ。

とりあえず足から潰そうと下段に構えた瞬間、

「！？」

腕にバインドを掛けられる。

そして次に足にも掛けられ動きを封じられる。

「つく！、つぶ！、このっ！」

魔力が無いので力でどうにかしようとするが如何にも成らない。

すると今度は足元に緑色の魔導陣が浮かび、

目の前のユーノが楽しそうに手を振りながら

「海水浴、楽しんできてね？」

と言ったので、意味を即座に理解し、

「ユウウウウノオオオツ！！！」

私は海上上空千メートルに転移され、春の海に落下していった。

PS：魔力がゼロの状態でバリアジャケットも張れない海の中はめっちゃくちゃ寒かったです。



10 第三奏 “高町なのは”（後書き）

イエレミー「更新が遅れてしまい本当にすみませんでした。只今睡眠時間を切り詰めて製作中です。

なるべく遅れた分を早く取り戻せるように頑張りますので、どうぞ何卒よろしくお願いします。

解らないことなどがあつたらどんどん感想の所で聞いてみてください。なるべく早く疑問に答えるようにします。感想があると嬉しいです。誤字脱字の指摘も有りましたらお願いします。

今回も読んで下さってありがとうございます。

それでは次の話で会いましょう「



## 11 第四奏 「運命と愚者」 前奏（前書き）

イエレミー「まず最初に謝罪を。更新を二カ月半も止めてしまい申し訳ありませんでした。言い訳させてもらうなら、前回投稿してから4日後辺りに、長年使い続けていたPC（6年もの）がジャンクになりました。これを機に、少し更新を止めさせていただき、金を貯めてそこそこスペックのNPCと、DSの様な小さなNPCを買わせてもらいました。ついでにこの機会にプロットを色々変えました。ええ。原作なんかマジで知りません。更に言うなら、二十七祖の内何体が登場させたいとも想っています。

そんなこんなで、更に矛盾点と出てくると想うので、そういうのが駄目な人は今の内に嫌悪感が出る前にご退場してもらっても構いません。それでも構わない人は、拙い文章ですが、今後ともこの駄目な作者を温かな眼で応援してやってください。それが力になりますので。

## 11 第四奏 「運命と愚者」 前奏

くなのはside)

前回の繁華街での一件からのことを少し振り返ってみる。

最後に海に落とされてびしょびしょになって町を歩いていた私は、繁華街の被害を眼の当たりにしてきた。

途中から封時結界を張ったとしても、やっぱり既に被害の部分はどうしようも無く、町に大きな爪痕を残した。

本当ならニュースで大きく取り上げられ、全国に広まるようなことだったけど、それはリィちゃんの認識阻害の魔術でなんとか防ぐことが出来たみたい。「こんなに沢山の認識阻害の魔術を使ったのは初めてです」って顔を青くしながらも遣り遂げてくれた。

因みにこの件で最高は重傷者数名で、死者はいなかった。

別に他人なんて私には本当にどうでもいい。大切な人が居てさえくれれば。

誰かの命を奪って背負うことよりも、大切な人が傍に居てくれないことの方が絶対に辛いと思う。

だって、辛くても誰かが傍に居てくれたらきつと一緒に頑張れるから

でも、幾らどうでも良くて、私がこの事件を止められなかったことは罪だと思っ。

私は一度、私を否定してしまったから。

今の私を創める切欠になった今回の事件は私の胸にしっかりと刻み込んで置く。

きっとそれは戒めと同時に今の私への祝福だから。

あれから私とユーノはジュエルシード探索に影響が出ないギリギリをそれぞれが見極めて鍛錬に励むようになった。

あの時、正直言っリイちゃんソウルゲインの魂意の顕現化が無かったら私たちはジュエルシードを止められなかった（実際ユーノも結界の魔力で殆ど消費していたみたい）。まあ、実際は砕いちゃったけど。

だから私たちは最低二回はジュエルシードを封印出来るほどの魔力を鍛錬で残さなくてはいけなくなった。まあ、ユーノは魔導じゃなくて魔術の鍛錬だからそっちの魔力は幾ら消費しても問題ないみたいだからちよっとなまじい。

私は少し魔力を残して、その分槍術の訓練に回された。指導してくれているのはお父さんで、毎日扱かれています。一通り武器は扱えるとか、反則にも程があると思う。

ユーノの方は昨日から本格的に五大元素を使った魔術を始めている。魔術回路の最大行使数は十五本。半分を超えたみたい。今の時点で一般の初代の魔力量を超えているとのこと。

そんなに早く成果が出るものなのか、と訊いたらユーノって私たちが学校行っている間にリイちゃんと念話しながら魔術回路を立ち上げているのをこの時初めて知った。それでも普通はこんなに早く本数は使えない筈だが、そういう特性の魔術回路だったみたいだ（偶にそういう馴染み易い魔術回路の人も居るらしい）。

この話を聞いての一言は一日中鍛錬してるとか、ズルイ、だった（一般的な女の子としての思考としては末期だが）。しかもリイちゃんとの念話付き。学校よりも遥かに至福の時間だと思う。

で。

あれから一番変わったことは最近ユーノがリイちゃんにくっ付く様になったことだと思う。

だって、

「あの、二人とも離れてくれませんか？ 他に席空いていますし」

「だがことわる〜」

「リイトの隣は此処しか空いてないよ？」

今現在もすずかちゃんの家に向かっているバスの中で私と一緒にリ

イちゃんの腕を抱き締めてるから。

バスを降りて、すずかちゃんの家に向かう。もちろんリイちゃんの腕を抱き締めたまま。反対側にはユーノが引っ付いている。

家というか正確には豪邸だけど。

今日はすずかちゃんの家でのお茶会だ。

後はユーノの紹介。

今週一週間は学校でアリサちゃんとすずかちゃんからサッカーの試合の日に翠屋で在ったユーノのことをしつこく聞かれ、適当にはぐらかしていたのだけど、休日にお茶会を開いてユーノを連れて来いとアリサちゃんに言われたのだ。

勿論私は鍛錬したいから却下しようと思ったのだが今回は相手がそれを見越して、卑劣なことにリイちゃんに頼み込んでいた様だ。

リイちゃんもそれを了承し、私のお茶会への参加は決定した。当然ユーノも。

まあ、アリサちゃんの家だったらまだ渋っていたかも知れないけど、すずかちゃんの家だったから今日ぐらいはいいかな、と思う。リイちゃんが居るならばむしろこっちは行かない。

そう言えば、今日はお兄ちゃんもすずかちゃんの家に行くらしいっ

ていうか、もう居るみたい。私たちよりも一本バスを早めて向かったのもう居る。私たちももう着いたし。

リイちゃんの両腕が塞がっているので私がインターホンを押す。

すると十数秒で扉が開かれる。

扉を開けて出て来たのは一人のメイドさん。

「リイト様、なのはお嬢様、ユーノお嬢様、いらっしやませ」

「こんにちは、ノエルさん」

「こんにちは」

「初めまして、ユーノ・スクライアです」

「ええ、初めまして。月村家メイド長のノエルと申します」

そう言ってお辞儀をするノエルさん。凄く滑らかな動きだね、流石はメイド長。

「さ、どうぞこちらです」

向かい入れられ、部屋に案内される。

案内された部屋では、すずかちゃんとアリサちゃんが優雅にお茶を飲んでいて、お兄ちゃんと、すずかちゃんのお姉ちゃん、忍さんが楽しそうに会話していた。

私たちが部屋に入ると、すずかちゃんが「こちらに気づいて」「いらっしゃい」と微笑掛けてくれる。

「ん、少し遅かったわね」

アリスちゃんが紅茶に口を付けてから文句を言う。

「それじゃ、忍。俺たちは」

「ええ。皆来たみたいだから、私たちは部屋に行きましょうか」

そう言って二人は立ち上がり、部屋を出ようとする。

「君がユーノ・スクライアちゃんね。ゆっくりしていったね？」

「はい」

別れ際に忍さんがそう告げてお兄ちゃんと一緒に部屋から出て行ってしまった。ノエルさんは二人についていく。

「なのはちゃん、リイト君、ユーノちゃんいらっしゃい」

声を掛けてきたのはすずかちゃんの傍に控えている、すずかちゃん専属メイドのファリンさん。かなりのドジッ娘でもある。

「三人とも、何を飲みますか？」

「ミルクティーをアイスで。茶葉はいつもの」

「私もいつもので良いです」

「僕は…ミルクティーでホットなら何でも」

ファリンさんは私たちの注文を聞くと会釈して部屋を出て行く。

何時までも立って居たくないの二人の下に行き椅子に座る。その際ユーノを隣に座らせる。因みにリィちゃんはソファアに座る。

「今日は来てくれてありがとう、なのはちゃん、ユーノちゃん。ユーノちゃんとはちゃんと話すのは初めてだね。私、月村すずか」

「アリサ・バニングスよ。よろしくね、ユーノ」

すずかちゃんとアリサちゃんが挨拶をする。

「ユーノ・スクライアです。よろしく」とユーノは淡白に返す。

アリサちゃんは「さっそくだけど、あなたの事を詳しく聞きたいんだけど、良いかしら？」と有無を言わさない威圧でユーノに問い掛ける。

ユーノはそれに対し落ち着いて、何を聞きたいんですか、と聞く。

アリサちゃんは顎に手をやって考える素振りを見せて、

「そうね、まずはなのはの家はどういう経緯で居候することになったこととか？」

「高町家に居候になったのは、リィトに稽古を付けて貰う為ですよ」



「リーに？」

ユーノの言葉にアリサちゃんが眉を寄せる。

「そうなんですか、リー君？」

すずかちゃんがソファで猫と戯れているリーちゃんに確認する。

リーちゃんは猫を撫でながら頷いて肯定する。ま、実際嘘じゃないし。ただ、家に来たのと、魔術を教えて貰うことになったのが逆なだけで。

「ふーん。嘘は言っただけさそうね。と言っても、リーが嘘を付いても私如きじゃ読み取れないけど、なのはが特に反応していないし、本当みたいね」

ちよつと訝しげな表情だが、概ね納得してくれたようだ。あと、その言い方じゃ私がるで隠し事出来無いみたいなき草だね。

「実際そうでしょ？」

へ？ 私口に出したっけ？

「あんたの顔視れば大体は読めるわよ」

何か悔しい。

「あれ？」とすずかちゃんが声を上げる。

「稽古付けに来たってことは、ユーノちゃんはリー君の身内だよな

「？」

「ええ、そうですよ。ユーノは私の身内になります」

リイちゃんという言葉は嘘じゃない。ユーノはリイちゃんの弟子だし、  
相棒にもなったから。

「親戚？」

「いえ、親戚ではないですね。まあ、似たようなものです。私が長期休暇にロンドンなどに行ってるのはご存知でしたよね？」

アリサちゃんとすずかちゃんが頷く。

「ユーノとはその時に一度会っているのですよ。そして態々遠路遙々訪ねて来てくれた、という訳ですね。まあ、事前に連絡などされてなかったので、少しごたごたしてしまいましたけどね」

「すみません」

リイちゃんという言葉にユーノは少しばつが悪そうな表情をする。

凄いよね。全部が全部嘘って訳じゃないし。地名とかは全く別だけど、遠路遙々とか、表現は間違ってるよ。最初は私たちに会いに来たわけじゃないけど。

肝心なところに触れないで詳しく話しているのが凄い。

「稽古を付けに貰いに着てる訳だから、しばらくは此方にいるんですよね？」

アリサちゃんがリイちゃんに尋ねる。

「ええ。とりあえず、ユーノの保護者から何も用事が無ければ、夏の長期休暇までは此方に。休みに入ったらロンドンに顔を出しに行く予定ではありません」

「学校はどうしているんですか？」

すずかちゃんが当然の疑問を言う。私たちと変わらないしね。

「自宅学習で私が教えています。偏りはありませんが、理数系だったら大学レベルで行けますよ？」

その言葉にアリサちゃんとすずかちゃんの顔が引き攣る。同い年の子が、大学レベルの問題を理数系だけとはいえ、解けるのだ。学校の全教科満点取るのとは次元が違う。

「他に質問はありますか？」

リイちゃんが問うが、二人は顔を見合わせて横に振る。

「無いですよ。それに、そちらもこれ以上『話せる事』は無いんですよね？」

アリサちゃんが意味深なことは言う。まあ、この場に居る全員がその意味を正しく理解しているけど。

「ええ。それらを踏まえた上で、ユーノと仲良くしてくれると私的には幸いです」

微笑を浮かべるリイちゃん。それに対し二人は、

「大丈夫ですよ。詳しく話せないだけで、折角の友人をハブる程、墮ちてはいないつもりですから」

「はい。誰しも言えないヒミツは在る物ですから。話してくれるまで、待つだけです」

と、何でもないかのように言い、

「うん。よろしくね、バニングスさん、月村さん」

ユーノは二人に感謝する。

「アリサで良いわ。こっちは名前で呼んでいるんだから、あんたもそうしなさい」

「私のこともすすずかでいいよ、ユーノちゃん」

「わかったよ、アリサ、すすずか」

そう言っつて笑い合う三人。

うん。万事これでOKかな？

ただ惜しむらくは

私が空気なところ、だよな？

~~~~~

それでするかちゃんが天気が良いからテラスに行こうと言ったので、私たちは場所を外のテラスに移すことにした。その時にフアリンさんが紅茶を持って来てくれてそこで天性のドジっ子を魅せてくれたけど、些細なこと。

テラスには猫が屋敷の中より多く集まっっていて、リイちゃんが両腕で猫を搔っ攫い木の木陰で寝転びながら抱き締め、戯れ始めた。

ユーノはその光景に唾然とし、見慣れた私たちは即座にケータイを取り出し、猫に囲まれて幸せ一杯のリイちゃんを写メに収めた。因みに私のケータイはリイちゃんの写メを撮るために、カメラ機能が充実しているのを選んで買っている。

リイちゃん以外はテラスの席に着いて、紅茶を飲みながら猫と戯れる。私は此処からリイちゃんを激写している。本当はもつと近付きたいんだけど、最初の頃に近付きすぎて猫がリイちゃんから離れてしまった時に、リイちゃんがこの世の終わりの様な顔をしたので、それ以来、猫と戯れてる時には不用意に近付かないのが、みんなの中で暗黙の了解となっていた。

リイちゃんのあの表情を見ると、罪悪感で涙が出てくるの。現にあの時私は、打ち沈んでいるリイちゃんを背中から抱き締めて泣いていた。それほどの罪悪感に襲われた。

そのことを家族に話したら皆してそんな馬鹿な、と笑う雰囲気を感じていなかったの、試しに家の塀を登ってきた猫と戯れていたリ

イちゃんの邪魔をさせてみると、リイちゃんはペタリと地面に膝をついてしまい、雨が降ってきててもそのままだった。私はこのことに関与しなかったけど、見過ごせるはずもなく、皆で元気をさせようとしたけど、私以外の声は全無視で、私の声にも掠れる様な声と、消えてなくなってしまうような儂い微笑で返すだけで、その状態が一ヶ月続いた。流石に二日連続で悲劇が起こった為に此処まで落ち込んでしまった様だ。因みにその更に一ヶ月は私はリイちゃん以外とは口利かなかった。一ヶ月もまとりにリイちゃんと話せない状態にしてくれたから当然の仕返しだと想う。当然、二度とこの様な悲劇が繰り返されない様に皆注意している。

十数分撮り続け、容量が限界になると撮った写メを厳選し、選んだ物を片っ端からパソコンに送信（加工してプリントアウトするため）していると、リイちゃんが猫を宥めて寝かせてから静かに起き上がる。

とりあえず念話で呼び掛けてみる。

『どうかしたの?』

『いえ、アインがさっきから見当たらないのです。少し辺りを見て周って来ます』

『私も行くの』

リイちゃんはさっさと林の中に入ってしまう。

私は慌ててケータイをポケットに突っ込むと椅子から立つ。

「? どうかしたの、なのはちゃん」

すすかちゃんが急に立ちあがったのに対し首を傾げる。アリサちゃんもこちらに視線を向けて来る。

「リイちゃんが猫を探しに行ったみたいだから、私も一緒に行つて来るね」

テーブルに置いてあるクッキーを一つつまんでからリイちゃんが行つた方に向かう。向かう直前に溜め息が二つ程聞こえたが気にしない。

直ぐさまリイちゃんに追いつき、横に並ぶ。

「何時頃からいないの？」

「外に出て少し経つてからでしょうか。大人の猫ならあまり心配はしません、アインはまだ子供ですから。それにここの屋敷は広いですし、樹に登って降りれなくなっていることも少なくないようですから」

じゃあ、月村家の人はどうしているんだろう？ 放置？ いや、把握しているみたいだから見回りはしている筈だね、流石に。

「!？」

そんなことを考えていると、突然ジュエルシードの魔力を感じた。

「リイちゃん」

「っ、ジュエルシードですか。私でも感じ取れたので、これはかな

り近いが強いかですけど、今回は近い方ですね、感じ的には」

その言葉に首肯する。

発動はしてないけど、魔力が感じ取れたってことは、近くに原生生物が居たりする？

「っ、この魔力は、ユーノですか」

また魔力を感じたが、今度はユーノの物。

翠の魔力光が吹きぬけていき、世界に色彩が欠ける。

ユーノの封時結界が張られたみたい。

「リイト！　なのは！」

ユーノが駆け寄ってきた。アリスちゃんたちに何て言って来たのだろうか。

私が疑問を顔に出していたのか、ユーノが「猫が見えた気がするから、少し見て来る」と言って抜けて来たらしい。

「レイジングハート、セットアップ」

《スタンバイレディ、セットアップ》

結界が張られたので何時でも対処できるようにデバイスを起動。バリアジャケットを身に纏い、レイジングハートを構える。デバイス起動時に、デフォルトでシューティングモードに移行するようにユーノに弄って貰ったお陰で展開されるのは銃槍の様な槍だ。

「^{コネク}ト
投影掛」

私が準備し終わるとリイちゃんポケットから黒革のグローブを嵌めて詠唱。あれは投影魔術のもう1つの使い方、既存の物に投影を重ねて補強するといったもの。大体二割強の能力アップが見込めるらしいの。

「ジュエルシードはあっちだよ！」

ユーノが走り出したので私とリイちゃんも続く。

ちなみにこの前聞いたけど、ユーノはリイちゃんに師事してから毎回ジュエルシードが発動する度にバリアジャケットを展開していたみたい。服が変わってないなって思ったけど、バリアジャケットって正確にはフィールド系の防御魔法の一種で、大抵の人は不可視のフィールドを身に纏うだけなのだそう。私の様に既存の服をデバイスに収納し、服の様に直接バリアジャケットを展開するのは多くの魔力を持った魔導師が主みたい。バリアジャケットはかなり応用が利く魔導みただけ、その応用を利かせた分魔力を喰うみたいなの。

走っていたユーノが急に止まり、辺りに気を配る。

「確かにかの辺りに感じたんだけど、どお!？」

すると突然ジュエルシードの喚起を感じた。それも直ぐ近くで。三人で辺りを見回すと、

「にゃ、あ、あ、あ、あ、!!!」

「……………」

普通の一軒家と同等の大きな猫（アイン）がいた。それを見て固まる私とユーノ。

リイちゃんはどうと、

「にゃああああああんっ」

幸せ溢れんばかりのオーラを撒き散らしながら猫に突撃して首の辺りに抱き付いた。匂いでも擦り付ける位にぐりぐりと顔を押し付ける。

「うにゃあああ」

うん。凄い幸せな顔だね。可愛い、可愛いすぎるよリイちゃん。呆然しながらも体が勝手にケータイで速写してしまうほど。隣のユーノはサーチャーで至近距離から写してガン見している。

でもなくリイちゃんの萌え画像が手に入ったのは良いんだけどさあ。
あの猫

「「嫉ましい」」

どうやらユーノも同じことを想ったみたいなの。

あんな可愛すぎるリイちゃんに抱き付かれてもふもふされて甘えられて……………！ ああ！ 嫉ましい妬ましい羨ましいいいいい！！

心の中で呪詛と願望を叫びながらも、決して行動には移さない、移せない。邪魔をしてしまったら、今の笑顔が露と消えるのは知っているから。後で報復しようにも相手が猫ではリィちゃんにバレた時二度と口聞いて貰えない未来が私の肩を叩くことになる。それは絶対嫌なの！

二度と口利いて貰えなくなるのは絶対嫌だけど、このままリィちゃんとの触れ合いを見せ付けられるのも嫌。何か打開策はないの！？

学校では決して使うことのない頭をフル回転させ、考えを巡らせるが何も浮かばない。

だが、突然リィトの至福の時は終わりを迎えた

「サンダー」

！？ 魔力反応…でかい！ ジュエルシード?! いや、違う、これは…！

突如空から高密度の魔力反応を感じる。それだけで意識を完全に『戦闘』に切り替える。

空に眼を向けると、漆黒の服を纏う少女が金色の髪を自身の魔力波で靡かせながら、その手に持つ黒く輝く^{デハイス}斧で自身の“必殺”であるう魔導を組上げていた。

「な…?!」

隣のユーノも視線を空へと向けているが、予期していない魔力反応の存在に驚愕している。

やっぱり、突発の出来事に魔導師は弱すぎるよ。これが剣士ならユーノはもう“終わっている”

「いや、そんなことより…!」

頭を振り余計な思考は捨て置く。今することは、あの“必殺”を防ぐこと!

「デイバイン」

前回大樹のジュエルシードを貫いた時に使った、砲撃速度のみを追求した術式を組み上げていく。「貫く」概念は当然ないけど、速度があればそれで十分。空にいる漆黒の少女にレイジングハートを向けて威嚇なしでぶち込む。

「バスター!」

放たれた一筋の閃光は一直線に魔導を組み上げれていない少女に向かい、

「フェイトに手を出すな」

プリズムシエル

突然彼女の前に出来た多角面型のシールドに突き刺さり、

「バースト」

シールドに「デイベインバスター」の魔力が流されて、内包限界に到達される前に内側から魔力を暴発させて私の魔導が防がれた。

「なっ?!」

「駄目だよフェイト。行き成り攻撃は」

私が驚愕していると、一本の樹の影から少女が現れる。

「!」

その姿に更に眼を開く。

「彼は、なるべく無傷で捕まえたいんだから」

出てきた彼女は、漆黒の少女と酷似していた。

違うのは背がリイちゃんより少し低いことと、髪や瞳の色が違うことだけだった。

「何者ですか、貴方達は？」

流石に短時間で高密度の魔力が数回も隆起したため、リイちゃんが元の状態に戻り、射抜くように目の前にいる蒼髪にバイオレットの瞳の少女を見据える。その彼女の横に空にいた漆黒の「フェイト」と呼ばれた少女がデバイスを待機状態に戻しながら降り立つ。

「何者：か。それについては特に答えは持ってないけど、まずは名乗ろう」

リイちゃんの言葉に蒼髪の少女が苦笑するが、直ぐに元に戻り、不敵な笑みを浮かべる。

「ボクはクラウン・テストロッサ。因みに『クラウン』という呼び名が死ぬほど嫌いだから、呼ぶときはクランかクラウにしてくれると有り難い。そしてこっちが妹のフェイト・テストロッサ」

クランはフェイトという少女を撫でながら開いてる手でリイちゃんに手を差し出す。

「突然で悪いけど、君の力を貸してくれないかな？ 魔術師さん？」

この日、間違いなく私とリイちゃんの未来は大きな転機を迎えた。

11 第四奏 「運命と愚者」 前奏（後書き）

イエレミー「読んでくださった方、本っ当にありがとうございます！ これからもがんばります。」

あ、いきなりですうずうしいかも知れませんが、リクエストなんかありましたら何でも良いので感想の方に書いていって構いません。全部反映出来るかは分かりませんが、真剣にこれからの設定やストーリーと照らし合わせて頂きますし、そうやって考えさせて頂くだけでも、ストーリーに大きく影響しますので。詳しく考えてください。の方はメッセージボックスに送って頂けると助かります。

あ、更新はこれから日にちに7が日にしました。つまり7、17、27です。よって次回の更新は7日です。因みに一回の更新で一話とは限りません。ストックできれば二話投稿出来る場合もあります。最後に。読んで下さってありがとうございます。次回でまた会いましょう」

クラウン「ねえ、ボクの紹介はないの？」

イエ「あ」

12 第四奏 「運命と愚者」 混迷奏（前書き）

イエレミアス「七日にはホンのちょこっとは早いですが、大して変わらないので投稿しました。投稿できました。

あ、そう言えば前回の後書きにクラウンの紹介がどうたら言っていました、一々やるの時間がかかるので、無印の主要キャラが全員出し終えた辺りにまとめて投稿しますのでそれまで待っていてください。

一応言っておくと、クラウンの容姿は雷刃の襲撃者を12歳辺りに成長させた姿です。魔力はAランク。レアスキル所有。魔導師はこの作品最強キャラです。

ま、追々明らかになっていきます。付け加えて言うなら、クラウンは第二ヒロインです。多分。

ん？ 第一ヒロイン？ 言わなくても判りますよね？

それでは。 リリカルなのは、始まります」

なのは「キシヤーーーーー！！！」

イエレミ「うわっ！ いきなりなに！！！」

なのは「キシヤーーーーー！！！」

フェイト「何怒っているのかな、あの子」

クラウ「間違いなくフェイトのせいだよ」

12 第四奏 「運命と愚者」 混迷奏

（理異菟side）

「手を…貸す、ですか？」

言われた意味を把握しきれないため確認するように、蒼髪の少女に聞き返す。

「そう。正確には手を貸して貰わなくても、情報が欲しい。それには魔術師が必要なんだ。行き成り攻撃したのは詫びるし、迷惑料も払う。勿論情報の対価も用意する。とりあえず、話だけでも聞いて欲しいんだけど、どうかな？」

これに少し驚きました。どうやらさっきの行動はクラウンの妹の独断のようです。それに誠意を見せようとしているのが彼女の目から窺える。騙そうという危害もなさそうだし、等価交換なら問題もないんですが、

「その前に、聞かせてもらいたいことがあります」

彼女が頷くので必要なことを聞く。

「何処で魔術師の存在を知りました？ 加えてどれほど知っていますか？」

どうやって私が魔術師かどうかを判断出来たかを聴こうかと想いましたが、あまり意味ないですね。例えば「感」って言えばそれだけで否定できる要素はありません。それに別段問題ではないです。問題なのは魔術師の存在をどうして知り得たかの方です。それも基本的に管理世界にいる魔導師が。

クラウンは私の問いにばつが悪そうな顔をするが、おずおずと喋り出す。

「管理局にハッキング掛けて上層部辺りじゃないと閲覧できない項目を盗み見ていた時に、偶々開けたのが管理外世界97番「地球」に存在する魔術師についてだった。でも、簡易的なレポートみたい

な資料だったから詳しくは知らない。そのレポートで知ったのは、一年前、地球で管理局の管理外世界を巡航しているL級艦船に所属している執務官とそれ率いる武装隊が、偶然この世界に逃げ込んだ次元犯罪者達の身柄を巡って一人の魔術師と交戦して呆気なく敗北したということ。その魔術師の名前がリーズィット

それ以上、彼女は口を開けなかった。いや、この場にいる全員が声を出せなかった。

私が出す殺気によって。

「もし、それ以上その名を口に出すようなら 殺しますよ?」

身動き出来なくなつたクラウンに近付き、首筋に指を這わせて1つのルーンを描く。警告を無視する様なら即座に命を絶てるように。

「っ」

クラウンは身を強張らせて固まるだけしか出来ない。殺されると本能が必死に訴えているんだと明確に把握出来る。私も同じ経験を何度もしたことがあるから。

彼女の妹はこつちを必死に睨んでくるが、その眼には確かな恐怖が色濃く浮かんでいるのが見える。私の殺気が四肢に絡み付き動くに動けない状態。

ユーノにいたっては歯をカチカチと鳴らして両腕で身体を抱き締めている。

「っ、あ、リイ、ちゃん?」

なのちゃんのあえぐ様な声が耳に入る。

?! いけませんね。なのちゃんには殺気を一切向けていないのですが、こんな近くには中てられてしまいますか。

慌てて殺気を消す。すると四人がその場へたり込む。なのちゃんの傍に駆け寄り身体に負担が掛からないように抱き起こす。因みに他の三人は無視。特に相手二人は。

「大丈夫ですか、なのちゃん?」

「へ、へいき」と息を乱しながらも応えるなのちゃんに歯を噛み締める。

自分で言うのもなんですが、私の死合い経験は尋常じゃないと思う。その中で培って放つ殺気は並みのモノではない。現に間違いない幾度の死合いを潜り抜けているであろうクラウンでさえ完全に吞まれていたのですから。それを直接ではないとしても間近で受ければこんな衰弱するのは目に見えていたはず。なのにそれを忘れてしまつとは…。

殺気は生物に対し生存本能を封殺する気です。耐性のない者に直接イメージごと叩き付ければ、心臓の弱いものなら数分も経たないうちに活動が停止します。なのちゃんは父さんから殺気を受けたことが何回かありますが、当然そのレベルは下げられており、今私が放つたものとは比べものになりません。ましてや、なのちゃんは感受性がとても高い子です。私の死のイメージを強く感じ取ってしまった可能性があります。

腕の中のなのちゃんは細かく震えていて、必死に生命の温もりを身体が求めているのが分かる。

「わぶっ」

私はより一層強く包み込むようになのちゃんを胸に抱き締める。

side out

くなのはside

寒い。

それがリイちゃんの殺気を間近で受けた正直の感想だった。

ジュエルシードに関わる切っ掛けとなったあの日。目の前に迫る思念体に死のイメージが浮かび、怖いと感じた。言い代も知れない

何かが身体を包んだ。

けど、リイちゃんの殺気は全然違う。

ただ寒かった。冷たかった。自分が冷たくなるのが解った。

自分が停まっていくのが解った。

呼吸が停まっていき、動かす為に思考してその思考も停まっていく。

身体が停まり、精神、心も停まっていく。何もかもが停まっていく。

高町なのはが停まっていく。

リイ……ちゃ、ん……っ

それは声に出たかは判らない。

確かなことは、最後まで私を停まらせない心の奥底にはリイちゃんがあった。

そして、突然異常なまでの寒さは消え、停まっていく身体が、思考が、心が再び動き始めていく。

地面に崩れる直前に暖かな温もりが身体の中に入ってくる。

「大丈夫ですか、なのちゃん？」

愛しい人が抱き留めていてくれるのが、身体に入ってくる暖かさ
で容易に判る。何時もなら嬉しさで一杯なのだけど、今回はかりは
ただただ「暖かい」。それで十分だった。

うまく返せたかは判らないけど、平気、と応えた。

すると、更に身体に入ってくる暖かさに熱が籠もる。何故か少し
息が苦しい気がするのと、リイちゃんの顔が見えない。

でも、暖かさだけは入って来ていた。

ま……いい、かな……

自分の意識が沈んでいくのが判ったけど、自分が停まる感覚では
ないことに安堵して、私は逆らわず意識を手放した。

side out

〈理異菟side〉

腕の中ののちゃんから静かな息使いが聞こえる。どうやら寝てしまっただらしい。……私の殺気受けて直ぐに失神せずに「寝る」って……。なのちゃんの心臓は鋼で出来ているのでしょうか？ 兄様と姉様は普通に失神したのですが。因みに直ぐそこでユーノも失神しています。

で、相手二人は

「つく、化け物だ……」

「い、あ……あう……」

何とか意識を保ち、こちらを睨んでいる。と言っても、妹、フェイトの方は正直睨めていないし、意識が途切れるのも時間の問題です。ク라운は悪態を吐いているが、そんなことを相手に向かつて吐けるだけで、上辺だけの中身の無い覚悟しか持っていない者が殆どの魔導師としては、十分すぎますね。

さて、どうしましょう。あまりあの名を口にして欲しくない為はかなり本気で殺気をぶつけましたが。話だけでも聞いて欲しいと言われましたが、やっぱり今の所為で前言は撤回されるのでしょうか？ 若干情報料の等価交換でなにが貰えるのか気になっていたんですが。

side out

〈ク라운side〉

「つく、化け物だ」

途轍もない殺気を浴びせられ、そう言わずにはいられなかった。今まで、何度も死合いを経験をして並みの実力者などでは怯む事など有り得なかった。

前情報で男と分かっていたけど実際会ってみても男には見えない。普通に女だった。雰囲気でかなりの実力者なのは感じ取れた。でも、その感じではボクと同等だろうと評価した、してしまった。

だが、実際は化け物だった。

戦闘技術などはそれほど離れてない。これには間違いない。なに何故是ほどまでの殺気を身に纏えるんだ！？ 違う、違いすぎる。死戦の数が。いったいどれ程殺し合えばこんな風に至れる？ キミはボクより1つしか年が変わらないのに！

膝が震えそうになるのを懸命に堪える。ボクの隣には守ると決めた大切な存在フレイトが要る。この子の目の前で無様は晒さない！

だが、正直言って今の状態で彼が戦闘を開始してきたら敗北は必死。最悪殺される。駄目出しにさっきボクは彼の触れては為らない部分に触れてしまったらしい。彼の協力得られる可能性をボクが壊滅的にさせてしまった。

だが、何としてでも協力、最低限必要な情報は手に入れられなければ為らない。彼はやっと見つけた最後の希望なんだ。

偶然ハッキングで見つけられた‘魔術’というボクたち魔導師では決して起こせない奇跡の事象を使う者たち 魔術師。彼らでも興味を示す可能性のある物ロストロギア 願望機、ジュエルシード。それを手に入れようと輸送船を襲ったが、運悪く物は次元世界を漂流することになった。そして流れ着いたのが此処、第97番の管理外世界「地球」。魔術師が存在する世界。こんな度重なる偶然が在り得るのだろうか？

そして先々週、偶然、本当に偶然にも魔術師と想われる存在を見

つけられた。それが彼。管理局のデータベースには写真が載ってなかったが、特徴が書かれていてそれが完璧なまでに当て嵌まり調査することにした。

神経を極限にまで摩り減らして尾行した。そして先週、町の中心部でジュエルシードが発動したところに居合わせることに成功した。彼はリンカーコアが無いにも拘らず魔導師の少女二人と現場に現れた。更に結界内にも入った。若し彼が完全なる一般人の部類に入るのなら少女の一人が結界内に入れることは無いだろう。その方が危険なのだから。

これだけでも状況証拠としては十分だったけど、ボクは見つかるのを覚悟でサーチャーのステルス、拾音性を限界にまで上げて音が拾えるギリギリに配置させた。

そして拾った。彼の魔術の詠唱を。生憎発音言語が完全に聞き覚え無いため、どんな内容なのかは全く分からない。でも、彼の魔術が少女の一人に何らかの影響を与えたのは判る。

何せ、少女の魔法がジュエルシードを完全に砕いたのだから。思わず目が点になった。アレにはそんな魔力は込められていなかった。おまけに砲撃速度を速めただけなのだ。物理的にも出来るレベルではないのはボクから見て明白だった。間違いなく不可能だった、在り得なかった。

それを成したのが、間違いなく彼の魔術のお陰だろう。

彼の魔術がボクたちの目的に役立つのかは定かではないが、希望を魅せるには十分過ぎた。

藁にも縋る思いで、ボクは彼に頭を下げた。

（理異菟 side）

「ええ、つと？」

いきなりの事に私は戸惑う。

クラウンが深く頭を下げたのだ。

「君にとつて触れては為らないことに触れてしまったみたいだから、ごめんなさい。これは確認何だけど、その、管理局にあつた魔術師についての情報は君の事でいいのかな？」

少しだけ顔を上げて恐る恐る問い掛けてくるのに対し首肯する。

彼女はそれに安堵し、すぐさま真剣な表情を見せる。

「お願いだ。対価は何でも払うから、ボクたちに力を貸して欲しい。君は優秀な魔術師なのだろう？ その力がどうしても必要なんだ、頼む！」

「いや、勢いよく頭を下げられても困ります。それに何を求めているかを具体的に教えて貰っていませんし。私にも出来ないことはありますから、安請け合いはしたくないですし」

「というかそれよりも先にジュエルシード封印して欲しいんですけど。さつきちらつと横見たらでかくなっているアインが気持ち良さそうに寝転がっているの見てから抱き着きたい衝動を必死になつて堪えているんですから！ このまま生殺しにされたらなのちゃん放り投げてでも抱き着きに行くのが必至です！」

「それよりもまず、ジュエルシード封印してくれませんか？ 私、封印できないですし、危険因子を何時までも放置出来ないのでから、必至に内心の衝動を億尾にも出さずに二人に提案する。二人と言つても基本喋るのは姉の方で妹は無口ですが。」

「だが、私の言葉を受けたクラウンは物凄く気まずそうな顔を見せる。嫌な予感が……。」

「あ、あの、言い難いんだけど……その、ボクも封印は出来なくて……出来るのはフェイトなんだけど……。」

そう言つて彼女は自身の妹を見つめるが、

「……………む、りで、す…」
「ですよね。」

息も絶え絶えになって必死に声を出す子に誰がお願い出来るものか。というか、これって私のせいですよね間違いない。

「でも、封印は出来なくてもジユエルシードを？がす事はボクでも出来るからやって置いた方がいいよね？」

「ええ。お願いできますか？ すみません、私のせいで」

「元はと言えばボクが君の怒りを買ってしまったの原因だしね」

そう言っって苦笑するクラウン。気落ちしてる私を気遣ってくれているのでしよう。

彼女はフェイトを私に預けると寝ているアインの傍に行く。

私は地べたに座り込み寝ているなのちゃんを膝に寝かせ、フェイトの背中に手を回し私のほうに寄り掛からせる。少し顔が赤いのは異性に慣れていないからかな？

クラウンはアインの傍に立つと、デバイスを起動する。彼女の手には蒼く輝く小振りの双剣が握られていた。

「少し手荒に為ってしまうけど、そこは理解してね」

「え？」

申し訳なさそうに告げる彼女の言葉に、絶望の底に叩き落された。

side out

＼フェイトside＼

「え？」

至近距離から絶句の声。リイトっていう彼は、私たちとは使う技術を持つ“まじゅつし”っていう人なのだとお姉ちゃんから教えて

貰った。

今私はこの人に抱き抱えられているのだけれど、男の人と全然話したことが無い私にとっては物凄く緊張して恥ずかしい。心臓の音がやけにうるさく感じる。

彼の顔を覗き込んで見ると、彼は顔を強張らせた後に顔をふにやっと崩させた。

「そ、それは何とか为りませんか？ ど、どうぶつ 猫は傷つけちゃいけませんし、あ、あの、その……と、とにかく、無傷です！」
崩れた顔は今にも泣き出しそうで、それを見た時、胸がきゅつと締め付けられる感じがした。

(うわあ。かわいい、うん、かわいい)

その上必至になって手を握り締めたり上目遣いで見つめている姿は、途轍もない力を秘めていた。ましてやドアップで鑑賞しているので、破壊力は危険レベルにまで達し、見つめていると吸い寄せられる感覚があり、

「ちよつ!?! フェイト!?!? 白夢さん!?!?!?」

何かお姉ちゃんが今までに無いほど驚愕の声を上げたけど、どうしたのかな？

「猫は可愛いですし、にくきゅも最高ですし、あの舌で舐められるとなんかぞくぞくしますし、特に首筋を舐められた日には ひゃん! って近いでsんんつ?!」

彼の言葉で私は舐められたいんだと想い、首筋を舐めて見ると、首を反らして可愛く鳴いてくれたのを見て、体中が疼いて自分でもどうしようもなく、行き成り彼の唇を塞いでしまった。私の唇で。

(そう言えば、舌が、ぞくぞく、するんだよね?)

彼の言葉通りだと舌が気持ち良さそうなので、私は彼の口内に舌を伸ばす。

「っ!?!? ん、んうう!?!」

舌が入ったのを感じた彼は目を見開き、即座に離れようとするけど両手でしっかりと顔を固定させて離さないようにする。さっきま

で息も絶え絶えに為っていたのに、想うように自分の体が動くのに少し驚くけど、

(そっか、この行為のお陰なんだ。じゃ、もっとしてもいいよね) 彼の顔を引き寄せて更に強く唇を押し付けて舌を突き入れる。

そして彼の舌を絡めとり、余すことなく舐め上げ始める。

「んう…んうう、!? ちゅっ…んむうう!」

寝ている女の子に構わずじたばたしようとするから手首と足首にバインドを掛けて動けなくする。そしてまた口内を蹂躪する。

(気持ちいい。不思議と熱くなってくる)

「んふ、ひあひいれひよ? 「ひやめっ」 あむ「んむうう!」 「ぢゆるぢゆる」「ん」「ん」「んうう」「…んく、ごくん」

彼は舌を私の口内に入れてきてくれないので、舌で絡めて引き寄せてから舌を甘噛みして、私の口内に引き込み、彼の唾を吸い取る。ぷはつと唇を離すとつーと私と彼の間には橋が架かる。

彼は荒く息を吐いていて、目が蕩けていた。

(もう一回)

目を瞑り再び彼と戯れようとするが、「なああにを、しているのかなあああ!!! このエロ娘はあああああ!!!」

ドゴスッ!

「はう ! ?*! ?」

脳天に生まれて初めての拳骨がお姉ちゃんからプレゼントされた。私はあまりの痛さに頭を抱えてその場に蹲った。

既にリイトはお姉ちゃんによってバインドを解除され、女の子を抱いて私から遠ざかっていた。

うう〜。嫉妬は見苦しいよ〜お姉ちゃん〜

ド・ゴ・スッ!!!

「痛い~~~~~!?!」

12 第四奏 「運命と愚者」 混迷奏（後書き）

なのは「デイバイン、バスター！ バスター！」

ユーノ「うわ、なのは荒れてるね。気持ちは解るけど」

フェイト「わたし、わかんない 寝取られるヒトの気持ちなん〜て」

ユーノ「ちょ、おまつ！？ 何原子炉に二ト口爆弾投げ込んでんの?! そんなことしたら「くくくくくくつ」「ひいひい!?!」

なのは「犬つころの癖して、随分言うね？ 打ち抜くよ？」

フェイト「犬？ 私はご主人様だよ。犬は当然リイト。私だけのペット 君みたいな発情した猫はそこら辺の雄に愛想でも振りまいとけばいいよ」

なのは「ペット？ 可笑しなことを言うね。リイちゃんはメイドだよ、私専属の。それに、調子に乗らないでね？ 風穴開くよ？」

フェイト「そつちがね。それに、弱い犬程よく吠えるんだよ？」

フェイト・なのは「……………」。

なのは「打ちつつつ抜くつ!?!?!」

フェイト「ブチツツ斬ル!!!」

ユーノ「……………この封時結界って、理論上はズラした空間の計算を致命的なまで魔導で狂わせれば結界内部は消滅するんだよね…
…試すしかないよね、二人を消せる絶好の機会だしっ」

リイト「ユーノ、どうかしましたか？」

ユーノ「っ!? リイトか。…………ちっ、命拾いしたね。駄犬に淫猫」

リイト「さて、あの二人はしばらくあのままでしょうから次回予告をします」

ユーノ「土砂降りの雨の中一人雨に打たれ続けるリイト」

なのは「濡れそぼった肌、濡れて滴る髪、肌蹴ている胸元」

フェイト「濡れて火照った体にしな垂れかかり、」

なのは「ユーフェイ」そして…………ムフフ」

クラウン「君たち、本当は仲いいでしょ？」

ま、いいけどさ。ん？ 次回予告？ 断定できないけど、ボクとリイトかなのが模擬戦
する展開じゃないかな？ どうだっけ、イエレミー」

イエレミー「閃く刃は勝利の証！ 白夜、殲め「クリスタルランサー」うわ！ 危ないじゃないか！ ゲームに当たったらどうするんだ！ ったくもっ。」

まあ、大体そんな感じだよ。ハイレベルな戦闘できたらいいなあ」

クラウン「ゲームするなどは言わないが、あまりやると、他の小説を書く時間がなくなるよ？ 只でさえこの作品と、投稿してないけど、後三つも一緒に書いてるじゃない。少しは自重しようよ」

イエレミー「いいじゃん。アイデアが入って来るんだから。まあ、ストック出来れば1つは投稿出来るんだけどね。何せその三つは書いているのが仕事の昼休みだからね。進まない。因みに三つの内1つは完全オリジナルであと一年は投稿しないのと、二つ目はこの作品と関係してくる『なのは』物。三つ目が『なのは』とある作品の主人公を入れた物ですね」

クラウン「ん？ 時間ですね。

今回、読んで下さって本当にありがとうございます。また読んでいただけると大変嬉しく思います。短いですが、それではまた次回でお会いしましょう」

13 深淵奏 「物語は動く」(前書き)

イエレミー「どうも。

全然時間が取れず、中々執筆出来ない今日この頃です。

それでも短いですが、投稿日は厳守していきますので、何卒よろしくお願いします。

後書きで戦闘がどうの言いましたが、今回は裏話というか、リイトの与り知らぬところでの会話がメインですので、戦闘はまた次回かその次になります。」

なのは「リリカルなのは、始まります」

フェイト「ぶるああああ!!」

くなのはsideく

私は今、テストロッサ家がある「時の庭園」なる場所に来ている。

リイちゃんの殺気から開放された私はそのまま眠ってしまった。
た。

だけど、クラウさん（クラウンのこと）がフェイト（ちゃん付けで呼ぶ気なし）に説教をする声で起きた。

何故か起きた瞬間に凄い不快感が押し寄せて来ていて、腹の虫が治まらなかった。思わず足元で寝転がっていたユーノ（殺気のせいで失神していたのだが）を蹴り飛ばそうかとした位だ。

不快感の正体は直ぐ解ったの。顔を真っ赤に染めて体育座り沈んでいるリイちゃん、何故か恍惚の表情を浮かべて時折リイちゃんの方を向いて唇に触れるフェイトに、淑女としての振る舞いや一般常識を懇々とフェイトに諭すクラウさん。

これらを見れば、乙女の中でピーン！と来たね！

「この駄犬、リイちゃんに襲い掛かりやがったよ 死ねばいいのにくこの糞犬」

「五月蠅いよ淫猫。さっさとリイトから降りろよこの殺ろう そして私にも座らせるよっつ」

時の庭園の一画にあるテラスのスペースで、私とフェイトはリイちゃんの膝の上をめくって洒落にならないほどの殺気をぶつけ合っていた。

テラスには他に駄犬フェイトの母親のプレシア・テスタロツサとクラウさんが居る。この場にはいないけど、それに加えて駄犬と母親の使い魔がこの時の庭園に住んでいるみたい。

その家に私とリイちゃんは招かれている。あ、ユーノは居ないよ。あいつ、リイちゃんの殺気で失神してから一時間経つても目覚めなかったから置いて来た。後のことはお兄ちゃんに任せてあるの。

いや、アインに取り付いたジュエルシード封印（因みに封印したのは私。この人たち　主にフェイト　に借りなんか真つ平なの）して、クラウさんにユーノを担いでもらい……え？　リイちゃんは背負わないのかって？　駄犬がリイちゃんに無理やりキス

しかもフレンチ（ディープキスのこと）　してくれたお陰でリイちゃんの心の傷、トラウマに近い物を再発させやがってさ。縋り着く様に私を抱き締めてきたんだよね。微かに震えて後ろから私のうなじに顔を埋めながらぎゅっと抱き締めてくるリイちゃんは、もう~~~~最つつつ高に可愛かったよ　もう保護欲というか何と云うか……監禁欲？が刺激されまくっちゃってね、食べちゃいたかったよ　うん。襲い掛からなかった私は偉いと想うよ？　私の自制心は歪曲フィールドで覆われているね、絶対。じゃなかったら襲い掛かってるし。貪っちゃてるし。舐めまくるし、猫の様に。その上で~~~~（とても九歳の女の子が言つて良いことでない数々の淫語）するよ、しちやうよ、しまくるよ!!!?」

「黙れこの変態!!!」

駄犬がイスから立ち上がりデバイスを起動させて私に向けてくる。あれ？　声が出ちゃってたよ。自重自重。

「リイト！　そいつから離れて!!!　そいつ変態だ!!!」

「いや、…人の事いえないわよ、フェイト」

「うん。間違いなく変態だよ、フェイト。それと母さん、鼻血出てるよ?」

「そういう貴方は目が血走っていて涎が滝の様に出てるわね？」

「二人は黙ってて！」

今にも噛み付いて来そうな駄犬が母親と姉に突っ込まれてるけど、当の本人は認めない様子。……この家族、変態しか居くない？

「ふるふる（ぎゅっ！）」

駄犬に声を掛けられただけで脅えるリイちゃんはいやいやをしなから膝の上に座る私を抱き締める力を強めてくる。うん、

「最っ高……」

幸せ噛み締めながら恍惚の表情で、ぐっ！とサムズアップ。なのは、辛抱たまりませ〜ん

「むき〜〜！！！」

遂に我慢の限界か、襲い掛かって来ようとするけど、クラウさんに羽交い絞めにされる駄犬。

「ふっ」

「っ！？ 変態の癖に〜〜！」

それを見て鼻で笑うとじたばた足掻いて襲ってこようとするけど出来ないフェイト。変態？ へんたいという名の淑女だから褒め言葉なの

「淑女へんたいで良いよ 淑女らしくリイちゃんを愛でるから」

私がそう言うとかラウさんとプレシアさんが信じられないものを見るかのようにぎょっとしていたけど気にしない

「私は、変態と言う名の淑女だも〜んっ」

この後も私はリイちゃんに抱き締められながら、一年間に数回あるかないかの貴重な時間を文字通り身体全体で味わっていた。

時たま私がリイちゃんの首筋を舐めたり、唇を奪ってもリイちゃんが離れず、寧ろより深く抱き締めてくるのをフェイトが「何でなのはばっかり…私はあれから触れてすらいないのに。……憎しみが人が殺せたら、憎しみが人が殺せるならあああ！」と、憎しみというか、呪詛としか思えないレベルで私を射殺さんと睨みながら

叫んでいた。

全く。身も心もリイちゃんの味を覚えている私にとって、リイちゃんを私の願い通りに動かすなんて造作もないよ

羨望や憎しみを向けてくる三人を視界に捉えながら、にやりと嗤っていた。

因みにこの三時間後に理異菟は元の精神状態に戻り、全員を落착かせてから、テスタロッサ家の目的を聞き始めた。

~~~~~

~~~~~家の深夜~~~~~

「おい、ム！ 何で てが倒れたのに蒐集に行かねえんだよ！？」

「……主の命に逆らうのか？ ー？」

「あたしだつて破りたくねえよ！ けどなあ！ それで や が助かるなら、あたしは幾らだつて破つてやるよ！！ お前らはどうなんだよ！ シ ム！！ ヤ ！！ ザ ラ！！ 今までのように主の命で動くだけなのかよ！？ あたしは嫌だぞ！！ ここで動かなかつたら『守れねえんだよ』！！ 何のための『守護騎士』だよ！？」

「「「「……」」」」

「まだあたし達が目覚めてから一年も経つてねえ！ でも、長い時

の中で感情を封印したあたし達が、その短い間で感情をまた出せるように成ったんだ。今までの主なんかとは違う！ 心からあたしは主の命令に従えたよ。だけど、それでも！ 命令よりも大事なものが在るだろうがああ！！！」

「……そうだな。私も心から主の命に従えたのはきつと今回が初めてだ」

「私もよ。まあ、命令って言っても、殆どお願いみたいなもので強制なんて何もなかったけど、悪くなかったわ」

「下らぬ願いもあった。だが、それを不快とは感じることもなかったな。だが、主が居なくなればそれも無くなってしまう……ば、」

「やることは一つ、闇の書を完成させる、だな」

「ったく、遅えぞこの馬鹿。いいのかよ『烈火の将』？ 主の命に背いてよ？ 蒐集は駄目なんだろう？」

「一番最初に破るつもりで居た奴がよく言つな、『鉄槌の騎士』。

だったら主の命でも『守る』か？」

「ハッ、あたしが『破る』のは主の命で、『守る』のははやだ。

“『壊す』と『守る』は同義語、壊し続けなければ何も守れない”。

それを“あいつ”が身を以って教えてくれたしな。

だから、ぶっ壊すよ、全部」

「……そう言えば、彼に手伝ってもらえれば早いんじゃないかしら？」

「シャ、これは我らの問題だ。他人を巻き込もうとするな」

「その通りだ。それに、下手をすれば『奴』と戦うかも知れないしな。……心が躍るな、早速いくか？」

「おい待てこの戦闘凶馬鹿。あいつに迷惑掛けるならあたしとアイゼンが相手になんぜ？」

「今月はまだ奴と死合えてないのだ。そこをどけ、チビツ子」

「（ブチン） どうやらアイゼンの落ちない汚れにされてえみてえだな……にやむにやむ？」

「（ぶちん！）ぶつぶ、いい度胸だな。レヴァンティンの錆にして

やるじ」

「「……………」」

「「表で出るやこの野郎ー！！」」

「お、おい二人とも、静かにしないと」

「そうよ、はや ちゃんが起きちゃったらどうす」「うるっさいわア
ホー！」「遅かった」

「最近リイにいが足りなくて全然寝れないうちに対する嫌がらせ
なんか！ いい度胸や！ 二人とも其処に直りい、そのペツタンコ
とメロン、揉み倒し足るわあああ！！」

「「わやー！！！！」」

~~~~~

午前零時。とある高層ビルの屋上。

そこに薄汚れたローブを身に纏い佇む独りの男が月を見上げてい  
た。

「くくくつ、おいおい何時まで隠れているつもりだよ？ 平行世界  
の魔術師と魔法使い？ それに宝石翁？」

男は月を見上げながら独り喋る。

すると、男の後方で突如空間が歪む。がそれは一瞬で元に戻り、  
変わりにその場にはさっきまで居なかった筈なのに、二人の女性と

一人の老人の姿があった。

そしてその三人が現れた瞬間に、白夢理異菟の本気の殺気と同等異常の、空間が間違ひなく悲鳴を上げる殺気が渦巻いていた。特に女性二人から。

女性の名は蒼崎青子と蒼崎橙子。この二人は姉妹で青子が赤髪のロングストリートで妹で魔法使い。橙子が蒼髪のショートヘアで姉であり魔術師。二人とも年は15から17辺りと思われる。

老人の名をキシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグという。人間ではなく吸血鬼になった存在で魔法使い。

青子とゼルレッチの二人は魔術でいう、本物の魔法使いだ。橙子の方も魔術師ではあるが、最も魔法使いに近い魔術師と呼ばれる存在だ。だが、

「それで、何かようでもあるのか？ そんながん首揃えて」

その三人を前にしてもローブの男は怯みもしない。ましてや三人は男に向けて全開で殺気を打ち込んでいる。この三人の全開の殺気を打ち込まれて一瞬も怯まない存在が一体どれだけ居るのだろうか？

「貴方とは初めてね、ダレデモ無クダレデモ有ル魂元？」

無表情に近い青子が男に話しかける。

「それで用件は何だ魔法使い？ そこまでこちらは暇でもないんだが？」

「そろそろ二人だけじゃなくて私まで話す余裕が無くなるから単刀直入に訊くわ。貴方がやるうとして、即刻止めて、貴方達全員、私らに殺されなさい」

橙子が何処からかトランクを取り出し、ゼルレッチが宝石のような小剣を取り出し、青子が魔術回路を起動させる。

だが、それでも尚男は至って平静。

「おいおい、物騒だな。俺が何を「ライトを消そう」としているんじや、殺されても文句無かるう？」ちよつと待て宝石翁、流石にそれは誤解だ。あいつに死なれると俺は逆に困るんだが？」



問答無用で殺そうとしてくるゼルレツチの言葉で初めて怪訝な顔を見せた男。そしてその男の誤解という言葉で橙子が眉を吊上げる。「私の知り合いの未視の魔女が十二月の二十四日に、全ての平行世界からリイトが消えたのを視たんだ。具体的にはこの世界のリイトが死んだと同時に全てのリイトから魂が消えたらしい。あらゆる世界の魂に干渉などという芸当が出来るのは貴様だけだ。アインツベルンでさえ魂の物質化までしか可能に出来なかったを、貴様は魂の全てに大して干渉が出来るはずだ。よもやこの件に何も関与していない、とは言うまいな？ 例え今この場のお前本人が関与していても、ダレデモ無クダレデモ有ル魂源の何れかが関与しているのは間違いない。その場に居合わせたのも視えたと言っていたしな」

橙子のその言葉を受けて男は数瞬考える素振を見せ、意を決したように口を開く。

「手を貸せ三人とも。このままリイトが消えるようなことが在ったら 全ての世界が潰れるぞ？」

13 深淵奏 「物語は動く」（後書き）

フェイト「そっだ、作者を消そう」

イエレミー「……………いやいやいやいや!? 何

『京都に行こう』適なニュアンスでいつてるの?!」

フェイト「だって私今回リイトに触れてないもんっ。我慢できないもんっ!」

イエレミー「いや、自業自得でしょ? 普通初対面でやりますか?」

フェイト「やるし。とりあえず、私の次回の意見を聞いてほしい」

イエレミー「嫌です。……………バルデツシユの魔力刃が酷く振動しているんですけど、これってもしかして超振動で分子レベルから分解するって言うアレ?」

フェイト「よく分かったね。お願い、聞いてくれるよね?」

イエレミー「私は謀略には屈しますが暴力には屈しません! トラップカードオープン! 『HEIWAオハナシな鐘』! 出でよ、高町なのは!」

なのは「眠いの〜」

フェイト「っち! なのはか。でも、なのはは寝起きでヤル気なし。このまま勝負を!」「甘い! 甘すぎです! リイトのラブコメよ

りは甘くないですが「!？」

イエレミー「速攻魔法『賄賂』! なのちゃん、この写真を上げますから何卒……」

なのは「ん〜? ……ブバツ! つく、鼻ぢが止まらない……。貰っていいの、これ?」もちろん「わかった。駄犬を潰して来る」

フェイト「なのは!? それ見せてくれないかな!?!？」

なのは「いや、絶対に嫌。間違いなく妄想に使われるから嫌。リイちゃんを妄想で色々していいのは私だけなの」

フェイト「作者! あの写真は!?!」リイトの入浴シーンの激写「つぶ!」想像しただけで鼻血が……」

イエレミー「因みに私はリイトと裸の付き合いをしたことが」「ぶつ殺す」「あれ? 早まった?」「全力全解!」「疾風天災!」遺書でも書こう」

なのは・フェイト「プラストエンド!!」

イエレミー「ぎいいいいいやあっあ!?!?!?!?」

クラウ「こんな駄作を読んでいただき、本当にありがとございませす。

次回については、最近プロットが混雑し過ぎているために、決まってるので断言出来ませんが、なのはとフェイトの模擬戦を入れ

たいと考えています。

それと、今回出てきた御三方については、パソコンを買い換える辺りで思いつきました。また少し出すかもしれませんが、あまりfa teキャラは出ないようにします。出たとしても今回の三人が主体です、はい。

こんな駄文ですが、これからも付き合っていただければ嬉しい限りです。

次回でまたお会いしましょう」

ユ一ノ「今回僕セリフなし。出番もなし」

## 14 間奏（前書き）

すみません。更新遅れました。次は守るんで、どうか見捨てないでくださると嬉しいですよ。

本当は戦闘に入りたかったのですが、出さなければいけないキャラがいたのでやっと出しました。当初の予定ではもっと早く出すはずだったのに。どこで狂った？

なんかぐだぐだですが、生あたたかく見てくださると在り難いです。

正直、今回はホンと駄文だと自分は思います。前書きで書くことではないかもしれませんが、すみません。

## 14 間奏

時刻は午前零時を回る頃、目を開けたら、私、白夢理異菟は海鳴市の繁華街にあるホテルの一室のベッドで一人の女性と一緒に寝ていた。

### 溯る事五時間前

プレシアさんから彼女たちの目的を聞いた私となのちゃんは、フイトに転移魔導で高町家の近くの公園まで見送って貰い、そのまま家に帰る。

帰宅途中、なのちゃんと会話することはなかった。時々心配そうになのちゃんが見つめているのに気付きましたが、私はそのまま歩きました。

家に着くと「お帰り〜」と姉様がリビングからひょいっと顔を出して出迎えてくれたのでただいまっとな返そうとしたら姉様が「どうしたの!？」と叫んで肩を掴んで来て、呆気に取られました。

私は何を言われているか解らず首を傾げると、姉様の叫び声を聞いて玄関に兄様や父さんや母さん、果ては失神して先に帰っていたユーノまで集まって来た。

兄様や父さんまで姉様の様に私を見るなり驚く。それでも解らずいると姉様に手を引っ張られる。洗面所の鏡の前に立たされる。

鏡には、瞳に涙を溜めて顔を歪ませて泣く寸前の子供が、映っていた。直ぐ傍には美由紀姉様も映っている。

そこで漸く鏡の子供が私だと判った。そして私は 逃げた。

「っ、理異菟!？」姉さまの声を無視して私は家からとび出した。脇目も振らずに唯一心に逃げる。

只管走り続けていたら、海鳴の外れに在る、小さな公園に着いていた。

まるでこの公園だけ海鳴市から切り外されている印象がある公園だが、理異菟はこの公園から見上げる夜空が好きだった。この公園にはブランコとベンチ、水道と噴水が在るだけ。

疲れた私は水を飲み、噴水の直ぐ傍に設置されているベンチに横たわる。普通の公園では決してやらないが、此処には基本誰も来ないのでベンチに寝そべりそのまま眼を閉ざす。

時間を置かずに私は眠りに落ちていた。

体感で一時間位経つと、自然と意識が覚醒し目を開けると、

「やあ、クー。4ヶ月振り、かな？」

白夢理異菟にとって、最も危険な人物　リスティ・楨原が居た。

行き成りのことで、しかも最も会うのを避けている人の突然の登場に私は酷く狼狽して「え、あ、うあ」と意味不明な言葉を連発してしまっていた。

「えっと、お久しぶりですね…リスティさん」

少し落ち着いてから言葉を返す。言葉を返す間ずっと慈愛に満ちた眼差しを向けられていたから居心地が悪いです。

「白夢理異菟はリスティ・楨原を避けている」。

これは厳然たる事実です。私も自覚しています。ですが、これはどうしようもないのです。

彼女の眼差しが、彼女の声音が、彼女の醸し出す空気が、違うのに、全然違うのに、

母様と、重なってしまうのですよ。

「ん、クー？」

「！？ その呼び方で呼ばないでください！！」

覗きこんできた彼女に向かって私は激情を声に乗せる。誰も居ない公園、しかも夜では余計に声が響き渡りかなりのボリュームと成るが、

「コラ、静かにしないと、ね」

全く気にも止めずに柔らかく微笑み、

えいっと私の頭を抱き込んだ。

「っ！？ は、放して、放してくだ」

「 放さない、放さないよ、絶対に、ね…」

必死でもがいて抱擁から抜け出そうとするが、耳元で告げられた言葉を境に、次第に力が抜けていき、抵抗出来なくなってしまうていた。

「それで、一体どうしたんだい？ クー」

腕の中で大人しくなったクーをあやす様に頭を撫でながら、ボクは此処に来た目的 クーのプチ家出理由を問い掛ける。

何しろボクも現状がよく把握出来ていないんだ。海外で美沙斗さんに協力してもらい仕事を終えて帰って来て高町家に寄っていったら何故か桃子さんとなのちゃんしかいなし、理由を訊いたらクーが泣きそうな顔をして帰って来たらしく、突然家を飛び出したとしか分からないって言うし。他の三人は探しに行き、この二人は家で帰ってくるのを待つらしいし。とりあえずボクもクーが居そうな場所を当たってみたら一発でビンゴだったし。

腕の中のクーはもそもそと居心地悪そうに身体を動かし、言おうか言うまいか迷っている状態みたいだ。



ボクは彼が話すまで頭を撫でつつゆっくりと待つ。

しばらくそうしていると、クーは顔を上げておずおずと理由を話し出した。

自分を頼りに会いに来たテストロッサ家のこと。

その人たちの願いが死んだ長女、アリシア・テストロッサを蘇らせる事。

彼女の死体を見たら、クーでも出来る可能性が高いということ。

それを聞いたテストロッサ家全員に懇願され、彼女を蘇らせる事に協力することになったということ。

そして、失った者を取り戻すことが出来る彼女たちにクーは嫉妬してしまつたということ。

嫉妬した自分がとても浅ましく、でもやはり妬ましく、どうしようもなく羨ましいという感情が渦巻いていたということ。

家に着いて鏡で色んな感情を持って余っていて泣きそうな自分の姿をこれ以上見られたくなくて家を飛び出してしばらく頭を冷やすつもりだつたと言う事。

これらを聞いたボクの感想はというと、「ああ、クーも子供なんだ」だ。

思わず呟いてしまい、クーが頬を膨らませたけど、そういう仕草が子供だと思っただけ。

にしても今日のクーはボクに色んなクーを魅せてくれるなあ。普段ボクに会う時のクーは大抵他人行儀で口数少なくて警戒心顕にしてるしね。ま、ボクはそんな毎回気にせずそんな壁は無視して手籠めしようとしてるけどね。だってクー可愛いし。ぶっちゃけ今のクーはボクにとってはギャップ萌えという状態なので、お持ち帰りにしたい。

そこではたつと気づく。

これって、初めてのチャンス？

びくつ。

今日のことを殆ど話し終えてそのままリステイさんに抱き締められていると、急に悪寒が走った。なんなんでしょうか？

「ところでクー。今日は家に帰るの？」

私はその言葉でさつきとは違う意味でびくつとする。

「い、いえ。工房の方で寝泊りしようかと」

町外れにある誰も使っていないアパートを拝借して自分の工房として使わせてもらっています。もちろん認識障害の魔術で誰も気づかないように配慮はしています。

まあ、そんな訳で寝泊りできる場所はありません。

「うーん、あのボロ屋のアパートかあ」

別に住んでる訳ではありません。工房として使っているだけです。

「家に連れ帰ったら皆にくわれるのは目に見えてるし……しょうがない、どこかテキトーなホテルに泊まるかな」

よっこいしょっとリステイさんに抱かかえられた。つまり、お姫様抱っこされた。

そしてリステイさんは背中にリアーフィンを展開し、飛んだ。

「ちよ、ちよつと！？ 何してるんですか？！ 見つかったらどうするんですか？！」

慌てて私がそう聞くと彼女はすいっと顔を近づけて笑顔で、

「じゃあ、誰にも見られないように認識障害の魔術でも使ってよ」

顔の近さに驚きながらも、確かにそうすれば問題ないと想い、逆にそんなことも想いつかない程今の自分は頭が働いてない事実に驚く。

ため息し、ルーンを使った簡易の結界モードキで認識障害を半径5メートルまで展開する。

するとリステイさんは、

「ありがとう　ちゅっ」

私の目元に近いところに唇を押し付けてきた。

「な、なななな何を、」

「ん、キスしたただだよ」

私が真っ赤になつて驚いているのを彼女はキスした近さを保ちながら平然と微笑む。

（こつこつところは母様にソックリなんですから、危険です）

仕草や声、姿は似てないのに、こつこつ悪戯好き、というか私を困らせるのが好きなのは一緒なようで否応無しに母様を彷彿とさせる。

そんな彼女が苦手で、今の自分を壊してしまう危険な人だというのに、私は避けなければならぬのに、完全に避けることをしてはいない。それは単に彼女が母様を想わせるから。

だから、どうしても突き放せない。

（私は：まだ、過去を清算出来ないのですかつ）

ホテルに着くまで海鳴市を見下ろしながら、自分の弱さに唇を噛み締めていた。

リステイさんが何処か遣り切れない表情を私に向けているのに気付かずに。

飛行すること十数分、繁華街に並ぶ高層ビルの1つに降り立つ。どうやら此処で泊まる予定のようです。

行き成り認識障害の結界を解くと周りの人に驚かれるのが目に見えるので、ホテルの中に入りながら徐々に狭めて行き、最終的に解除する。

特に違和感なくフロントの人に声を掛けるリステイさん。二、三話し手鍵を受け取っているけど、普通こつこつホテルと違って予約しなくていいのですか？ 鍵を受け取りすたとエレベーターに乗りに向かう彼女に着いて行き、中で指定の階に着くまでの間にそれを聞いてみたら、此処のオーナーと知り合いで、かなり融通を利かせて貰う事ができるとのこと。何でもこつこつというホテルは、オーナーの采配で、特別な友人や客が何時来てもいい様に、何部屋か空い

ているものなのだそうです。

話し終わった頃には部屋の階に着き、部屋に向かい鍵を開けて中に入る。

部屋は、何故か旅館の様に畳で、和風だった。ホテルって洋風の部屋じゃないのですか？

「今時何処もこんなもんだよ？ 外国じゃあるまいし。ホテルって言うのは大抵その国の部屋作りが多いよ。利用者の数は圧倒的に地域国民なんだから」

「そうなのですか」

何気に私はホテルとか泊まったことないので分かりませんでした。海外はロンドンしか行きませんし、「時計塔」に私の部屋も用意されてますからホテル使いませんし。

「ま、そんなことはどうでもいいからさっさとシャワーでも浴びよう。帰国したばかりでボクも疲れているんだ」

そう言っけてリステイさんはバスルームに向かう。私を引き摺って。「って、何するんですか、放してくださいよ?!」

「だが断る〜」 クーに拒否権なんかないからね」

脱衣所に入るなり押し倒されて馬乗りにされる。

「ちよ、ちよつと重いですよ!」

HGS患者特有の性質のせいで彼女たちは必然的に私たちより体重がある。それにのられたら貧弱な中学生の私なんか胃のものが逆流します!

ピキッ。

「女性に重いはないと思うんだよね〜〜〜っ!」

ずいっと顔を近づけてにこやかに笑っているけど、血管が浮き上がっていますよ。

「髪洗うだけで許してあげようかなっ、と思っていたけど……全身くまなく洗ってあげるよ〜!」

「きゃ〜〜〜!」

何も反応できずに上着とシャツを剥ぎ取られて上半身裸で馬乗り

にされている。

にいいつ。

リステイさんが口を吊り上げる。

(こ、怖い！)

「さあ、綺麗に洗われようか？」

「いや~~~~~!!」

<理異菟の名誉の為に閲覧禁止>

「もういや」

ぼふつ。

羞恥で死ねる地獄シャワーを終えた私は力なくベッドにダイブする。部屋は和風なのにベッド。それに疑問すら抱く余裕はなかった。

「ねむ…い、です……っ」

「あ〜こらっ、寝るなクー。髪乾かしてないよ、お〜い。クー、ね……よ、っ……!!」

今日一日の感情の起伏が激しかった為体力を消耗していて、止めにさっきのせいで残りの体力が根こそぎ奪われた為に、意識を保つことが出来ずに理異菟は眠ってしまった。

そして冒頭に戻る

(ん~~~~、あ、あの後寝てしまっていたのですか)

目を開けたらまだ夜中で、隣にリステイさんが寝ていたので何事？と疑問に思いましたが、割と直ぐに思い出すことが出来て現状を把握。

「そついえば、無断外泊です………またアレですか」

咄嗟に思い当たった言葉を呟いたら、家に帰ったら待っている罰にテンションが急直下した。

溜息し、とりあえず今はそれを忘れて、他に考えなければいけないことを考える。

一日中感情を使い、疲れて寝たことで頭はかなりリフレッシュされている。しばらくは情緒不安定になることもない。

(というか、間違いなく今日のことは孤独と拒絶による精神の磨耗が原因。感情を表に出していれば問題は無かつのですたが、思ったより磨耗する周期が早くなっています。

このまま拒絶も孤独の恐怖も磨り合わせるなら、手遅れになります。過去を清算しない限り、このままですね。父さんたちとも、向き合わないといけませんね)

この件が片を着いたら話し合う、と決める。

それよりもまずは目の前の問題。テストタロツサ家からの依頼。

アリシア・テストタロツサを蘇らせる手立てはある。

だけど、足りないものがある。たった1ピース。

それは、戦力。星の守護者と渡り合える程の戦力。

まずは近場から声を掛けないと。

「騎士たちにも協力を仰がないといけませんね。彼女にも今度学校で協力を仰いでみますか……デザートが大量に必要ですね」

#### 14 間奏（後書き）

今回も読んでくださってありがとうございます。最近仕事が忙しく中々時間が取れず苛立っている作者です。

最近手抜き感が物凄く出ているので、次ではそれが少しでも改善できるようにしていきます。出来てなかったらすみません。

次回ではきちんと楽しんで読んでもらえる様に頑張ります！

次回でまた

15 第五奏 「騎士と魔導士」 前奏（前書き）



15 第五奏 「騎士と魔導士」 前奏

喫茶「翠屋」

カラン、カランというドアに備え付けられている鈴が店内に鳴りお客の来店を知らせる。

入ってきたのは二十歳に入るかどうかの女性二人。

今の時間帯は午前十一時を回る頃。この時間帯に来る女性の大半が此処海鳴市の大学に通う者が多い。必要な単位を取り終えた大学生は大抵その後の講義はサボるのが常。その講義の時間を近くの喫茶店で過ごすのは珍しい訳でもなく、この翠屋もそういう用途で使われていることが多い。今入ってきた二人の女性も同じようだ。

来店した二人に店員がすつと姿を現す。

「いらつしゃいませ。二名様ですか？」

「あ、はい。そうで……す……」

店員に呼び掛けられてそれに片方の女性が応えるが、次第に声が小さくなっていった。

「どうかしましたか？」

「い、いえ何でもないですっ」

店員が首を傾げるが女性は慌てて首を振る。

「それでは席にご案内します」

そう言つて店員が先導し女性二人はその後に着いて行く。

さつき受け答えしたは別の女性が受け答えした女性に近付き、

「びつくりしたつしよ？」

「当たり前。てかヤバくない？ マジ可愛いんだけどこの娘。格好からして男の子だね、女の子にしか見えない」

「でしょでしょ？ 本当は第三日曜日しかいないんだけど、何故か今週は月曜から連日で五日間もいるんだって！ 昨日友達に聞いて

さ、半身半疑だったけど、何でだろ？」

「第三日曜日ね。さあ？ それよりも、あの子と写真とか撮って貰えないかなあ」

「あ、『いやしのひととき』っていうランチにあの子の写真が二枚ついてくるよ」

「それ頼む！ で、何種類ぐらい在るの？」

「さあ？ 随時追加されているらしいし。あと、本当に少数だけどあの子の八歳時の写真も紛れるみたいよ？ 私も持っているし」

「え！？ 見せて見せて！」

そんな会話が店員、白夢理異菟の後方でやり取りされ、彼は疲れた様にため息を零す。

「それではごゆっくり」

出来上がった料理を運び私は席から離れる。

「ん？」

ふとカウンターのの方を見ると、母さんが手招いていたので、食器を下げるテーブルが無いか確認し、それから歩み寄る。

「今日はもう終わりで良いわよ」

それからすつと奥のボックス席を指差す。

「用事、在るんでしょう？」

奥には、テーブルの上に大量に置かれているデザートを一心不乱に食べ続ける少女がいた。

「あのデザート、理異菟持ちなんですよ。このまま食べられたら破産するんじゃないかしら？」

「……着替えてきます」

やけに高いものばかり置いてある気がする。これ以上出費が重なるのは御免被りたいので私はあがる事にした。

更衣室に入りウェイターの格好からショートパンツとジャケットに着替える。

更衣室から出ると母さんと父さんから「お疲れ」と言われ会釈で

返し、奥の席に向かう。向かいながら右手で宙にルーンを描き、奥の席のテーブルに刻んであるルーンを発動させて認識障害の結界を張る。

「お待たせしました」

そう言っつて少女の対面に座る。

彼女は私のことを一瞥するが、またデザートに視線を戻しどんどん平らげていく。

(どうやら食べ終わるまで待つしかありませんね)

彼女が全部食べ終わるまで私はミルクティーを自分に淹れて一息ついていた。

「ふう、食ったな。やはり此処のデザートは他のとは一線を超えている」

「それはどうも」

待っている間に一度飲み干したミルクティーをもう一度淹れて私に戻ってくる頃には彼女は全部平らげていた。皿が置いたままだと嫌なので、私は仕事でもないのに構わず皿を下げて彼女に紅茶を淹れて戻る。

「ん、スマナイな」

彼女は目線で1つ礼を言い紅茶に口をつける。

「美味しいな、相変わらず」

紅茶を飲む姿は様になっていて思わず魅とれてしまった。正確には最後の微かな微笑にですが。

「それで、何か話があるのだろうか？ お前は今週一回も学校に来ていないからな、あの時みたいに巻き込まれたのか？」

彼女はカップをソーサーに戻してから問い掛けてくる。

「いや、巻き込まれたと言えば巻き込まれたのですが…。それより、貴方に学校のことは言われたくないですよ。貴方もまたサボっているのでしょうか？」

「失礼な。昨日登校したぞ。二時限目で帰ったが」

「……駄目じゃないですか」

私が呆れると、彼女は「そんなことはどうでも良いだろう？ それより早く話せ。またお前の奢りで食べまくるぞ？」と催促してくる。

学校のことはどうでも良くないと思いますが、彼女の場合は私が学校に通っているから仕方なく学校にいるのだから強く言えませんね。

これ以上時間を無駄にしないためにも私は、聖王教会の騎士、フィア・バラージェスにジュエルシードのこと、テストロッサ家の事情、私のお願いについて全て話した。

話している最中にプレシアさんの名前が出た時、フィールが凄い勢いで食い付いて来たので、どうかしましたか、と聞いたらプレシアさんは「大魔導士」で名が通っていて、今でこそ研究やら何やらで裏にいるが、全盛期の頃はフリーの魔導士の中でも最強を誇っていたとのこと。特に空間跳躍の射撃、広域魔導の行使は圧巻の一言。一度詠唱を開始したらその場から一步も動かず、全ての射撃砲撃を広域魔導「サンダーレイジ」で薙ぎ払い、広域魔導を空間跳躍で相手の頭上から落とし殲滅する。魔導士としての格の違いを魅せ付けるその姿から畏怖と畏敬を籠めて「大魔導士」と呼ばれる様になったとのこと。

フィアは裏で動いていることが多かったから知る機会が多く、一度思う存分戦いたいと思っていたらしい。

まあ、彼女が戦える状態ならの話ですが…彼女は重病人と変わらないほど体の内部が遣られていてでしょうから。私が彼女の実力を其処まで見抜けていなかったのも、それが原因ですね。ま、直してあげますけどね。子供だけ助かって親が死ぬとか、私は絶対に許しませんから。

途中色々話が脱線したり小休憩と称してフィアがまたデザートを食べ始めたせいで話し終えるのは二時半。

店内に人が入り始めた頃。

(今日はなのちゃん五時限しか無い筈ですから、もう帰ってきますかね。おやつでも作りに帰りましょうか?)

「ん、そろそろ帰るか　と、思ったけど」

私が時計を見ながら一度家に帰ろうか考えていると、フィーアが立ち上がり帰る素振りを見せ　一瞬スルリと懐に入られ密着された。

「最近死合っていないから欲求不満なんだ。満たしてくれないか?」

「嫌です。ついでに近いです」

しなだれ掛からないで下さい、息が掛かっています。

寄せてくる体を押し返そうと片に手を掛けて力を入れて、

「!?!?　うわっ?」

押し返す程度の筈がそのまま勢い余って、押し倒してしまった。

「ふっ」

下ではフィーアがしてやったりと厭らしい笑みを浮かべていた。

押し返す一瞬、フィーアは力を完全に抜いて押され、次の瞬間にはこちらの手首を引っ張りそのまま重心を後ろに向けて倒れたのだ。そして手首を離し、私が腕を立てている左右の間に入っている。

何処からどう見ても私が彼女を押し倒した様にしか見えない。

店内にはまばらだけど人が居る。いくら奥の席でも通路に倒れ込めば音がして気づかれるし何より見られる。当然今も何事?と思つた客に見られている。

「足を引っ掛けてしまいました。今、退きますね?」

わざと聞こえるようにして、あくまで事故に済ませようとし、早く退こうとしたが　腕と足がピクリとも動かせない。

「(バインドに幻術まで組み合わせるなんて、手が込んでいますね?)」

見えないが、四肢の間接部分に何か圧迫感が纏わりついていて、これがバインドだと分かった。即座に魔力を流し込んで自壊させようとするが、

「あっ、んんっ」

行き成りファイアが妖しい声を上げた。これには私もぎよっとする。そのせいで魔力も止めてしまい、其処で彼女の意図に気づいた。

「（最低ですね）」

「（何とでも言うってくれて構わない。私が聞きたいのは要求に対してのYESのみだ）」

（悪魔ですね）

内心で毒づくが、対抗手段が何も無いので、私は彼女の要求を飲まざるをえない。

「（分かりました。お望み通り死合つてあげますよ。但し！ 一時間のみです。それ以上は駄目です）」

これ以上は譲れない。彼女と一度死合つとどんどん泥沼化していくので、早期に終わらせないと大変被害を被ることになる。

「（仕方ない、今日はそれで我慢しておこう）」

そう言つて彼女はバインドを解除する。

「ふう」

嘆息し彼女の上から退く。

そして振り返ると、

「リイちゃん、ナニ、してたのカナ？」

前髪が垂れていて表情の見えない、なのちゃんがいた。

15 第五奏 「騎士と魔導士」 前奏（後書き）

すいません。短くてすいません。

本当に時間なくてまともに書くことが適いません。まあ、いい訳ですが、結局は。

楽しみにしてくださった方には本当に申し訳ないです。

今月一杯はまともに時間がとれないので、急ですが、17日の更新は休ませて頂きます。

27日は正直分かりません。少しは書けると思いますが、次回は戦闘にしたいので、中途半にしたいくないですし。

八割がた休むということ。

本格的な再開は10月からですね。

あゝ眠いです。先週一週間の合計睡眠は5時間です。

皆さんはちゃんと寝ないといけませんよ？ 体に悪いです。

次回こそ、ちゃんと投稿したいです。

こんな駄文、読んで下さった方々本当にすいません。そしてありがとございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7497k/>

---

魔法少女リリカルなのは 魔法少女は儚き幻想《ヒト》と共に歩む

2010年10月14日04時54分発行